西29号墓（第１５２図）

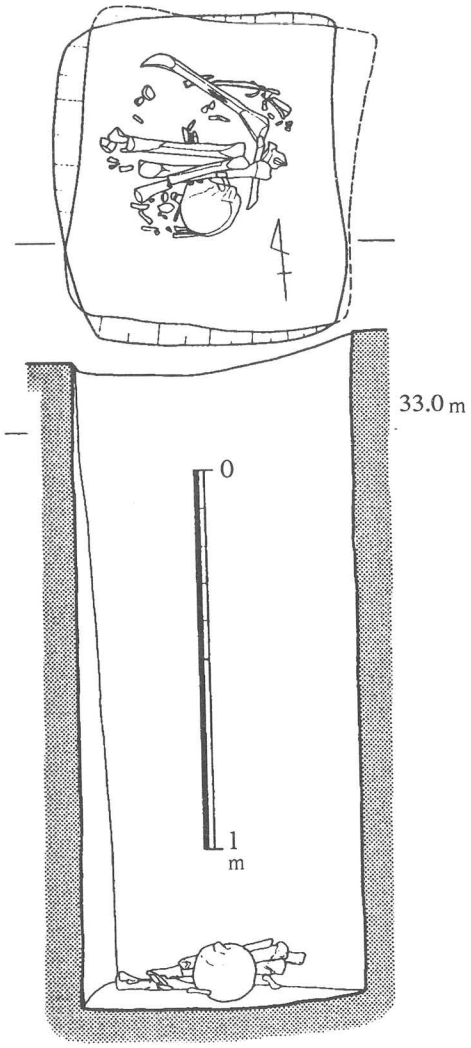
墓域のやや南に位置する。西28号墓の西側に位置する。平面は正方形の素掘り土壙である。大きさはやや大きく、長辺が83㎝、短辺75㎝を測る。深さは深く、検出面から180 ㎝を測る。主軸の方向はN－３－Wである。ほぼ垂直に掘り込まれている。土壙内からは人骨が１体が出土した。

人骨は熟年後半～老年の男性と考えられる。仰臥坐位でWを向いている。

西30号墓（第１５３図）

墓域中央に位置する。平面形は小判形の素掘り土壙である。大きさはやや小さく、長辺が104 ㎝、短辺57㎝を測る。深さはやや浅く、検出面から42㎝を測る。主軸の方向はNである。土壙内からは人骨なかったが、銭貨６が出土している。

銭貨（１５３図）　銅製・鉄製。土壙底面の東端で出土した。いわゆる六道銭として納入されたものである。内訳は銅銭5 枚、鉄



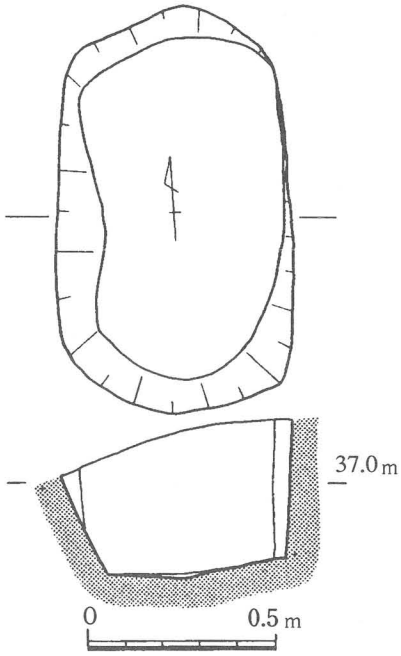
第152図　ＡＩ区西29号墓実測図

銭1 枚である。銅銭は渡来銭である天佑通宝1 枚、嘉祐元寶1 枚のほかは判読不明が含まれる。全体的に残存状況は悪い。寛永通宝は２枚とも残存状況は良好である。１枚は湯まわりが悪い。もう１枚はいわゆる”マ”通しである。

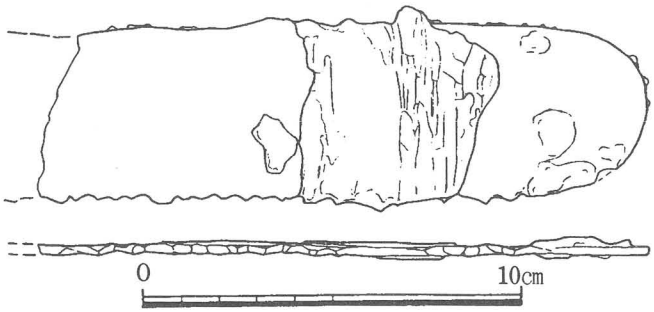
西31号墓（第１５６図）
墓域中央のやや北に位置する。平面は長方形の素掘り土壙である。大きさは大きく、長辺が100 ㎝、短辺97㎝を測る。深さはやや深く、検出面から165 ㎝を測る。主軸の方向はＮ－18°－Ｅである。底面からは人骨１体と、鋸１、土師質土器皿１が出土している。
人骨は土壙底面の西壁よりにまとまっていた。熟年の男性と考えられる。仰臥坐位でＳ－15°－Ｗを向いている。

鋸（１５４図）片歯の鋸である。幅4.8㎝、残存長16㎝、厚さ0.2㎝を測る。

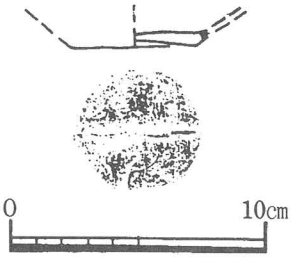
第154図　ＡＩ区西30号墓出土銭拓影



第153図　ＡＩ区西30号墓実測図



第155図　ＡＩ区西31号墓出土遺物実測図



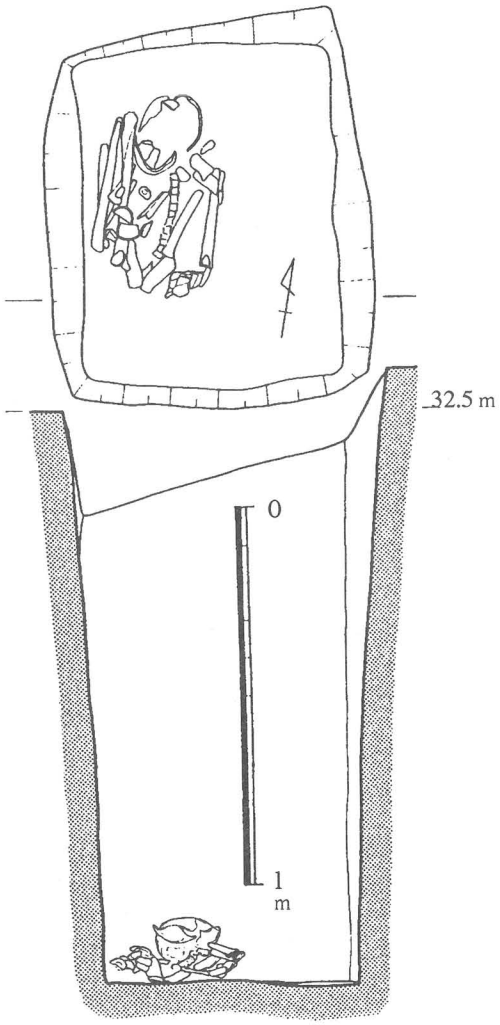
第157図　ＡⅠ区西31号墓出土遺物実測図

先端は丸い作りになっており、先端にいくほど歯の目が粗くなる。錆化が著しいが、木質が付着している。

土師質土器皿（１５５図）底部片である。壙底中央、寛骨の下から出土した。底径４．９㎝、残存高０．６㎝を測る。色調は淡黄色を呈す。底部は回転糸切りによって、切り離されている。

西32号墓（第１５７図）　墓域の南西端に位置する。平面は隅丸長方形の素掘り土壙である。大きさは大きく、長辺が106㎝、短辺78㎝を測る。深さは浅く、検出面から54㎝を測る。主軸の方向はＮである。土壙内からは人骨及び遺物等は出土していない。

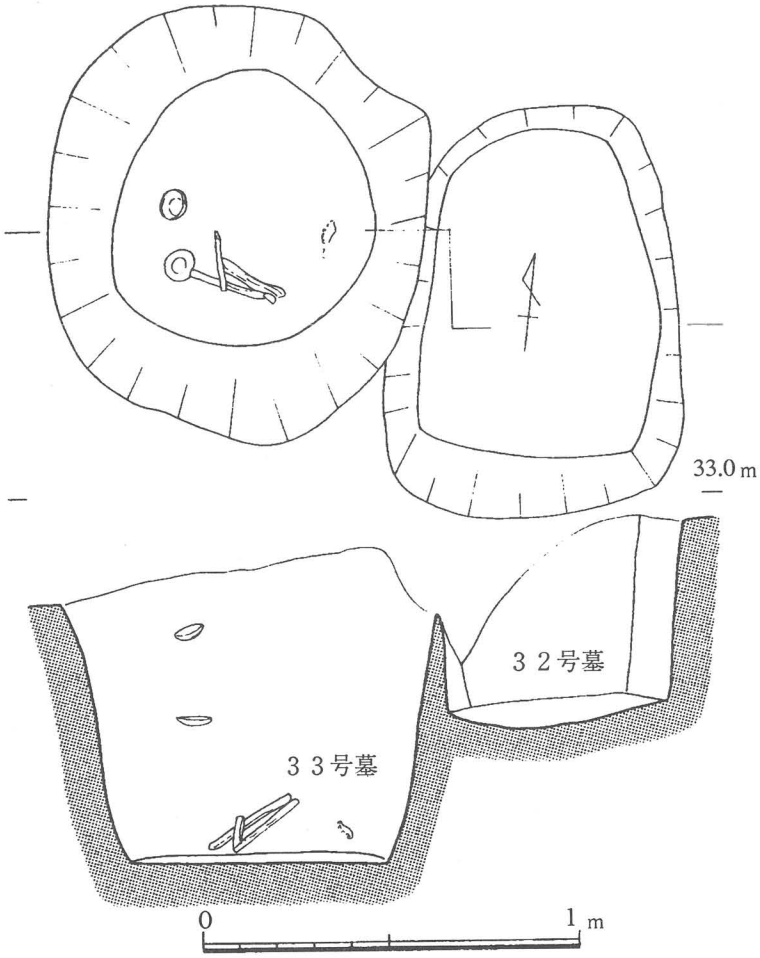
西33号墓（第１５７図）　墓域の南西端に位置する。平面は円形の素掘り土壙である。大きさはやや大きく、長辺が117㎝、短辺100㎝を測る。深さはやや浅く、検出面から85㎝を測る。底面からは人骨１体と土師質土器２が出土している。



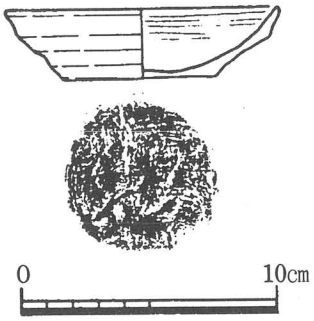
第156図　ＡⅠ区西31号墓実測図

人骨は熟年の女性をうかがわせる。残存状況は非常にわるく埋葬時の姿勢は不明である。

土師質土器皿（第１５８図）壙底から40～70㎝の高さで出土した。口径10.5㎝、底径5.9㎝、器高2.9㎝を測る。色調は淡赤黄色を呈す。底部は回転糸切りによって、切り離されている。



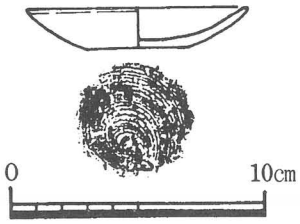
第158図　ＡＩ区西32・33号墓実測図



第159図　ＡＩ区西33号墓出土遺物実測図

西34号墓（第１５９図）　墓域南西に位置する。平面は正方形の素掘り土壙である。大きさはやや大きく、長辺が117 ㎝、短辺100 ㎝を測る。深さはやや浅く、検出面から85㎝を測る。底面からは人骨１体と土師質土器２・銭貨が出土している。

人骨は小児骨と考えられる。残存状況は非常に悪く埋葬時の姿勢は不明である。

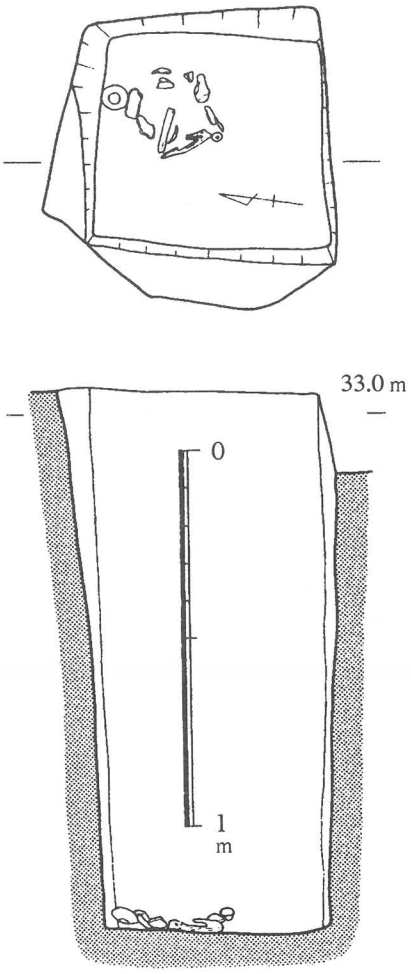


第161図　ＡⅠ区西34号墓出土遺物実測図

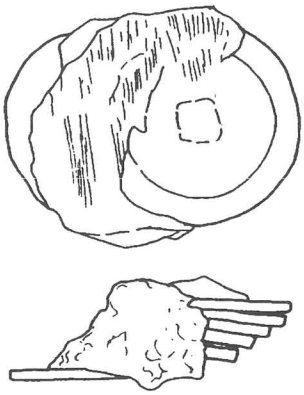
土師質土器皿（第１６０図－１）　壙底北端から出土した。口径8.7㎝、底径4.0㎝、器高1.7㎝を測る。色調は淡橙色を呈す。底部は回転糸切りによって、切り離されている。

銭貨（第１６０図－２）　銅製・鉄製。壙底中央から出土した。いわゆる六道銭として納入されたものであり、寛永通宝である。内訳は銅銭２枚と鉄銭３枚である。銅銭のうち１枚はス寶銭であることが確認できる。

西35号墓（第１６１図）　墓域のやや南に位置する。平面は円形の素掘り土壙である。大きさは大きく、長辺が120 ㎝、短辺85㎝を測る。深さはやや浅く、検出面から75㎝を測る。土壙内からは人骨及び遺物等は出土していない。

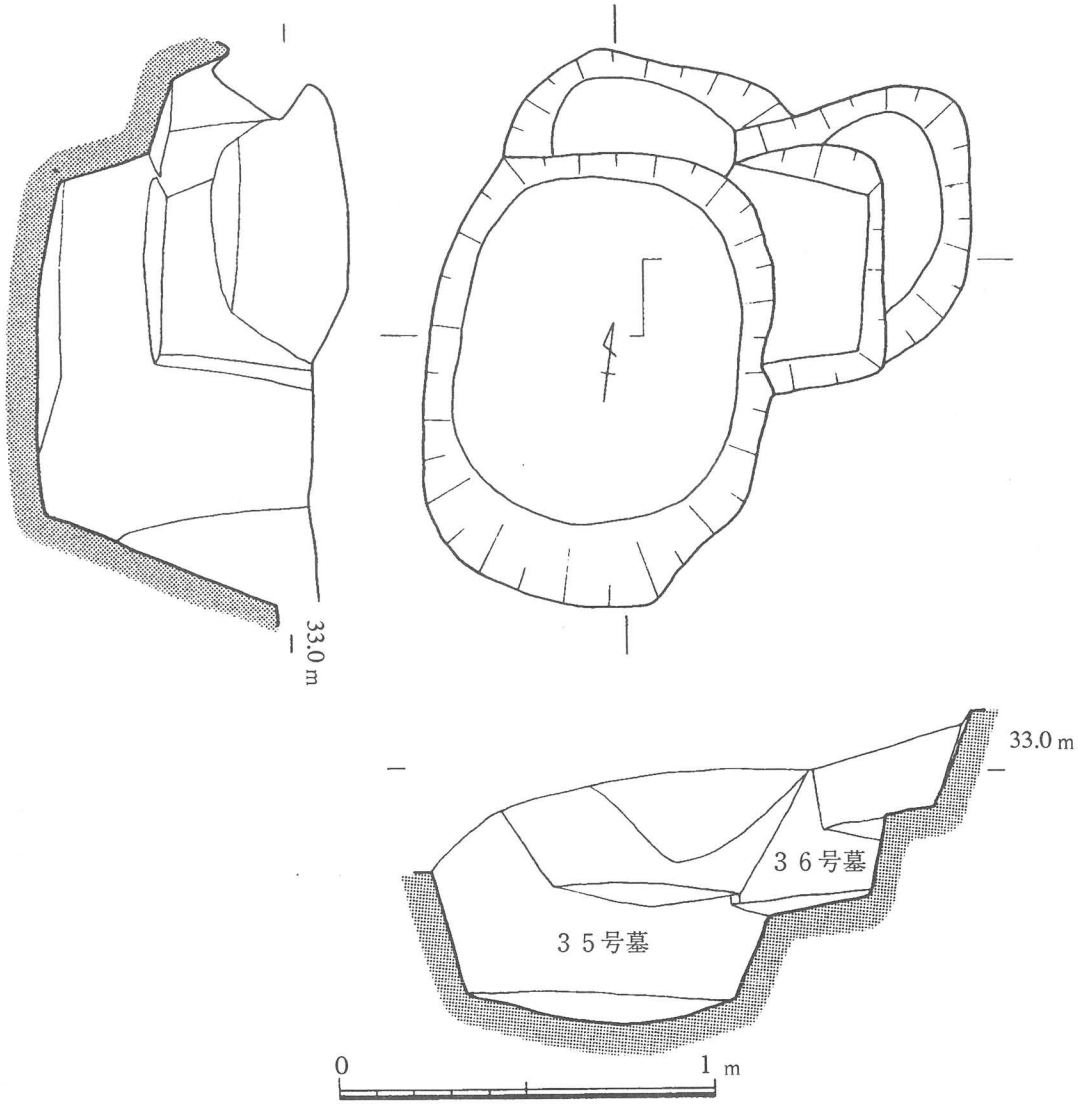


第160図　ＡⅠ区西34号墓実測図



第162図　ＡⅠ区西34号墓出土銭拓影

西36号墓（第１６１図）　墓域のやや南に位置する。平面形は一辺60㎝の方形の素掘り土壙である。深さは非常に浅く、検出面から36㎝を測る。主軸の方向はＮ－７°－Ｅである。土壙内からは人骨及び遺物等は出土していない。



第163図　ＡⅠ区西35・36号墓実測図

西37号墓（第１６２図）　墓域のやや南に位置する。平面はほぼ正方形の素掘り土壙である。

大きさは大きく、長辺が90㎝、短辺80㎝を測る。深さは最も深く、検出面から210 ㎝を測る。主軸の方向はＮ－７°－Ｅである。上場より下場のほうが大きいため、各壁は内傾している。底面には中央には径38㎝、深さ30㎝の穴が掘り込んである。底面からは人骨１体と、銭貨３、鋏１、土師質土器３、釘１が出土している。

人骨は成人の男性と考えられる。正坐位でＮを向いている。

銭貨（第１６３図）　銅製。壙底中央から出土した。

いわゆる六道銭として納入されたものであり、寛永通宝である。１枚は八寶銭であることが確認できる。

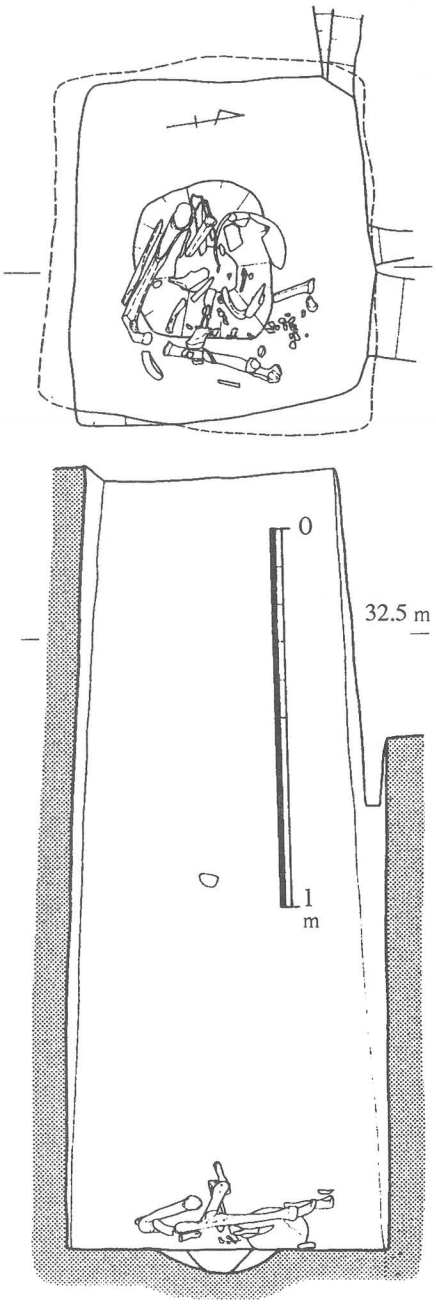
鋏（第１６４図－４）壙底中央から出土した。鉄製のにぎり鋏である。

先端が欠損しているが、残存長11.0㎝を測る。支点の折り曲げ部の断面は幅７㎜、厚さ４㎜の長方形である。

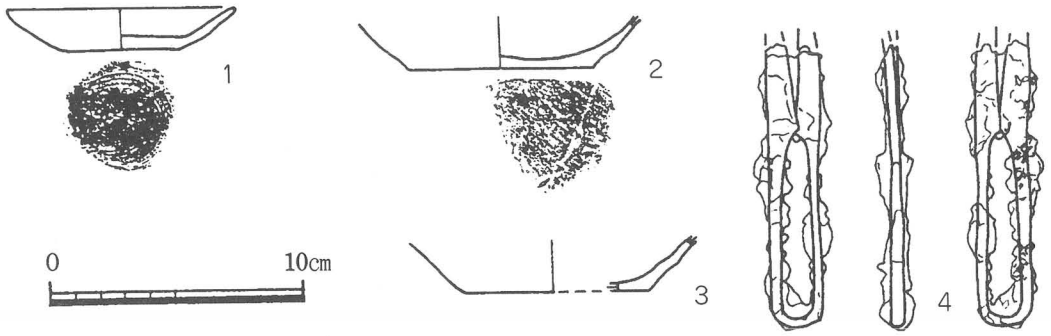
木質および目の粗い繊維が付着していることから。目の粗い布袋に入れて遺体のそばに副葬されたものと推定される。

土師質土器（第１６４図－１～３）

壙底北東から1 点、中央頭蓋骨の上から出土した。１は口径9.2㎝、底径



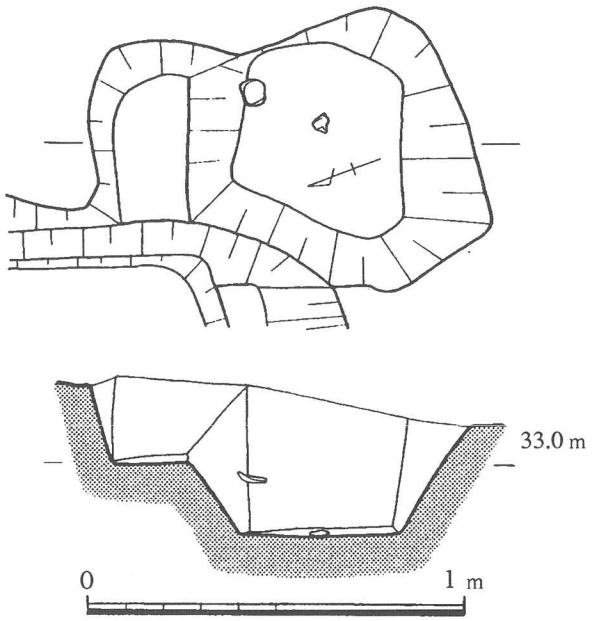
第164図　ＡＩ区西37号墓実測図・出土銭拓影



第165図　ＡⅠ区西37号墓出土遺物実測図

4.3cm、器高1.5cmを測る。色調は赤褐色を呈す。底部は回転糸切りによって、切り離されている。２は底部片である。厚さ０．３cmを測る。底部は回転糸切りによって、切り離されている。焼成は良好である。３は口縁部片である。器高２．０cmを測る。焼成は良好。黄褐色を呈す。底部は回転糸切りによって、切り離されている。焼成は良好である。

西38号墓（第１６５図）　墓域のやや南に位置する。平面は正方形の素掘り土壙である。大きさはやや小さく、長辺が70cm、短辺68cmを測る。深さは浅く、検出面から46cmを測る。主軸の方向はN

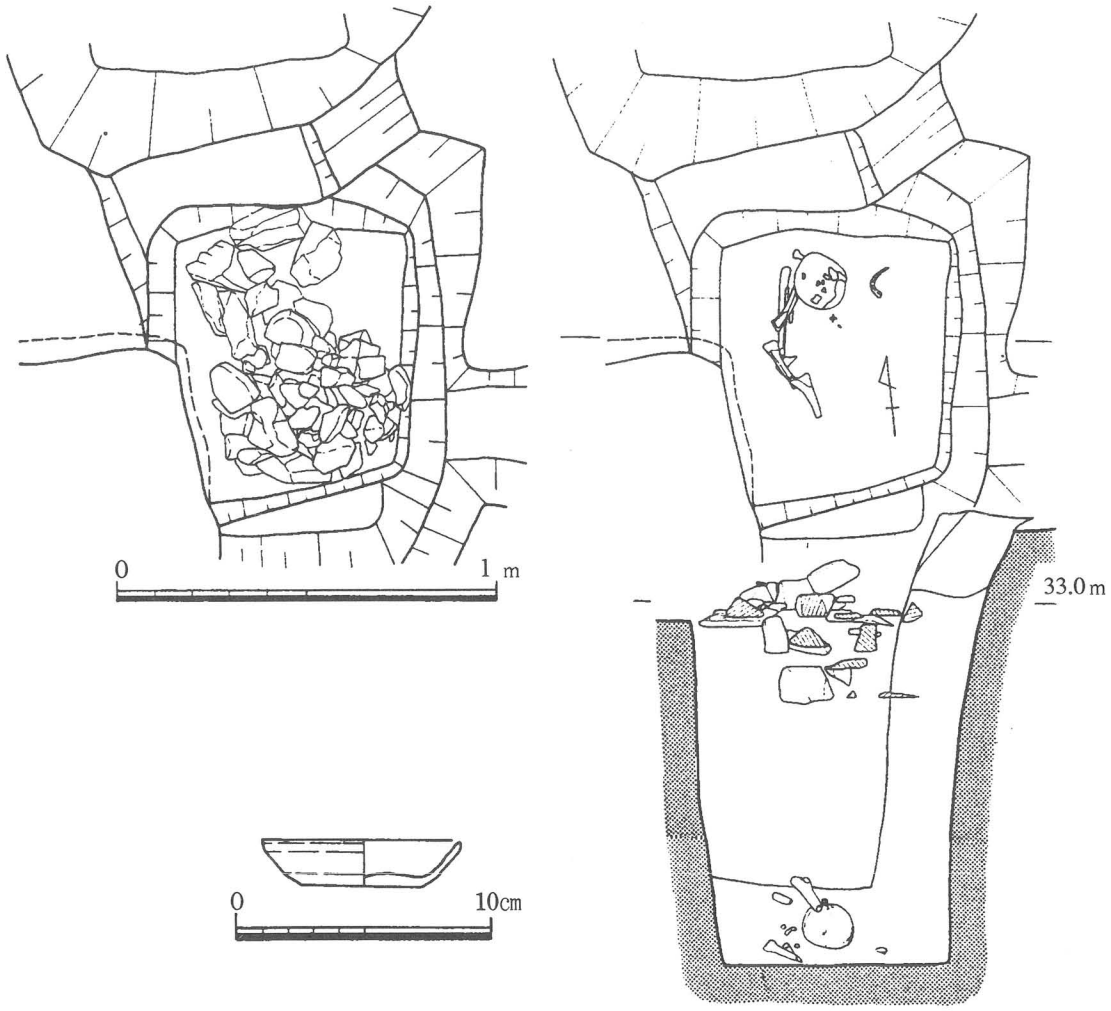


第166図　ＡⅠ区西38号墓実測図

ー33°ーEである。掘り込み角度は緩やかである。土壙内からは人骨１体と、土師質土器1 が壙底から16cmの高さ、北東側から出土した。

人骨は小児骨であった。残存状況が非常に悪く、性別、埋葬時の体勢などは不明である。

西39号墓（第１６６図）　墓域のやや南に位置する。平面は正方形の素掘り土壙である。大きさはやや大きく、長辺が80cm、短辺80cmを測る。深さはやや深く、検出面から120 cmを測る。主軸の方



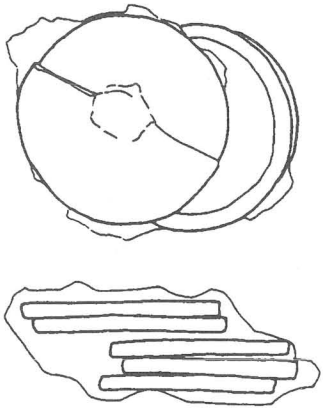
第167図　ＡＩ区西39号墓実測図・39号墓出土遺物実測図

向はN－8°－Eである。土壙検出面の高さからレンズ状に拳大の角礫が37kg出土した。土壙内からは人骨１体と、土師質土器皿1、銭貨5、釘６が出土している。

人骨は土壙のやや北よりで出土した。老年の女性と推定される。立膝坐位でWを向いている。

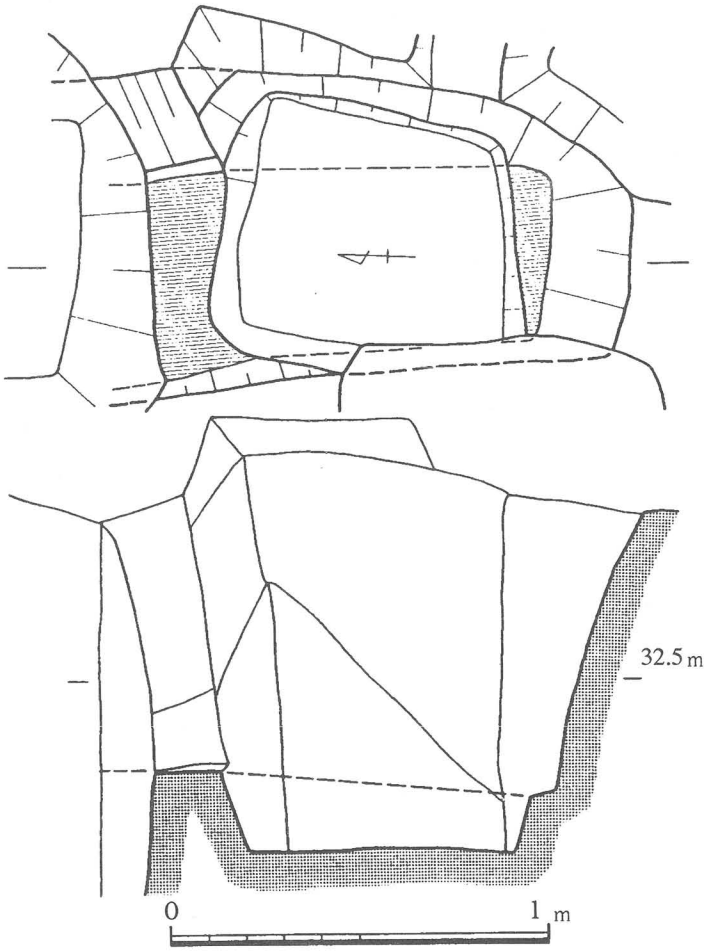
銭貨（第１６８図）　銅製・鉄製。壙底の北側、頭蓋骨の下から出土した。いわゆる六道銭として納入されたものであり、寛永通宝である。内訳は銅銭１枚と鉄銭４枚である。

全体が錆で覆われ判読は不明である。



第168図　ＡＩ区西39号墓出土遺物実測図

土師質土器皿（第１６７図）大きさは口径7.8cm、底径4.6 器高1.7cmを測り、色調は淡黄赤色を呈す。水挽きにより成形され、回転糸切り技法により切り離されている。

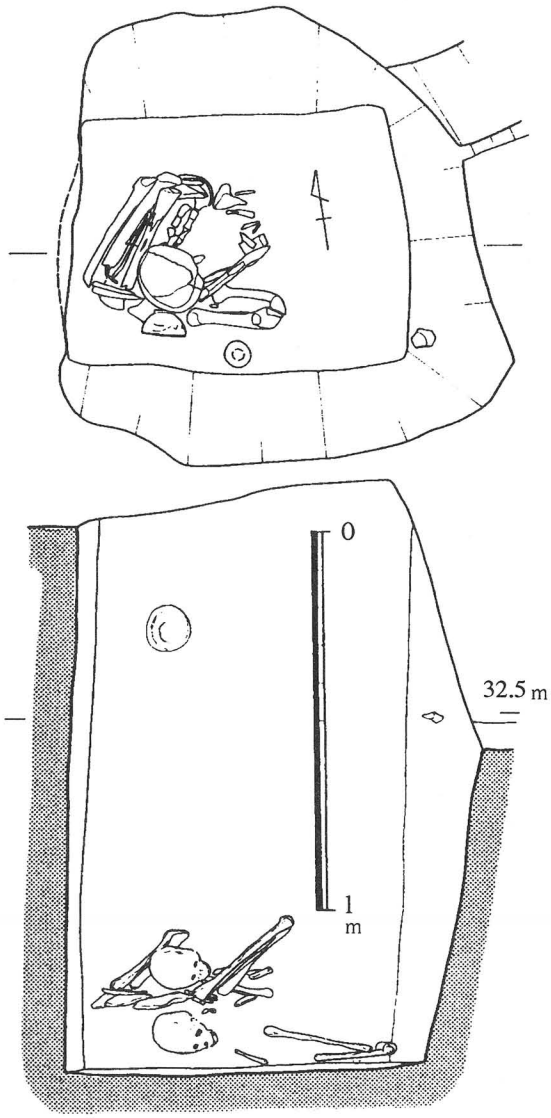


第169図　ＡＩ区西40号墓実測図

西40号墓（第１６９図）　墓域のやや南に位置する。平面は長方形の素掘り土壙で、主軸方位はＮである。この土壙については西39号墓、西43号墓との重複がみとめられた。西39号墓に伴う礫の体積に攪乱が見られないことから、西39号墓（古）～西40号墓(新）という関係である。全長130 ㎝以上、幅80㎝を測る。深さは比較的浅く、検出面から90㎝を測る。壙底の大きさは長辺が110 ㎝、短辺40㎝を測る。人骨及び遺物は出土しなかった。他の土壙と形状が極端に異なることから近世の土壙でない可能性がある。

西41号墓（第１７０図）　墓域のほぼ中央に位置する。西39号墓と西42号墓に挟まる形で掘り込まれている。平面は長方形の素掘り土壙である。上縁の大きさは比較的大きく、長辺が120 ㎝、短辺110 ㎝を測る。深さは比較的深く、検出面から150 ㎝を測る。壙底の大きさは長辺が80㎝、短辺65㎝を測る。主軸方位はＮ12°Ｅである。この土壙については西40号墓との重複がみとめられた。壙底からは人骨２体と、碗１、土師質土器２、銭貨１、釘２、煙管２が出土している。

人骨は土壙のやや北よりで２体が重なる形で出土した。上の人骨の残存状態はきわめて良好で、熟年～老年の男性と推定される。埋葬形態は仰臥坐位で、頭位はＮ－50°－Ｗの方向となっていた。顎骨半分が欠損しており、割れ口は鋭利な刃物で切断された可能性が



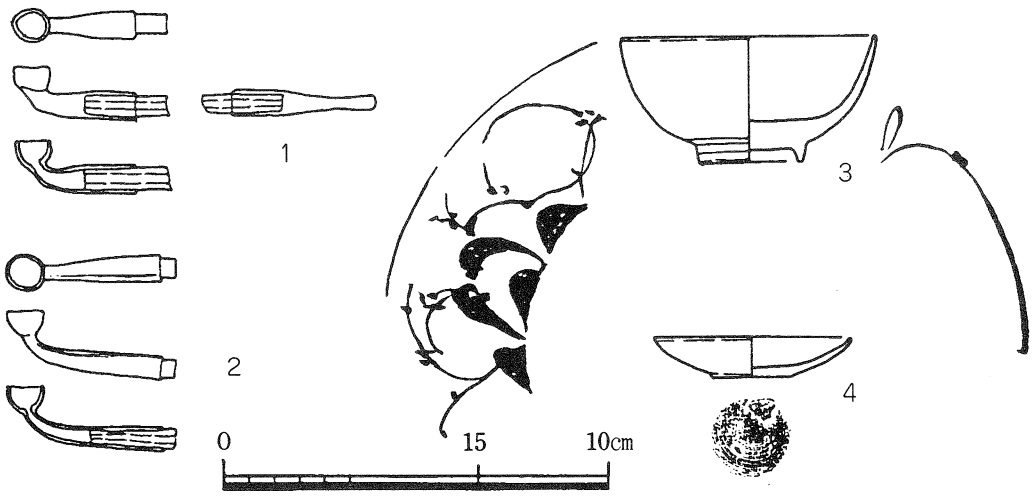
第170図　ＡＩ区西41号墓実測図

ある。下の人骨は残存状況は悪いが、熟年の女性とうかがわれる。埋葬形態は仰臥坐位で、頭位はS－25°－Eを向いていた。

煙管(第１７１図－１～２)銅製。上の人骨の頭骸骨の下から出土した。１は首部の金具は長さ4.7㎝、火皿の口径1.4㎝㎝、羅宇挿入口の口径1.1㎝となっている。脂返し部分は湾曲が小さい。吸口側の金具は長さ5.5㎝、羅宇挿入口の口径1.1㎝、吸口の端部の口径0.6㎝を測る。布が付着している。羅宇には竹が用いられている。火皿内にはタール状の付着物が認められる。
がふいている。吸口には縞模様の綿繊維が付着している。雁首内には黒色のタール状の付着物がある。２は首部の金具は長さ4.7㎝、火皿の口径1.4㎝㎝、羅宇挿入口の口径1.1㎝となっている。脂返し部分は比較的細い。羅宇には竹が用いられている。脂返し部分は湾曲が小さい。火皿内にはタール状の付着物が認められる。

碗(第１７１図－３)磁器。検出面から、30㎝下の高さで出土した。口径10.0㎝、底径4.0㎝、器高5.0㎝を測るもので、内湾する体部を持つ。体部には花木をあしらった文様、高台には横線が３条描かれている。色調は体部が灰白色で、文様は緑灰色～灰色を呈する。18世紀前半の肥前系磁器と考えられる。表採遺物の中に非常に類似したものがある。口縁部は２か所打ちか欠れている。

土師質土器皿(第１７１図－４)　上の人骨と同じ高さ、土壙の西側から出土した。口径7.6㎝、底



第171図　ＡＩ区西41号墓出土遺物実測図

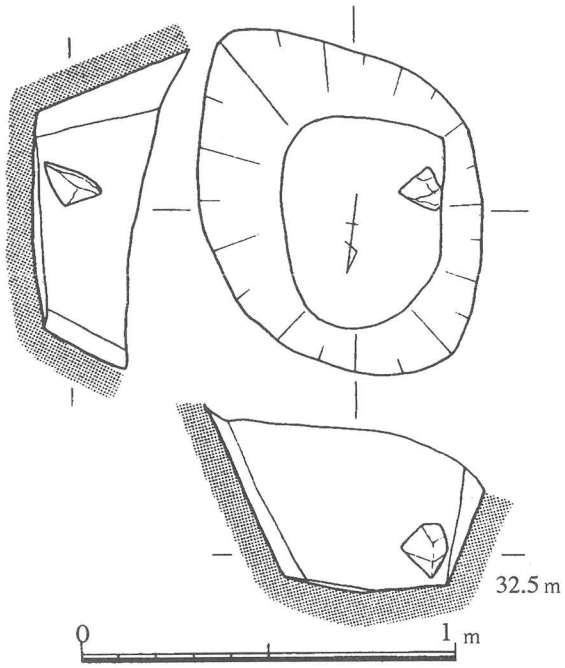
径3.1㎝、器高1.5㎝を測るもので、やや内湾する体部をもち、口縁端部は薄くなっている。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡白黄色である。

銭貨　銅製。下の人骨の頭蓋骨の横から出土した。いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。ハ寶銭である。

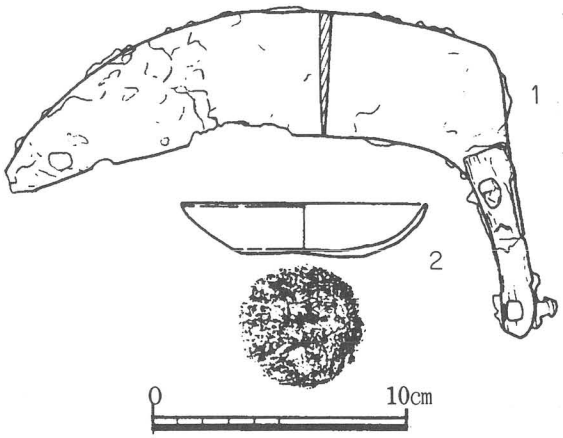
西42号墓（第１７２図）　墓域のほぼ中央に位置する。南側で西41号墓と隣接する形で掘り込まれている。

平面形楕円形の素掘りの土壙である。大きさはやや小さく、長辺が83㎝、短辺75㎝を測る。深さはやや浅く、検出面から50㎝を測る。壙底の大きさは長径が50㎝、短径45㎝を測る。主軸の方向はN－7°－Wである。土壙内からは人骨出土しなかったが、礫１が出土した。礫は底面から10㎝上から出土しており、大きさは拳大である。

西43号墓（第１７４図）　墓域の中央に位置する。北側で西44号墓、西側で西50号墓と隣接する形で掘り込まれている。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさはやや大きく、長辺が100 ㎝、短辺82㎝を測る。深さはやや深く、検出面から155 ㎝を測る。壙底の大きさは長辺が66㎝、短辺63㎝を測る。主軸の方向はN－7°－Eある。壙底からは人骨１体と、鎌１、土師質土器皿１が出土している。　人骨は土壙の中央、底面の少し



第172図　ＡⅠ区西42号墓実測図



第173図　ＡⅠ区西43号墓出土遺物実測図

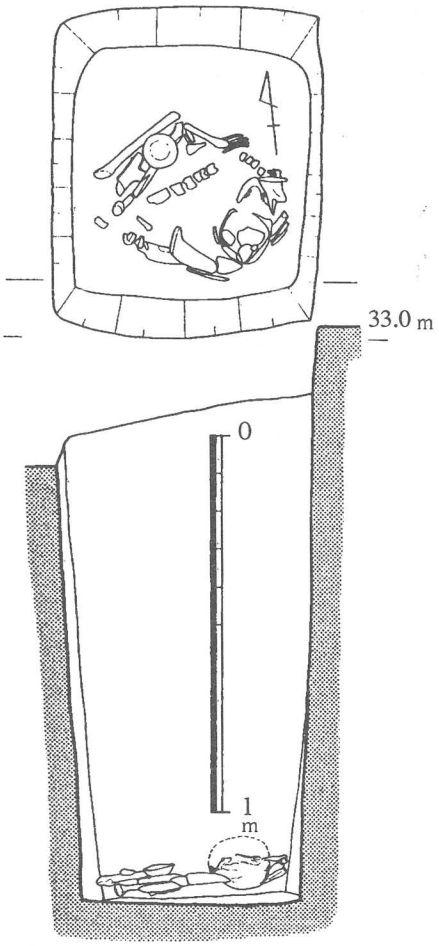
上で出土した。残存状態は良好である。壮年前半女性と考えられる。

仰臥膝屈位でN－55°－Eの方向を向いている。

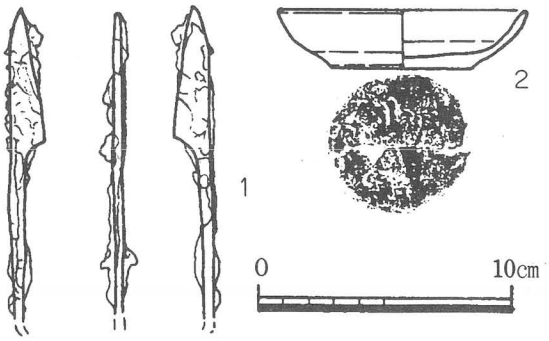
鎌（第１７３図－１） 鉄製。頭蓋骨付近から出土した。ほぼ完形である。刃部長40㎝、幅9.6㎝、茎長15㎝、幅2.4㎝を測る。刃は一部打ちかかれている。

土師質土器皿(第１７３図－２) 土壙の中央、大腿骨の上から出土した。口径9.6㎝、底径4.9㎝、器高2.0㎝を測るもので、やや内湾する体部をもち、口縁端部は丸くおさめている。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡赤黄色である。

西44号墓（第１７６図） 墓域の中央に位置する。南側で西43号墓、西側で西51号墓と隣接する形で掘り込まれている。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさはやや大きく、長辺が96㎝、短径73㎝を測る。深さはやや深く、検出面から125㎝を測る。壙底の大きさは長辺が72㎝、短辺70㎝を測る。主軸の方向はN83°



第174図　ＡⅠ区西43号墓実測図



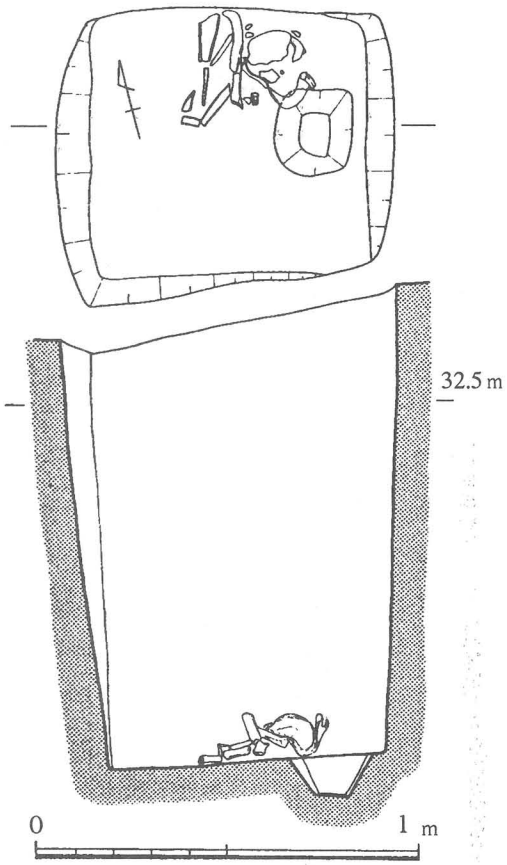
第175図　ＡⅠ区西44号墓出土遺物実測図

Wである。底面には東側には径20㎝、深さ10㎝の平面方形、断面逆台形の穴が掘り込んである。土壙内からは人骨１体と　和鋏１、土師質土器皿１が出土している。

人骨は土壙の北より、底面の少し上で出土した。残存状態は悪い。熟年女性をうかがわせる。立膝坐位でWの方向を向いている。

和鋏（第１７５図－１） 鉄製。いわゆる握り鋏で、細い鉄板をU字形に曲げて握りとし、両端に内向する刃を施したものである。この和鋏は半分が欠損している。残存長は24.2㎝、刃部長は５．３㎝である。刃の部分に木質、握り部分に紐状の付着物がみられる。

土師質土器皿 第(１７１図－２) 口径9.7 ㎝、底径5.5 ㎝、器高2.2 ㎝を測るもので、やや内湾する体部をもち、口縁端部は丸くおさめている。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡赤黄色である。



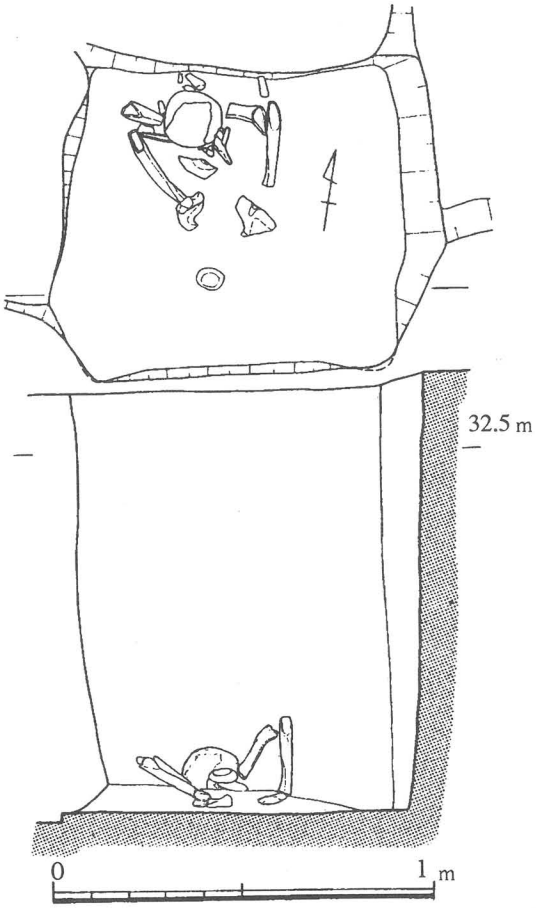
第176図　Ａ１区西44号墓実測図

西45号墓（第１７７図）　墓域の南西端に位置する。平面正方形の素掘りの土壙である。北を西54号墓に、西46号墓と西57号墓に東西を挟まれる形で掘り込まれている。大きさはやや大きく、長辺が96㎝、短辺73㎝を測る。深さはやや深く、検出面から125 ㎝を測る。各壁はほぼ垂直にほりこまれている。壙底の大きさは長辺が80㎝、短辺75㎝を測る。主軸の方向はN－83°－Wである。この土壙は西46号墓、西57号墓と重複しているが前後関係を明らかにするに至らなかった。壙底からは人骨１体と、銭貨１、土師質土器皿１が出土している。人骨は土壙の北より、底面の少し上で出土

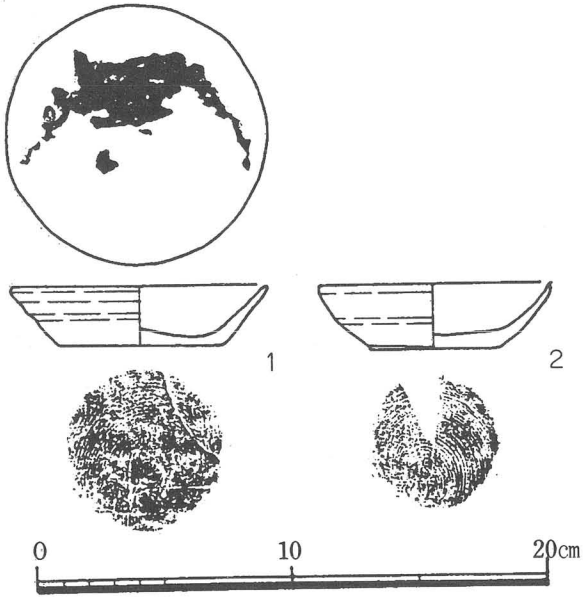
した。熟年前半の男性と思われる。立膝坐位でN40°Wの方位を向いている。

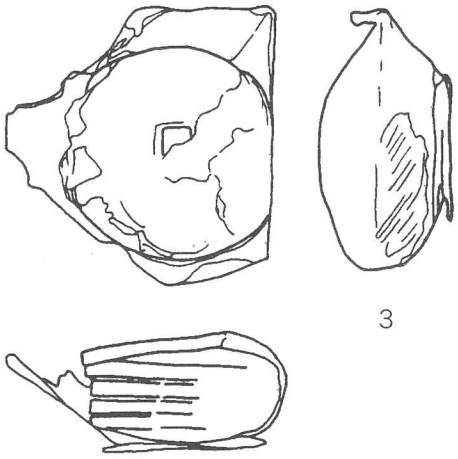
銭貨（第１７８図－３） 銅製・鉄製。５枚錆ついて出土した。いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。銅銭と鉄銭があることはわかるが、錆化が著しく内訳は不明である。革状のもので覆われている様子である。

土師質土器皿（第１７１図－１～２） １は口径10.1㎝、底径6.5㎝、器高2.3㎝を測るもので、真っ直ぐのびる体部をもち、口縁端部は丸くおさめている。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡黄色である。２は口径9.0㎝、底径5.0㎝、器高2.5㎝を測るもので、やや内湾する体部をもち、口縁端部はすぼまっている。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡黄色である。



第177図　ＡⅠ区西45号墓実測図

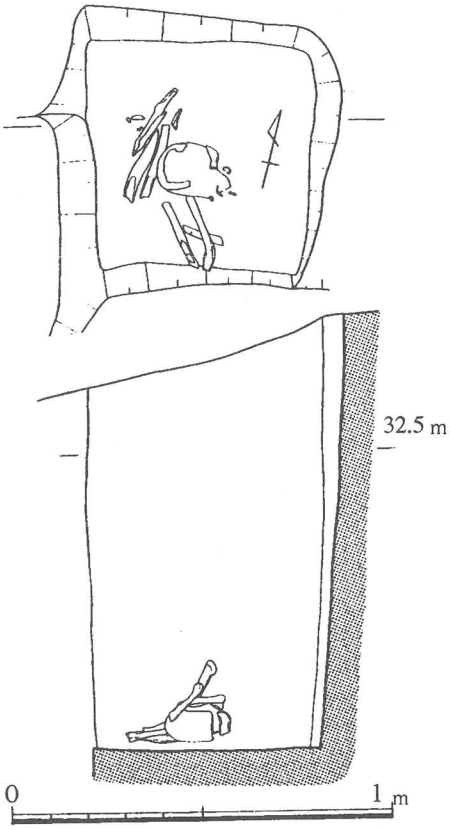




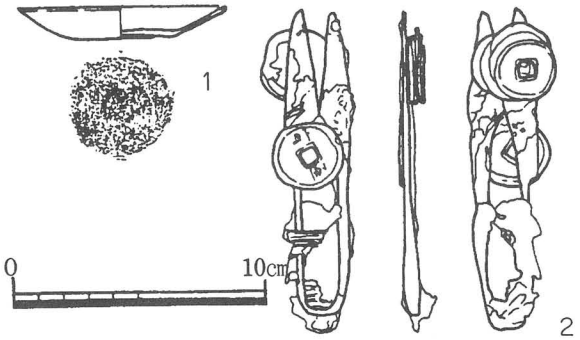
第178図　ＡⅠ区西45号墓出土遺物実測図

西46号墓（第１７９図）　墓域の南西端に位置する。西35号墓と西45号墓に東西を挟まれる形で掘り込まれている。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさはやや大きく、長辺が90㎝、短径80㎝を測る。深さは比較的深く、検出面から115 ㎝を測る。各壁はほぼ垂直にほりこまれている。主軸の方向はＮ－14°－Ｗである。土壙内からは人骨１体と、鋏1、釘3、　銭貨4、土師質土器皿１が出土している。人骨は土壙の中央、底面の少し上で出土した。壮年女性と推察される。仰臥坐位でＳ－45°－Ｗの方向を向いている。

鋏 (第１８０－１図)鉄製のにぎり鋏である。ほぼ完形で、全長は１２．６㎝程度、刃部長４．３㎝を測る。視点の折り曲げ部の断面は幅５㎜の正方形である。全体に錆がついているが、残りは良好である。片面には木質、もう1 面には布が付着している。両面に銭貨が付着している。目の粗い布袋に入れて遺体のそばに副葬されたものと推定される。



第179図　ＡⅠ区西46号墓実測図



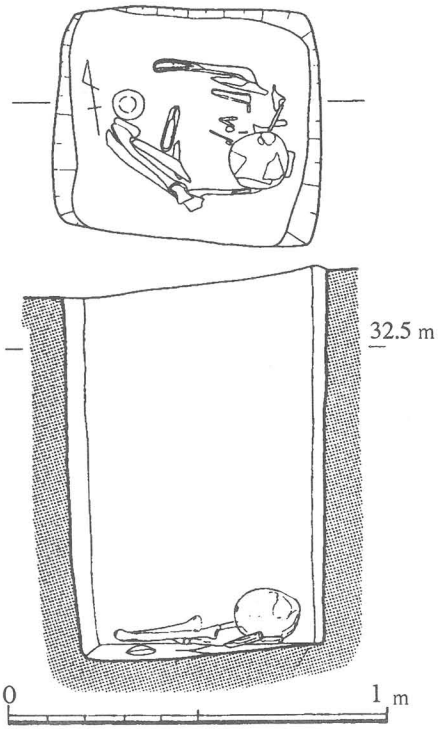
第180図　ＡⅠ区西46号墓出土遺物実測図

銭貨　（第１８０図－２）銅製。鋏に付着して6 枚出土した。いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。内訳はス寶銭1 枚、判読不明が5 枚である。

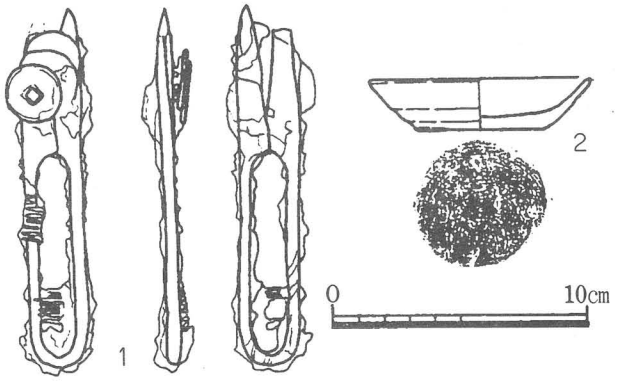
土師質土器皿(第１８０図－１)口径８．２㎝、底径４．１㎝、器高１．２㎝を測る。底部裏面にはかすかに回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも茶褐色である。

西47号墓（第１８２図）　墓域のやや西に位置する。北側で西48号墓、西側で西58号墓と隣接する形で掘り込まれている。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的小さく、長辺が77㎝、短径65㎝を測る。深さは比較的深く、検出面から100 ㎝を測る。各壁はほぼ垂直にほりこまれている。主軸の方向はN－７°－Eである。土壙内からは人骨２体と、鋏1 、銭貨4 、櫛、土師質土器皿１が出土している。

人骨は土壙の中央、底面の少し上で出土した。壮年女性と思われる。仰臥坐位でN 55°Wの方向　向いている。もう１体は小児のものである。



第182図　ＡⅠ区西47号墓実測図



第181図　ＡⅠ区西47号墓出土遺物実測図

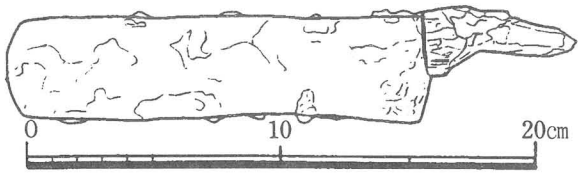
鋏（第１８１図－１）鉄製のにぎり鋏である。部分的に欠損しているが、全長は１４㎝程度、刃部長５．７㎝を測る。視点の折り曲げ部の断面は幅５㎜の正方形である。片面には木質が、反対には銭貨との間に櫛の歯が挟まって付着している。

銭貨　（第１８１図－１）銅製・鉄製。鋏に付着して3 枚出土した。いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。判読不明であるが、銅銭と鉄銭がある。

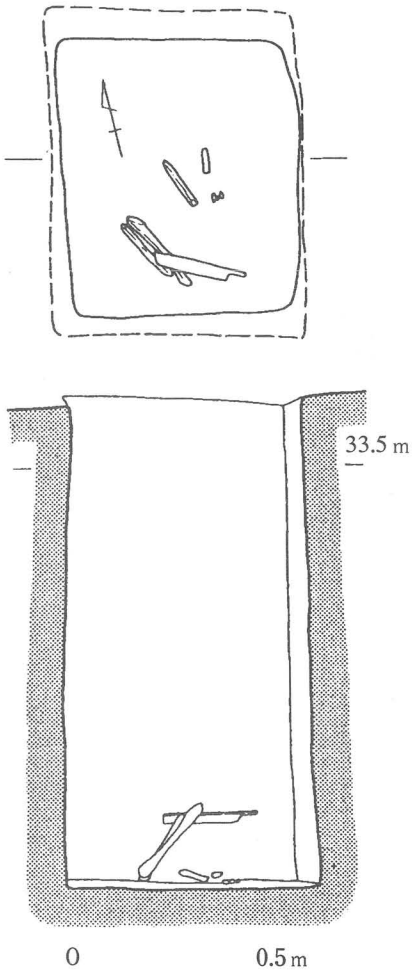
土師質土器(第１８１図－２)　壙底やや西よりで出土した。口径８．８㎝、底径４．９㎝、器高２．０㎝を測る。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡黄色である。

西48号墓（第１８４図）　墓域のやや西に位置する。南側で西47号墓と隣接する形で掘り込まれている。平面ほぼ正方形の土壙である。大きさは比較的小さく、長さが72㎝、短径63㎝を測る。深さは比較的深く、検出面から130㎝を測る。下場より上場が小さいため、各壁は内傾している。検出面では礫が70kg出土した。主軸の方向はＮ－10°－Ｅである。底面には一辺20㎝深さ10㎝断面逆台形の穴が掘り込まれている。土壙内からは人骨1体と、包丁1が出土している。人骨は残存状況がわるく詳細は不明であるが、熟年～老年で性別は不明である。

包丁(第１８３図) 土壙のやや南側、人骨の上から出土した。全長２２．２㎝、幅４．２㎝を測る。



第183図　ＡＩ区西48号墓出土遺物実測図

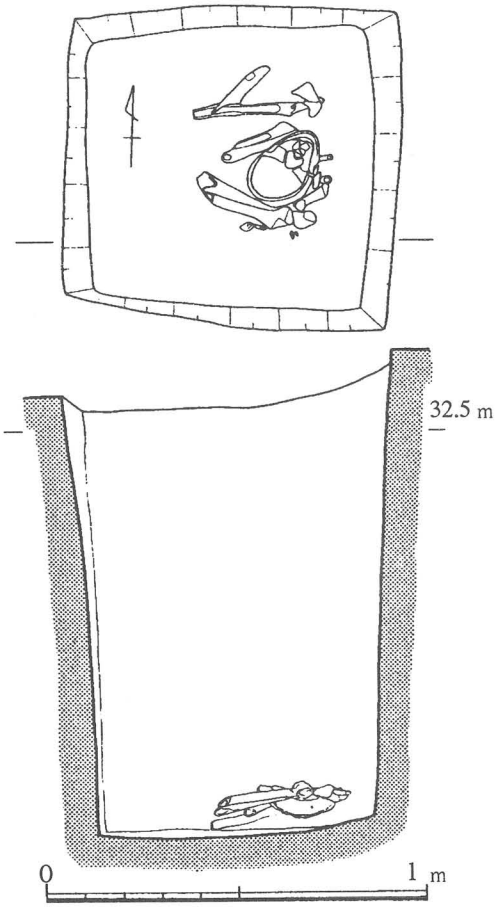


第184図　ＡＩ区西48号墓実測図

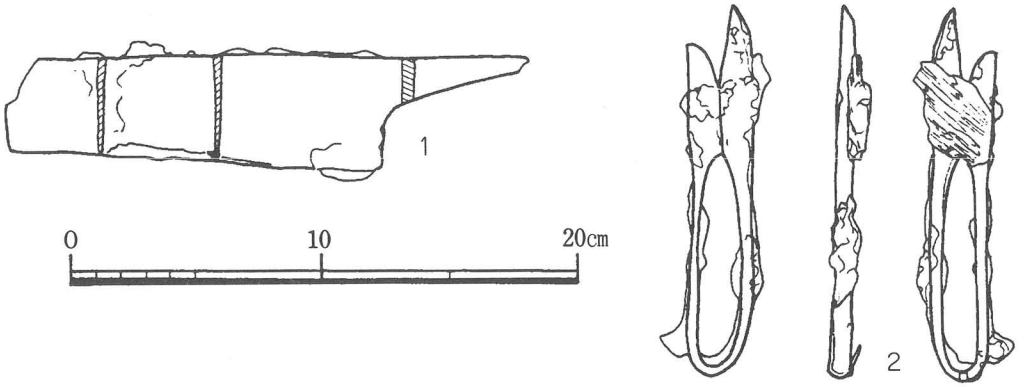
西49号墓（第１８５図）　墓域のやや西に位置する。北側で西50号墓と隣接する形で掘り込まれている。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長さが90㎝、短径89㎝を測る。深さは比較的深く、検出面から130㎝を測る。各壁はほぼ垂直に掘り込まれている。主軸の方向はN－7.6°－Wである。土壙内からは人骨1体と、包丁1、鋏1、土師質土器皿が出土している。人骨は土壙の中央、底面の少し上で出土した。熟年女性と推察される。仰臥坐位でWの方向を向いている。

包丁(第１８５図) 土壙のやや北側、人骨の上から出土した。全長２０．７㎝、幅４．５㎝を測る。刃がぶれた状態である。

鋏（第１８６図－２） 土壙の中央、頭蓋骨の上から出土した。鉄製のにぎり鋏である。部分的に欠損しているが、全長は１４．５㎝、刃部長６㎝を測る。視点の折り曲げ部の断面は幅５㎜、厚さ２㎜の長方形である。木質が付着していることから木棺に入れられていたものと推定される。



第185図　ＡⅠ区西49号墓実測図



第186図　ＡⅠ区西49号墓出土遺物実測図

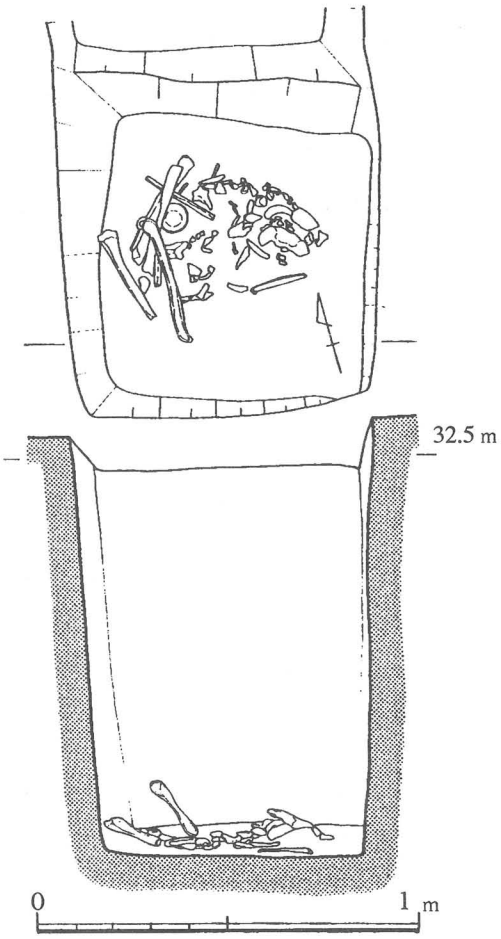
西50号墓（第１８７図）　墓域の中央やや西に位置する。東－西43号墓、西－西59号墓、北－西51号墓、南－西49号墓に四方を囲まれる形で掘り込まれている。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長さが90㎝、短径89㎝を測る。深さは比較的深く、検出面から130 ㎝を測る。各壁はほぼ垂直に掘り込まれている。主軸の方向はＮ－22°－Ｅである。土壙内からは人骨1 体と、鎌１・櫛1 、土師質土器皿、銭貨が出土している。人骨は土壙の中央、底面の少し上で出土した。熟年～老年女性と推察される。仰臥坐位でＳ－70°－Ｗの方向を向いている。

鎌(第１８７図－１)先端を欠損している。残存長１４㎝をはかる。目釘が残っている。

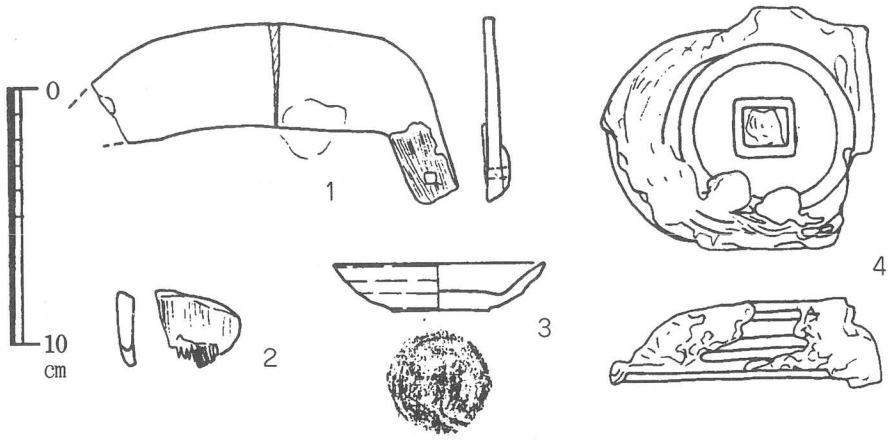
櫛(第１８７図－２)横櫛の一部である。乾燥して変形している。

銭貨（第１８７図－４）銅製・鉄製。6 枚が錆で固まって出土した。いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。内訳は銅銭5 と鉄銭1 である。

土師質土器皿（第１８７図－３）壙底中央から出土した。口径８．４㎝、底径３．７㎝、器高１．８㎝を測る。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも赤黄色である。



第187図　ＡⅠ区西50号墓実測図



第188図　ＡⅠ区西50号墓出土遺物実測図

西51号墓（第１８９図）　墓域の中央やや西に位置する。東－西44号墓、西－西56号墓、北－西53号墓、南－西50号墓に四方を囲まれる形で掘り込まれている。平面正方形の素掘りの土壙である。

大きさは比較的大きく、長さが90㎝、短径89㎝を測る。深さは比較的深く、検出面から115㎝を測る。各壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

主軸の方向はＮ－22°－Ｅである。

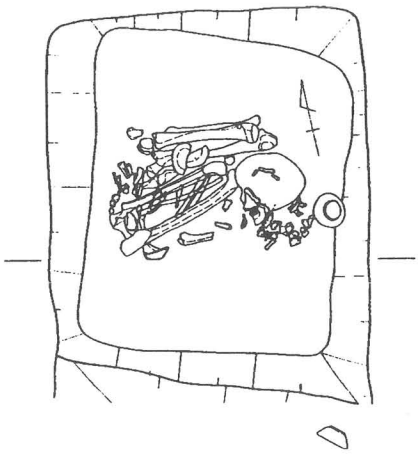
土壙内からは人骨2体と、鋏１・煙管1、土師質土器皿、燧金、燧石が出土している。

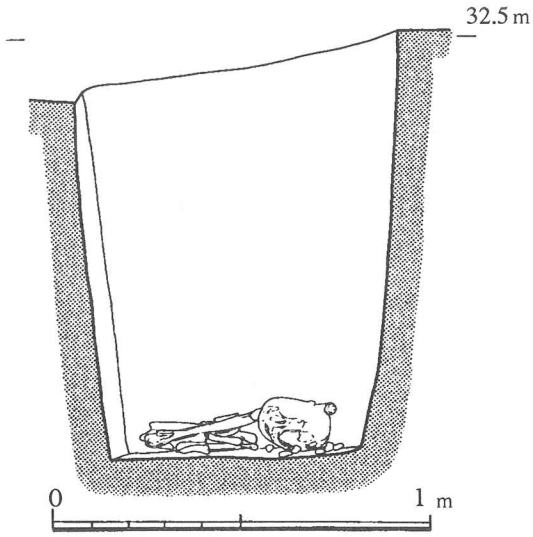
人骨は土壙の中央、底面の少し上で出土した。

熟年女性と推察される。仰臥坐位でＮ－75°－Ｗの方向を向いている。

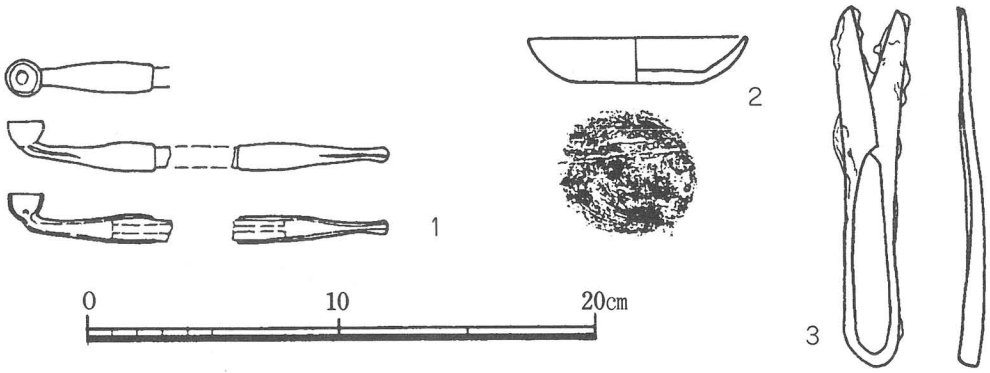
もう１体の性別は不明であるが、成人のものでＮ－75°－Ｗの方向を向いている。

鋏(第１９０図－３) 土壙の中央、

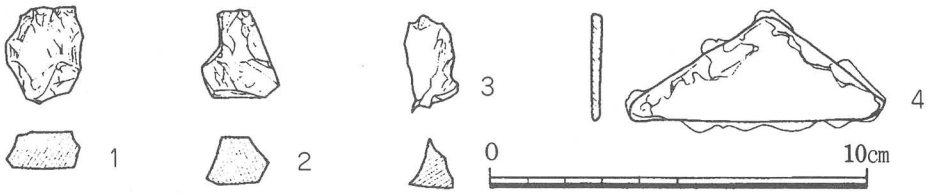




第189図　ＡＩ区西51号墓実測図



第190図　ＡＩ区西51号墓出土遺物実測図（１）



第191図　A　区西51号墓出土遺物実測図（２）

大腿骨の下で出土した。鉄製のにぎり鋏である。完形で、全長は１３．９㎝、刃部長５．５㎝を測る。支点の折り曲げ部の断面は幅９㎜、厚さ３㎜の半円形である。錆化が著しくようやく形態をたもっている。

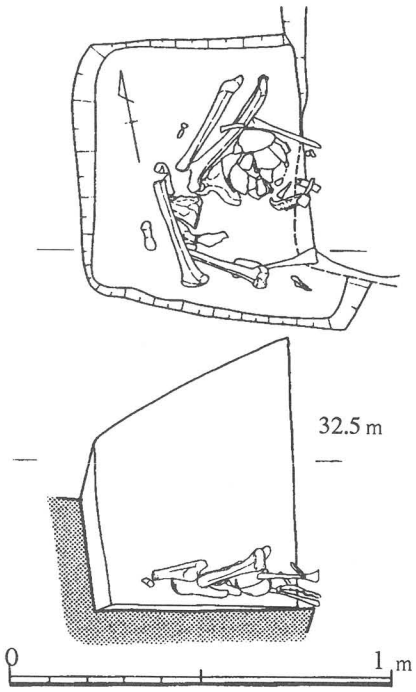
燧石（第１９１図－１～３） 土壙の中央、大腿骨の下で出土した。１は径２．５㎝を測る。色調は淡赤色を呈す。鉄錆・白色の皮が付着している。２は径２．３㎝を測る。色調は淡黄色を呈す。３は径２．６㎝を測る。色調は淡黄赤色を呈す。１～３は原石の表皮に近い部分である。

燧金（第１９１図－４） 土壙の中央、大腿骨の下で出土した。長さ６．５㎝の厚さ２㎜の三角形をしている。残存状況は良好で、三角形の単辺側に皮状の付着物が認められる。

煙管（第１９０図－１） 土壙の中央、大腿骨の下で出土した。火皿側の金具は長さ5.7 ㎝、火皿の口径1.4 ㎝、羅宇挿入口の口径1.1 ㎝となっている。雁首部分は比較的太い。吸口側の金具は長さ5.8 ㎝、羅宇挿入口の口径1.1 ㎝、吸口の端部の口径0.6 ㎝を測る。布が付着している。羅宇には竹が用いられている。火皿内にはタール状の付着物が認められる。脂返し部分の湾曲は小さく、使用痕がみとめられる。

土師質土器皿（第１９０図－２） 土壙の中央、大腿骨の上で出土した。口径８．７㎝、底径４．９㎝、器高１．７㎝を測るもので、底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡赤黄色である。

西52号墓（第１９２図）　墓域のやや北に位置する。東－西53号墓、北－西76号墓、南－西51号墓・西56号墓に三方を囲まれる形で掘り込まれている。平面正方形の素掘り土壙である。大きさは比較的小さく、長さが73㎝、短径61㎝を測る。深さは比較的浅く、検出面から70㎝を測る。各壁はほぼ垂直に掘り込まれている。主軸の方向はN－13°－Eである。土壙内からは人骨１体と釘12が出土している。人骨は土壙の中央、底面の少し上で出土した。壮年後半の女性と推定される。立膝坐位でN－55°－Wの方向を向いている。



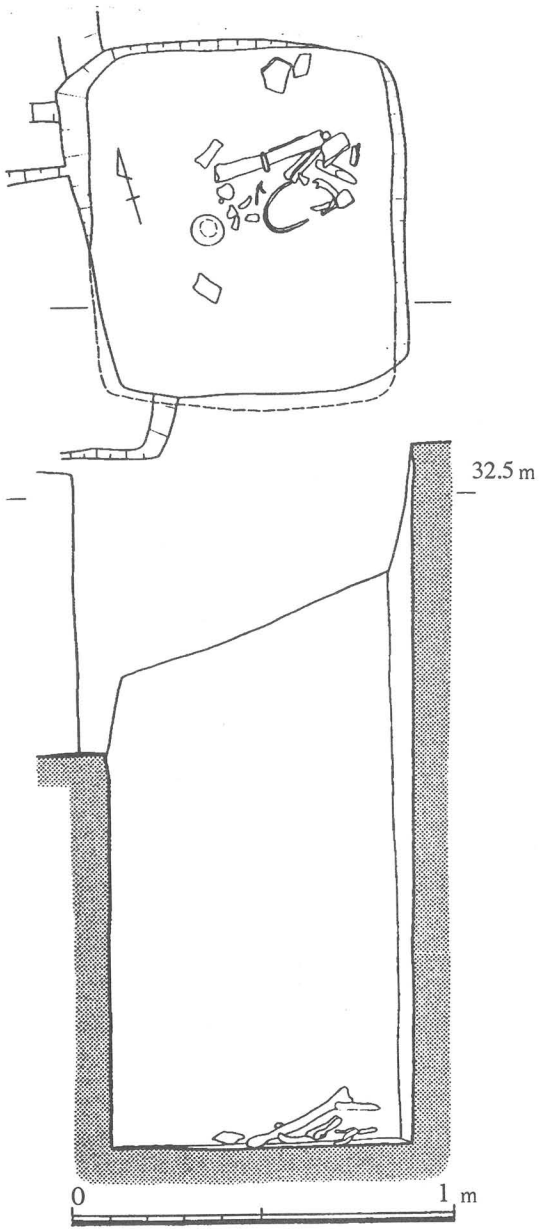
第192図　A Ⅰ区西52号墓実測図

西53号墓（第１９３図） 墓域のやや北に位置する。東－西31号墓、西－西52号墓、北－西72号墓、南－西51号墓に四方を囲まれる形で掘り込まれている。平面ほぼ正方形の素掘り土壙である。大きさは比較的大きく、長さが98㎝、短径77㎝を測る。深さは深く、検出面から185 ㎝を測る。各壁はほぼ垂直に掘り込まれている。主軸の方向はＮ－13°－Ｅである。土壙内からは人骨１体と包丁、土師質土器皿2が出土している。

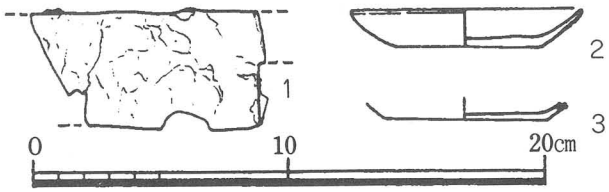
人骨は土壙の中央、底面の少し上で出土した。壮年後半の女性のものである。残存状況は悪いため埋葬時の体勢は不明である。

包丁（第１９４図－１） 壙底のやや南側から出土した。残存状況は悪く刃部のみである。残存長９㎝を測る。

土師質土器皿（第１９４図－２） 壙底の中央から出土した。１は口径９．０㎝、底径５．５㎝、器高１．５㎝を測る。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡黄赤色である。２は底部片である。底径６．３㎝を測る。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡黄色である。



第193図　ＡＩ区西53号墓実測図

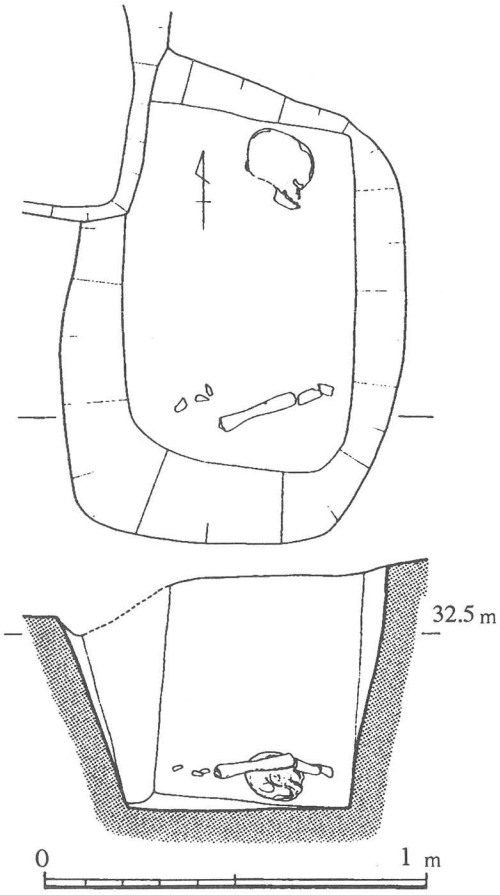


第194図　ＡＩ区西53号墓出土遺物実測図

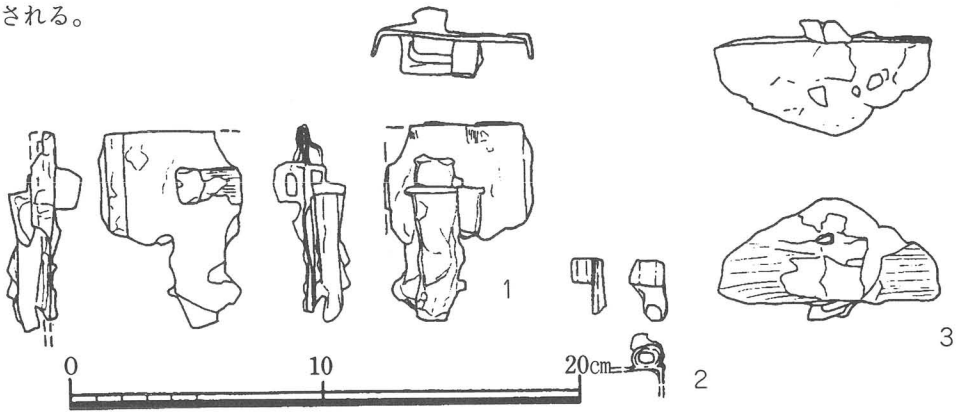
西54号墓（第１９５図） 墓域の西に位置する。西－西55号墓、北－西58号墓に隣接する形で掘り込まれている。平面長方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長さが117㎝、短径93㎝を測る。深さは浅く、検出面から60㎝を測る。主軸の方向はＮである。土壙内からは人骨１体と鉄製金具が出土している。

人骨は土壙の中央、底面の少し上で出土した。壮年後半～熟年の女性のものと考えられる。残存状況は悪いため埋葬時の体勢は不明である。

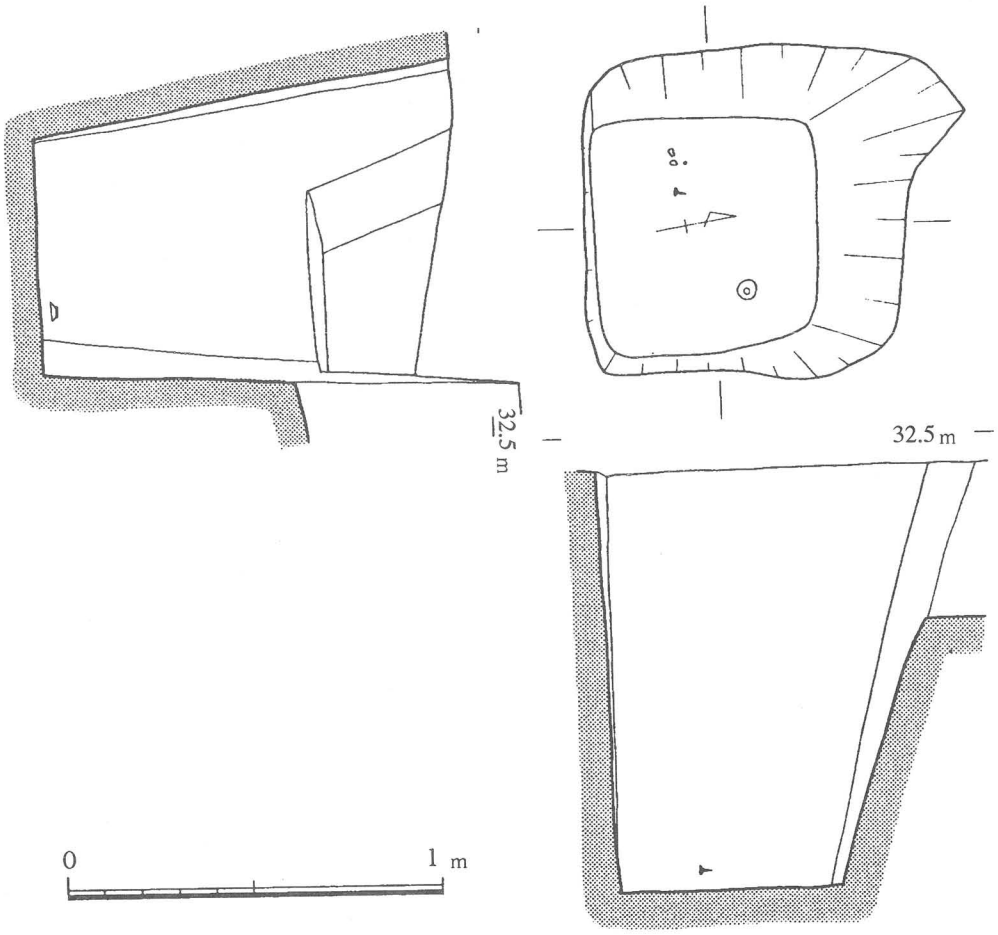
鉄製金具（第１９６図－１～２） １は折り曲げて加工された厚さ２㎜程度の鉄板に留め金状の金具がつく。内外面に木質が付着している。幅６．４㎝、残存長７．８㎝を測る。２は折り曲げた鉄板に釘が打ち込まれてる。残存長８．２㎝を測る。３は折り曲げて加工された鉄板にヒモ通しのような環状の金具がつき、すべて棺に使われた金具と推定される。



第195図　ＡＩ区西54号墓実測図



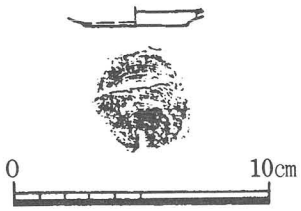
第196図　ＡＩ区西54号墓出土遺物実測図



第197図　ＡＩ区西55号墓実測図

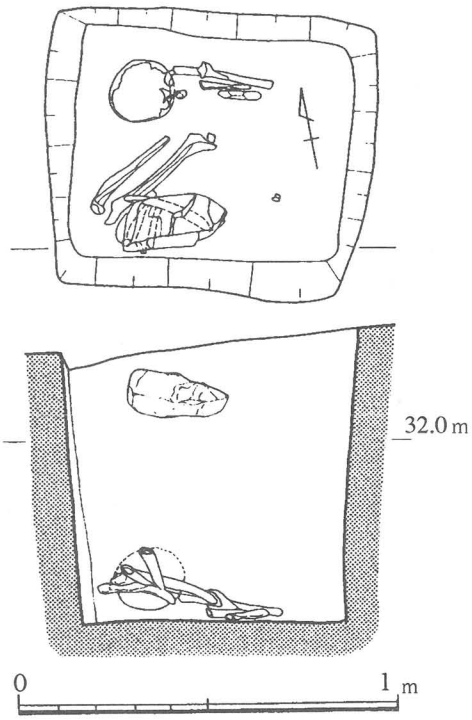
西55号墓（第１９７図）墓の西に位置する。東－西54号墓、北－西58号墓に隣接する形で掘り込まれている。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長径が85㎝、短径85㎝を測る。深さは比較的深く、検出面から111 ㎝を測る。主軸の方向はＮである。土壙内からは土師質土器皿１が出土している。

土師質土器皿（第１９８図）壙底の中央から出土した。底部片である。底径４．０㎝を測る。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡黄赤色である。



第198図　ＡＩ区西55号墓出土遺物実測図

西56号墓（第１９９図） 墓域の西端に位置する。東－西51号墓、南－西59号墓に隣接する形で掘り込まれている。平面ほぼ正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長径が87㎝、短径74㎝を測る。深さは比較的浅く、検出面から70㎝を測る。主軸の方向はＮ－15°－Ｅである。土壙の西より、検出面から20㎝の高さに大きい礫1 が出土している。土壙内からは人骨１体と銭貨２、銅製金具２、釘24、土師質土器皿2 が出土している。人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。熟年の男性と思われる。立膝坐位でＳ－60°－Ｗの方向を向いている。

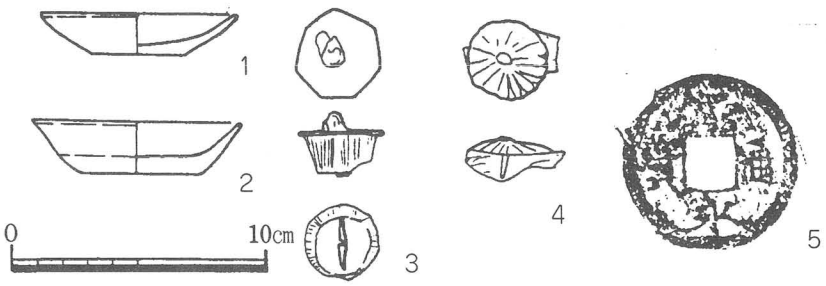


第199図　ＡⅠ区西56号墓実測図

銭貨（第２００図－５） 銅製。2枚が出土した。いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。内訳は1 枚がハ寶銭であり、もう1 枚は錆化が著しく判読不明である。ハ寶銭の遺存状態は良好であるにもかかわらず、文字が不鮮明なのは鋳造時に問題があると考えられる。

銅製金具（第２００図－３～４） ３は径２．２㎝の平面６角形を呈する金具と木質が金具により留められている。栓のような用途と推定される。４は径２．２㎝の菊の文様を呈する金具と木質が金具により留められている。鋲のような用途と推定される。

土師質土器皿（第２００図－１～２） １は 口径８．０㎝、底径３．６㎝、器高１．６㎝を測る。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好である。２は 口径８．２㎝、底径４．８㎝、器高２．０㎝を測る。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好である。色調は淡黄赤色である。



第200図　ＡⅠ区西56号墓出土遺物実測図

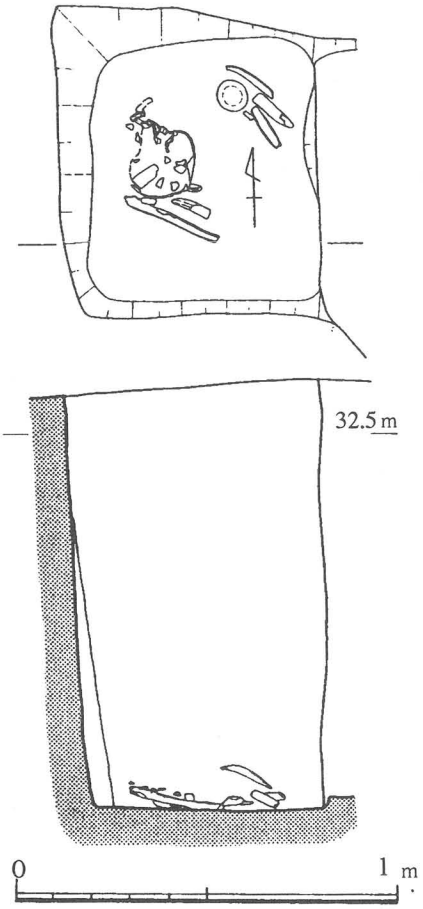
西57号墓（第２０１図）墓域の南西端に位置する。東－西45号墓に隣接する形で掘り込まれている。

平面正方形の素掘りの土壙である。東壁は西45号墓と切りあっている。大きさは比較的小さく、長径が83㎝、短径70㎝を測る。深さは比較的深く、検出面から110 ㎝を測る。主軸の方向はＮである。土壙内からは人骨１体と鎌1、土師質土器皿2が出土している。

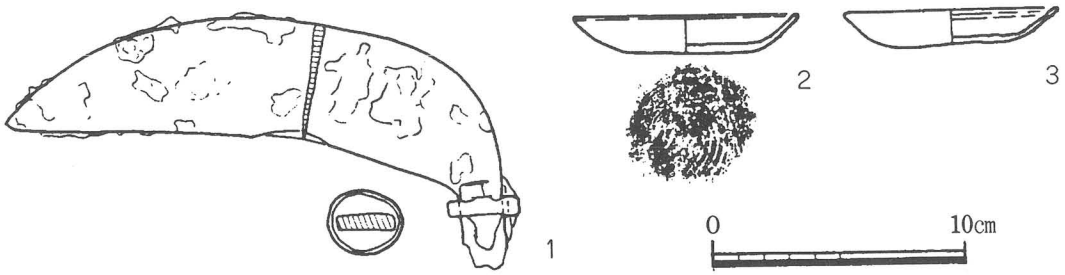
人骨は床面ほぼ中央で出土している。壮年の女性と考えられる。立膝坐位でＮ－55°－Ｅの方向を向いている。

鎌（第２０２図－１）土壙底の北東から出土した。残存状況が良好で関の部分には、柄を固定するための責め金具が認められる。

土師質土器皿（第２０２図－２～３）壙底の北側から出土した。２は口径８．９㎝、底径４．５㎝、器高１．３㎝を測る。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。３は口径８．６㎝、底径５．０㎝、器高１．５㎝を測る。色調は薄黄赤色である。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。



第201図　ＡＩ区西57号墓実測図

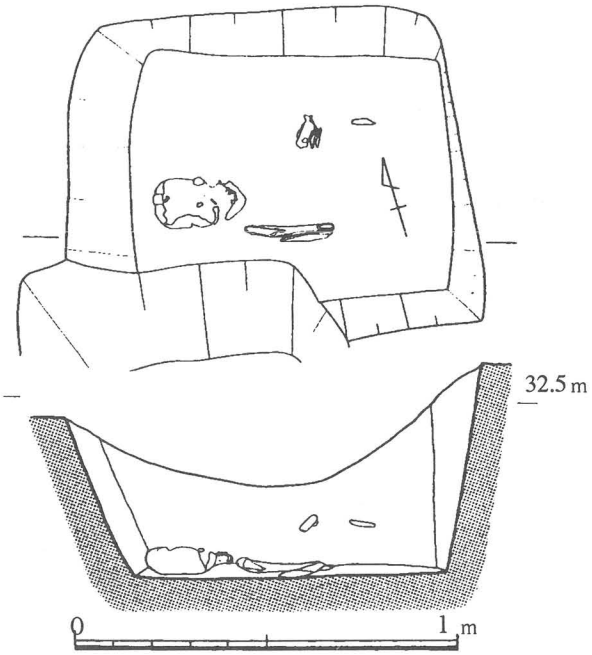


第202図　ＡＩ区西57号墓出土遺物実測図

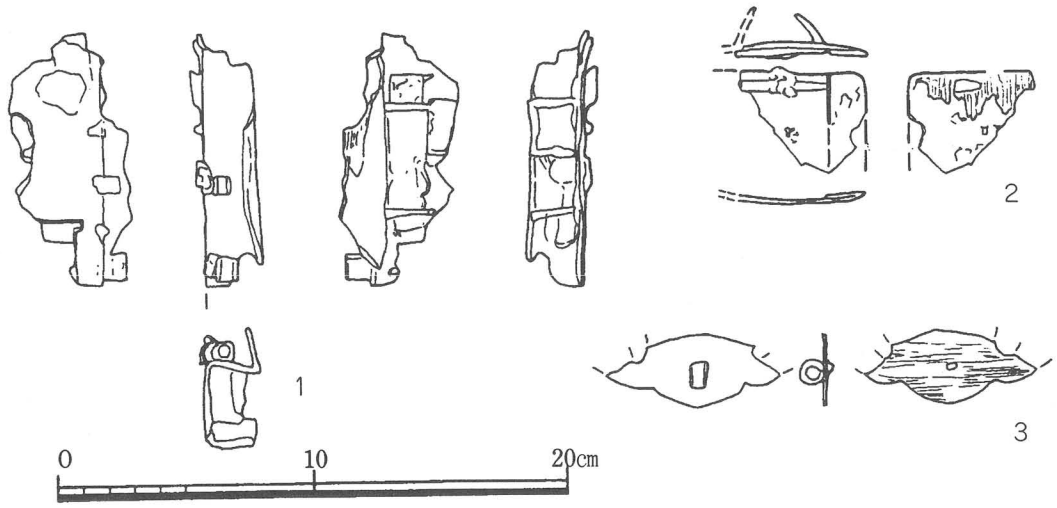
西58号墓（第２０３図）墓域の西に位置する。東－西47号墓・西48号墓、南－西54号墓・西55号墓に隣接する形で掘り込まれている。平面正方形の素掘り土壙である。南壁は西55号墓ときりあっている。大きさは比較的大きく、長径が100㎝、短径88㎝を測る。深さは比較的浅く、検出面から60㎝を測る。主軸の方向はＮ－15°－Ｅである。

土壙内からは人骨１体と鉄製金具1が出土している。成人骨で性別不明である。残存状況は悪く埋葬時の姿勢は不明である。

鉄製金具（第２０４図－１～３）土壙底のほぼ中央から出土した。１は折り曲げて加工された鉄板が組み合わせてある。木質が付着している。残存長８．２㎝を測る。２は折り曲げた鉄板に鋲が打ち込まれてる。木質が付着している。残存長６㎝を測る。３は鉄板に環状の金具が取り付けられている。棺に打ち付けられた金具と推定される。



第203図　ＡＩ区西58号墓実測図



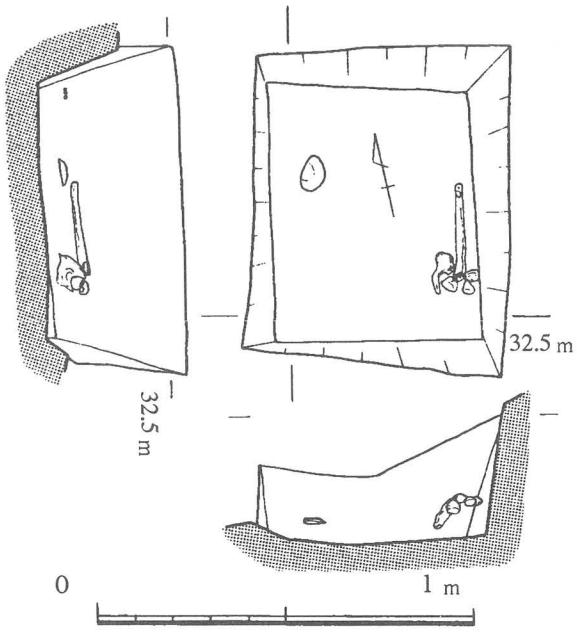
第204図　ＡＩ区西58号墓出土遺物実測図

西59号墓（第２０５図）墓域の西に位置する。東－西50号墓、北－西56号墓に隣接する形で掘り込まれている。平面ほぼ正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長径が82㎝、短径68㎝を測る。深さは非常に浅く、検出面から38㎝を測る。主軸の方向はＮ－14°－Ｅである。土壙内からは人骨１体と土師質土器皿が出土している。

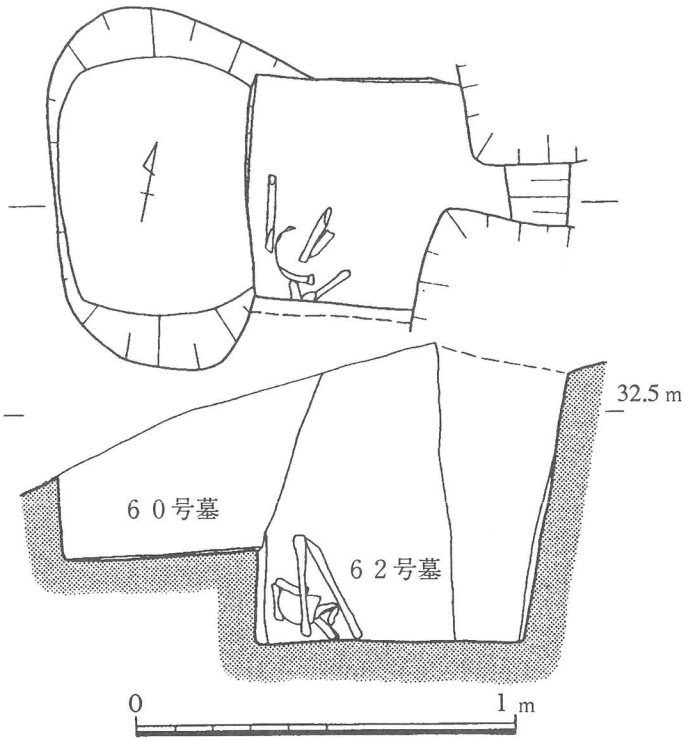
人骨はやや東よりの床面よりやや上で出土している。成人のものである。

残存状況は悪いが、仰臥坐位で、Ｓ－３０°－Ｗを向いている。

西60号墓（第２０６図）墓域のやや東に位置する。東－西62号墓、西－西69号墓、北－西63号墓、南－西18号墓・西19号墓に四方を囲まれる形で掘り込まれている。平面楕円形の素掘りの土壙である。東壁は西62号墓ときりあっている。大きさは比較的小さく、長径が93㎝、短径52㎝を測る。深さは浅く、検出面から50㎝を測る。主軸の方向はＮ－７°－Ｗである。土壙内からは人骨及び遺物は出土しなかった。



第205図　ＡＩ区西59号墓実測図



第206図　ＡＩ区60・62号墓実測図

西61号墓（第２０７図（墓域の東端の中央やや北よりに位置する。西－西62号墓、南－西21号墓に隣接する形で掘り込まれている。

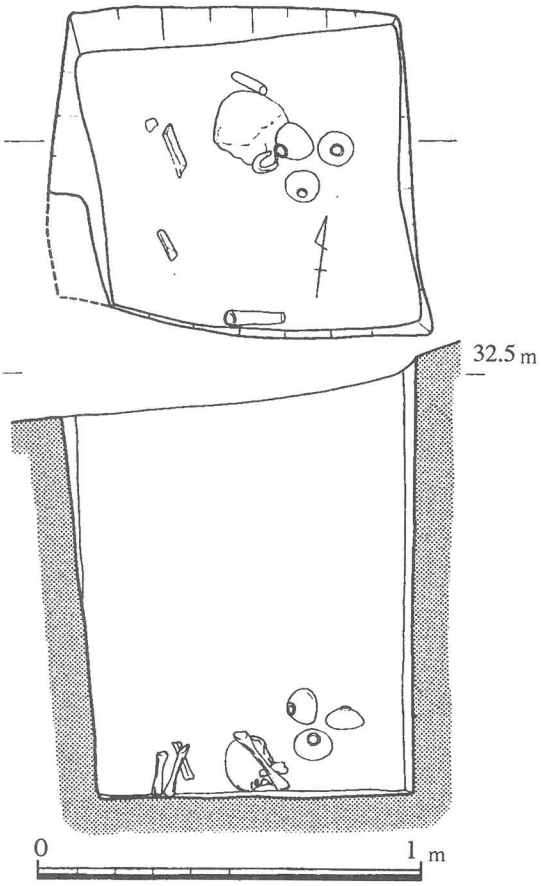
平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的小さく、長径が69㎝、短径60㎝を測る。深さは比較的深く、検出面から126㎝を測る。

主軸の方向はＮ－20°－Ｗである。土壙内からは人骨2体と、鋏1、剃刀1、煙管1、磁器碗5が出土している。人骨は熟年男性と熟年性別不明と推定される。

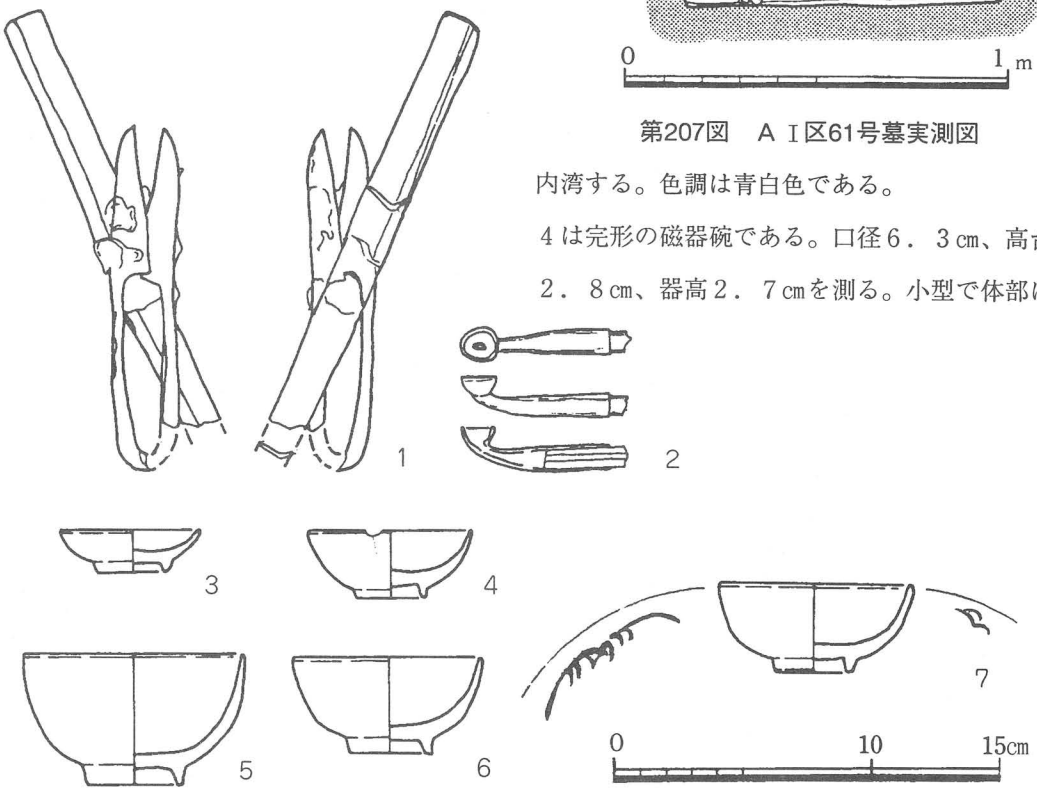
碗（第２０８図－３～７）頭蓋骨の横から出土している。すべて伏せるような状態で検出された。特に大小２枚づつ重ねた状態で出土した。

３は完形の磁器である。口径５．５㎝、高台径２．７㎝、器高１．８㎝を測る。小型で浅く、体部は内湾する。色調は青白色である。

４は完形の磁器碗である。口径６．３㎝、高台径２．８㎝、器高２．７㎝を測る。小型で体部は内



第207図　ＡＩ区61号墓実測図



第208図　ＡＩ区61号墓出土遺物実測図

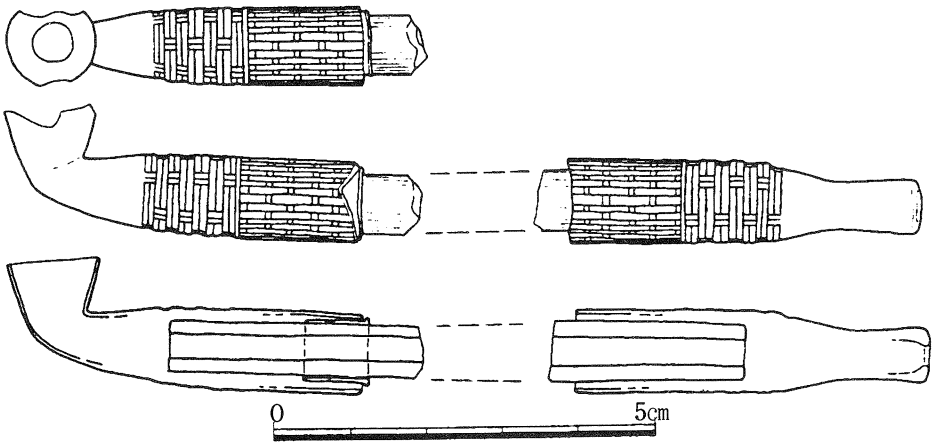
湾する。口縁部には打ち欠かれたと推定される痕跡が残る。色調は青白色である。５は完形の磁器碗である。口径８．５㎝、高台径３．７㎝、器高５．１㎝を測る。体部は内湾しながら立ち上がる。色調は青白色である。見込み面には使用痕が認められる。１９世紀第２四半期に地方窯で焼かれた広東碗である。６は完形の磁器碗である。口径７．４㎝、高台径３．２㎝、器高３．８㎝を測る。体部は内湾しながら立ち上がる。色調は青白色である。見込み面には使用痕が認められる。７は完形の磁器染め付け碗である。口径７．５㎝、高台径３．０㎝、器高３．５㎝を測る。体部は内湾しながら立ち上がる。色調は青白色である。

鋏（第２０８図－１） 鉄製のにぎり鋏である。剃刀と錆で付着した状態で出土した。全長１３．５㎝、刃部長６．０㎝を測る。

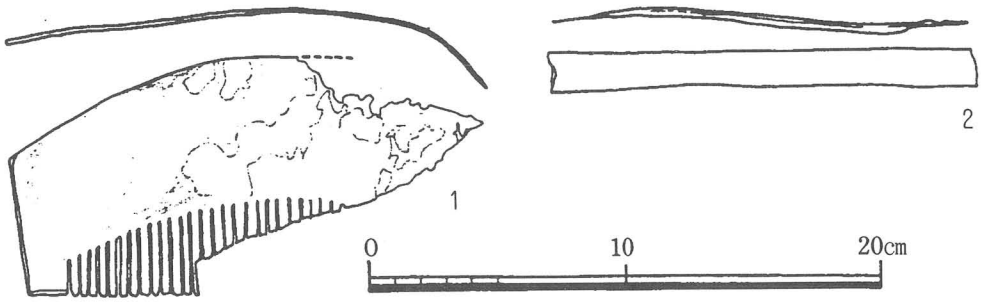
剃刀（第２０８図－１） 厚さが１㎜程度の薄く細長い鉄板を中央で、「く」の字に折り曲げたものである。鋏に付着して検出された。断面は”く”の字形を呈する。幅は１．８㎝で残存長は１８㎝である。

煙管（第２０８図－２） 火皿側の金具は長さ5.7 ㎝、火皿の口径1.5 ㎝、羅宇挿入口の口径1.0 ㎝となっている。羅宇には竹が用いられている。脂返しの湾曲は小さい。

西62号墓（第２０６図） 墓域の東端の中央やや北よりに位置する。東－西21号墓・西61号墓、西－西60号墓に挟まれる形で掘り込まれている。平面ほぼ正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的小さく、長径が77㎝、短径63㎝を測る。深さは比較的浅く、検出面から80㎝を測る。主軸の方向はＮ－７°－Ｗである。土壙内からは人骨１体と、煙管1、鉄製金具1、櫛1が出土している。人骨は土壙のほぼ南西より床面よりやや上で出土している。熟年後半の女性のものと思われる。



第209図　ＡＩ区62号墓出土遺物実測図（１）



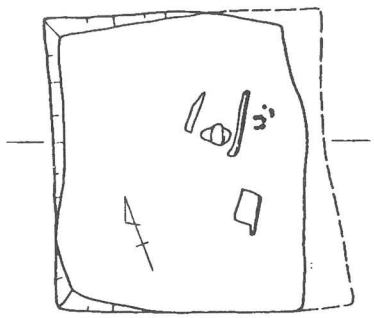
第210図　ＡⅠ区62号墓出土遺物実測図（２）

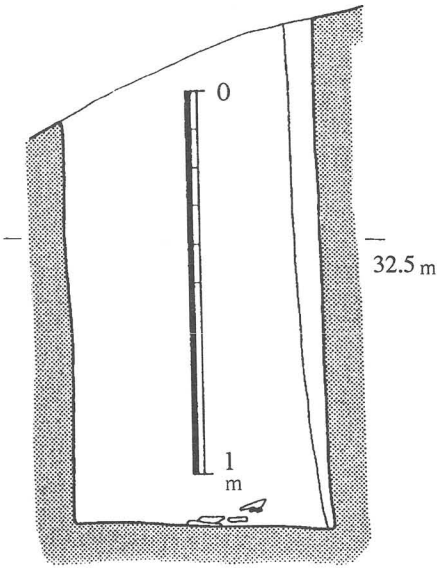
煙管(第２０９図) 火皿側の金具は長さ4.7 ㎝、火皿の口径1.2 ㎝、羅宇挿入口の口径1.1 ㎝となっている。吸口側の金具は長さ4.6 ㎝、羅宇挿入口の口径1.1 ㎝、吸口の端部の口径0.7 ㎝を測る。両金具ともに格子状の装飾が施されている。羅宇には竹が用いられている。火皿側の金具と羅宇の間には薄い筒状の金具があり、装着を良くしている。火皿は逆台形を呈し、脂返しの湾曲はほとんど消失し、火皿の下に直角に接続する。

銅製金具（第２１０図－２） 長さ８㎝、幅７㎜の板状を呈する。緑青色をしている。

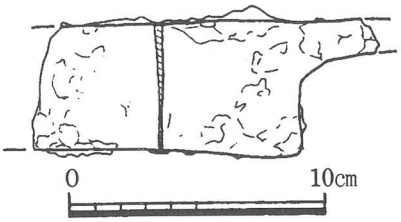
櫛（第２１０図－１） べっこう製の横櫛である。残存長９．５㎝、幅４．５㎝を呈する。

西63号墓（第２１１図） 墓域の東端の中央やや北よりに位置する。北－西64号墓、西－西70号墓、南－西60号墓・西62号墓に三方を囲まれる形で掘り込まれている。平面ほぼ正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的小さく、長径が80㎝、短径68㎝を測る。深さは比較的深く、検出面から140 ㎝を測る。主軸の方向はＮ－７°－Ｗである。土壙内からは人骨１体と、包丁1 、土師質土器皿





第211図　ＡⅠ区西63号墓実測図



第212図　ＡⅠ区西63号墓出土遺物実測図

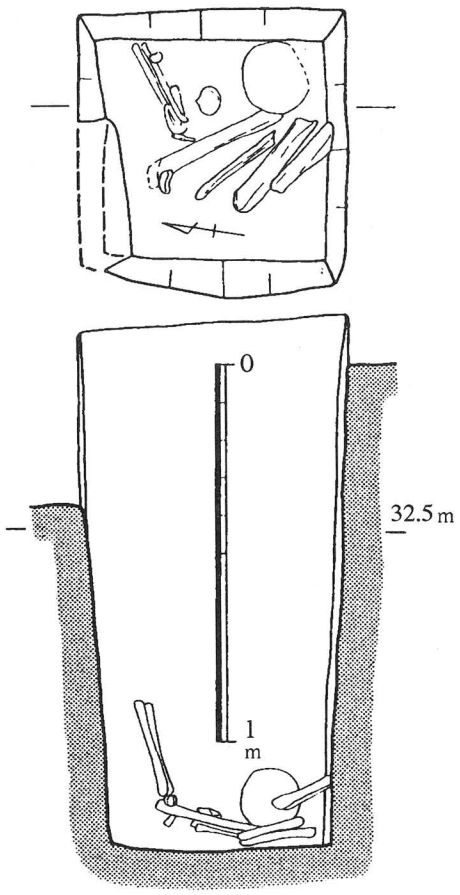
1、釘1が出土している。

人骨は土壙のほぼ中央より床面よりやや上で出土している。小児のものである。残存状態は非常に悪く、性別及び埋葬時の体勢は不明である。

包丁（第２１２図） 土壙底の東側で出土した。刃部中央から茎にかけて残存する。残存長13cm、茎の幅1.3cm、刃幅5cmを測る錆化が著しい。

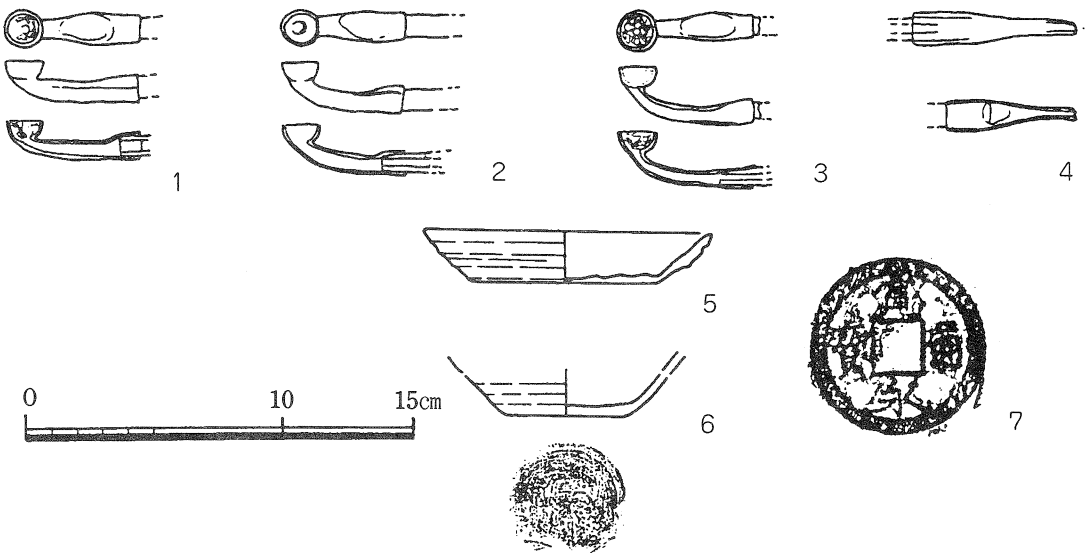
西64号墓（第２１３図） 墓域の北東に位置する。北－西65号墓・西67号墓、西－西68号墓、南－西63号墓に三方を囲まれる形で掘り込まれている。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長径が100 cm、短径70cmを測る。深さは比較的深く、検出面から140 cmを測る。主軸の方向はＮ－７°－Ｗである。土壙内からは人骨１体と、煙管2、土師質土器皿1、銭貨1が出土している。

人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。熟年後半から老年男性と思われる。仰臥坐位でＮ－70°－Ｗを向いている。



第213図　ＡＩ区西64号墓実測図

煙管（第２１４図－１～３・第215図） 土壙底の北側から出土した。火皿側の金具２つは互違いに、革製の袋に入っていた。１は火皿側の金具は長さ5.3 cm、火皿の口径1.5 cm、羅宇挿入口の口径0.9 cmとなっている。雁首部分と挿入口の間は使用時の打撃により窪んでいる。脂返の湾曲はほとんどなくなっている。２は火皿側の金具は長さ4.8 cm、火皿の口径1.4 cm、羅宇挿入口の口径1.0 cmとなっている。雁首部分と挿入口の間は使用時打撃により窪んでいる。脂返しの湾曲は小さい。３は火皿側の金具は長さ5.4cm、火皿の口径1.5 cm、羅宇挿入口の口径1.0 cmとなっている。雁首部分と挿入口の間は度かさなる使用時の打撃により窪んでいる。



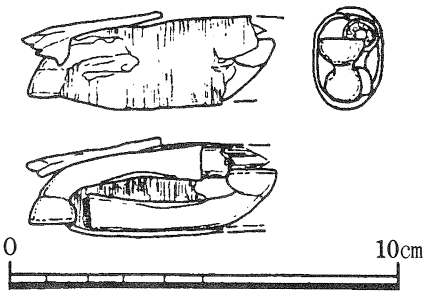
第214図　ＡＩ区西64号墓出土遺物実測図

脂返しは細く、湾曲している。４は吸口側の金具は長さ6.4 ㎝、羅宇挿入口の口径1.2 ㎝、吸口の端部の口径0.6 ㎝を測る。羅宇には竹が用いられている。火皿内にはタール状の付着物が認められる。

土師質土器皿（第２１４図－５・６）５は口径１１．２㎝、底径７．０㎝、器高２．０㎝を測るもので、底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。

焼成は良好で内外面とも淡黄色である。

銭貨（第２１４図－７）いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。



第215図　ＡＩ区西64号墓出土遺物収納模式図

西65号墓（第２１６図）墓域の北東端に位置する。

南－西64号墓と隣接する形で掘り込まれている。西66号墓と西67号墓と切り合っているため南東方向のコーナーのみ残存している。平面形は方形であることはうかがえるが、長短の比率はわからない。大きさは１辺が30㎝以上80㎝未満、もう一辺が40㎝以上100 ㎝未である。深さは比較的深く、検出面から60㎝を測る。主軸の方向はN－７°－Wである。土壙内から遺物は出土していない。

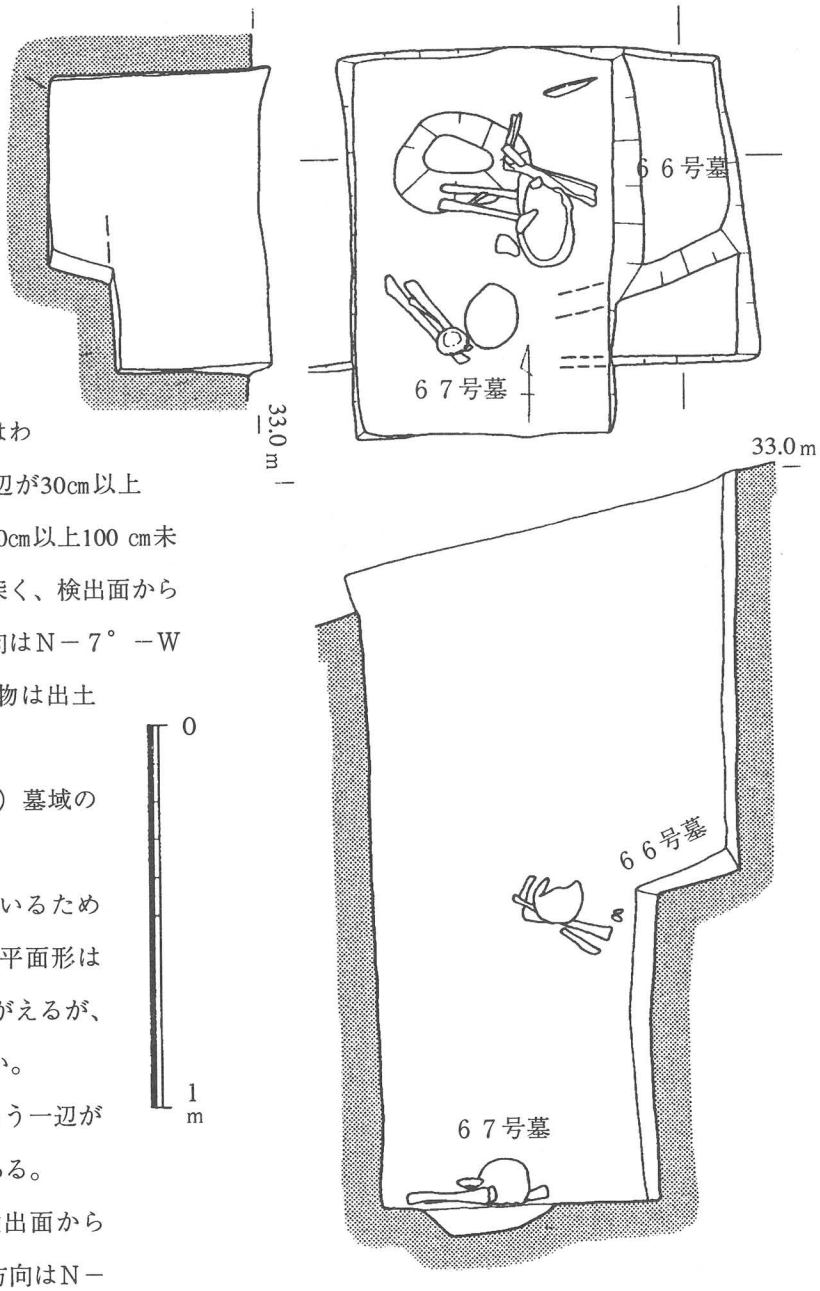
西66号墓（第２１６図）墓域の北東に位置する。

西67号墓と切り合っているため東半のみうかがえる。平面形は方形であることはうかがえるが、長短の比率はわからない。

大きさは1辺が55㎝、もう一辺が40㎝以上100 ㎝未満である。

深さは比較的深く、検出面から110 ㎝を測る。主軸の方向はN－７°－Wである。

土壙内からは人骨１体が出土している。

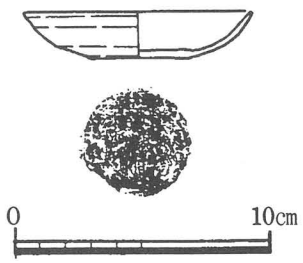


第216図　ＡⅠ区西65・66・67号墓実測図

人骨は熟年女性と考えられる。残存状況は悪く埋葬時の体勢は不明である。

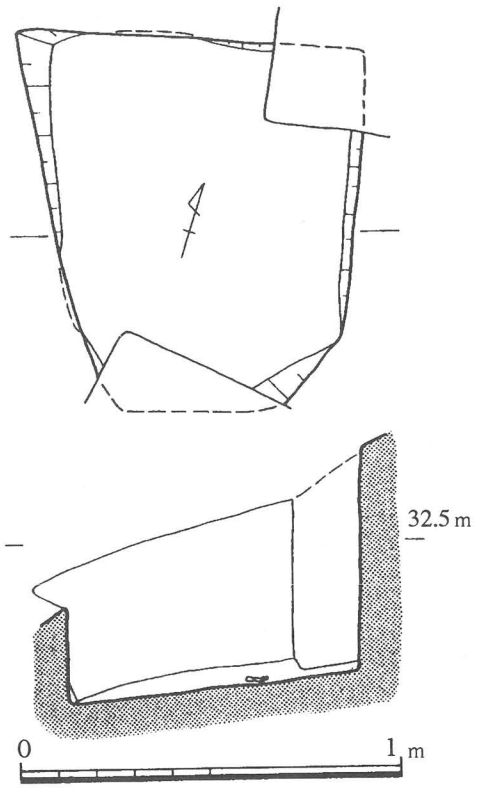
西67号墓（第２１６図） 墓域の北東に位置する。長辺100㎝、短辺70㎝、深さ175㎝を測る。主軸方向はNである。土壙底には径37㎝の隋円形で深さ7㎝の穴が掘り込まれている。土壙内からは土師質土器皿と人骨１体が出土している。人骨は熟年後半～老年男性と考えられる。

土師質土器皿（第２１７図） 下の人骨の上にのって出土した。口径９．０㎝、底径４．２㎝、器高１．８㎝を測るもので底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡黄赤色である。



第217図　ＡⅠ区西67号墓出土遺物実測図

西68号墓（第２１８図） 墓域の北東に位置する。平面正方形にちかい長方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長径が100㎝、短径90㎝を測る。深さは浅く、検出面から60㎝を測る。主軸の方向はN－７°－Wである。土壙内からは歯が出土している。歯は土壙のほぼ中央より床面よりやや上で出土している。成人のものである。



第218図　ＡⅠ区西68号墓実測図

西69号墓（第２１９図）墓域のやや北に位置する。平面長方形の素掘りの土壙である。大きさは大きく、長径が140 ㎝、短径100㎝を測る。深さは比較的深く、検出面から115㎝を測る。主軸の方向はＮ－７°－Ｅである。土壙内からは人骨１体と、煙管2、土師質土器皿２が出土している。

人骨は南壁よりの床面よりやや上で出土している。成人男性と推定される。仰臥坐位でＮ－70°－Ｗを向いている。

煙管（第２２０図－１）土壙のほぼ中央、人骨の下から出土した。火皿側の金具は長さ6.2㎝、火皿の口径1.5 ㎝、羅宇挿入口の口径1.0 ㎝となっている。雁首部分は比較的長く脂返しは大きく湾曲する。羅宇には竹が用いられている。

火皿内にはタール状の付着物が認められる。

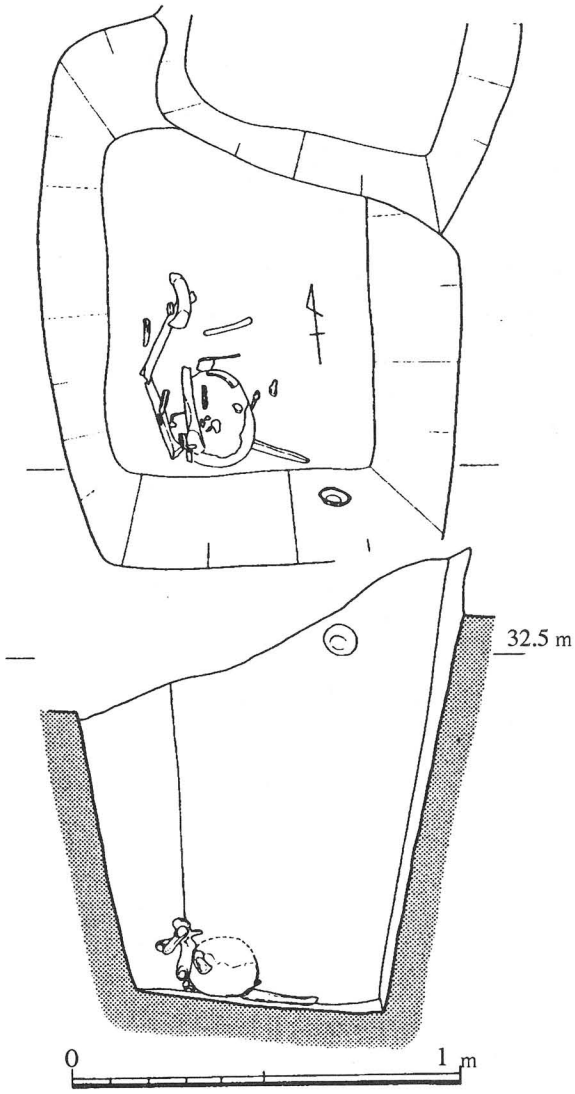
土師質土器皿（第２２０図－２～３）検出面付近から20㎝下の高さから出土した。

２は口径11.0㎝、底径7.0 ㎝、器高1.8 ㎝を測るもので、直線的にのびる体部をもち、口縁端部は薄くなっている。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。

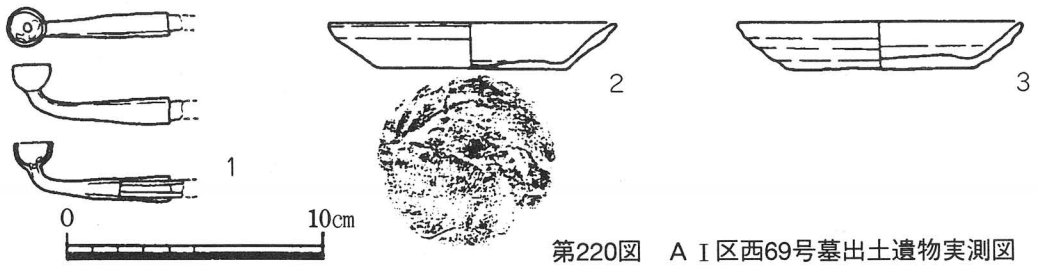
焼成は良好で内外面とも淡赤黄色である。

３は口径11.2㎝、底径7.3 ㎝、器高1.8 ㎝を測るもので、直線的にのびる体部をもち、口縁端部は薄くなっている。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡赤黄色である。

両方とも底部が広く、浅い形状をしている。



第219図　ＡＩ区西69号墓実測図



第220図　ＡＩ区西69号墓出土遺物実測図

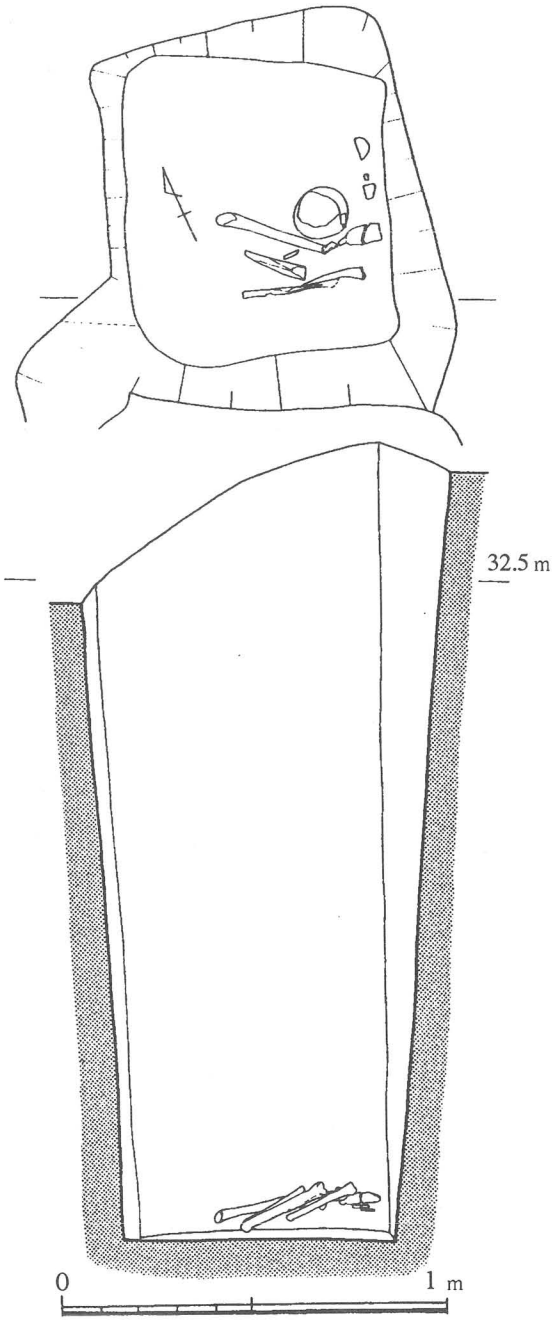
西70号墓（第２２１図）墓域のやや北に位置する。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長径が90㎝、短径88㎝を測る。深さは最も深く、検出面から210㎝を測る。主軸の方向はＮ－22°－Ｅである。土壙内からは人骨１体と、包丁1、土師質土器皿２が出土している。

人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。壮年～熟年と推定される。

立膝坐位でＳ－55°－Ｗを向いている。

包丁（第２２２図－１・２）土壙底の東側、人骨の下から出土した。刃部片と茎片である。刃部は幅5.3㎝を測る。

土師質土器皿（第２２２図－３）底部のみ残存している。



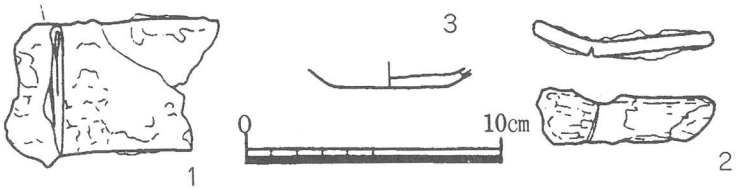
第221図　ＡⅠ区西70号墓実測図

底径4.3cmを測るもので、底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。

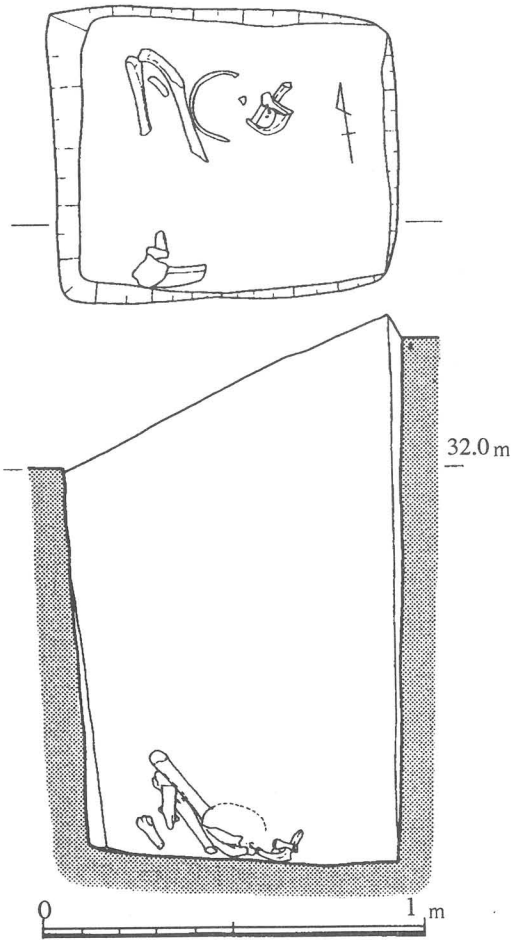
焼成は良好で内外面とも淡黄赤色である。

西71号墓（第２２３図）

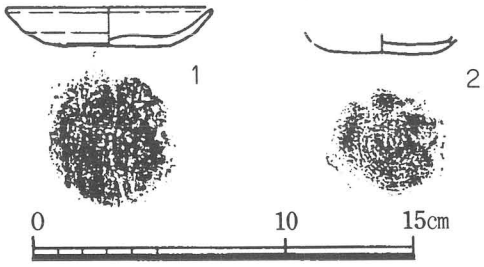
墓域のやや北に位置する。平面ほぼ正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長径が95cm、短径80cmを測る。深さはやや深く、検出面から130cmを



第222図　ＡⅠ区西70号墓出土遺物実測図



第223図　ＡⅠ区西71号墓実測図



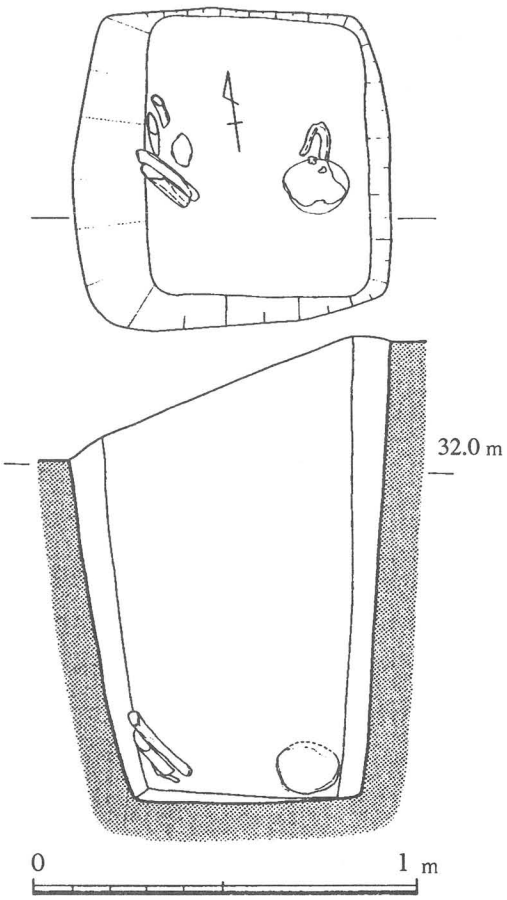
第224図　ＡⅠ区西71号墓出土遺物実測図

測る。主軸の方向はN－22°－Eである。土壙内からは人骨１体と銭貨が出土している。人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。壮年後半男性と推定される。立膝坐位でWを向いている。

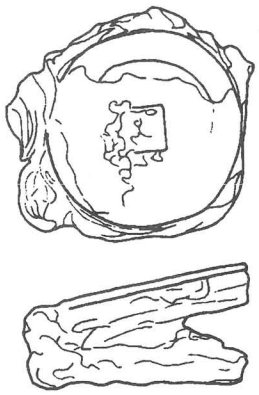
西72号墓（第２２５図）

墓域のやや北に位置する。平面ほぼ正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長径が85㎝、短径83㎝を測る。深さはやや深く、検出面から130㎝を測る。主軸の方向はN－７°－Eである。土壙内からは人骨１体と銭貨が出土している。人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。熟年後半女性と推定される。立膝坐位でWを向いている。

銭貨（第２２６図） 銅製・鉄製。土壙底の東側、頭蓋骨の下から出土した。５枚が錆により付着して出土した。いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。内訳は4枚が鉄銭であり、１枚は銅銭である。



第225図　ＡＩ区西72号墓実測図

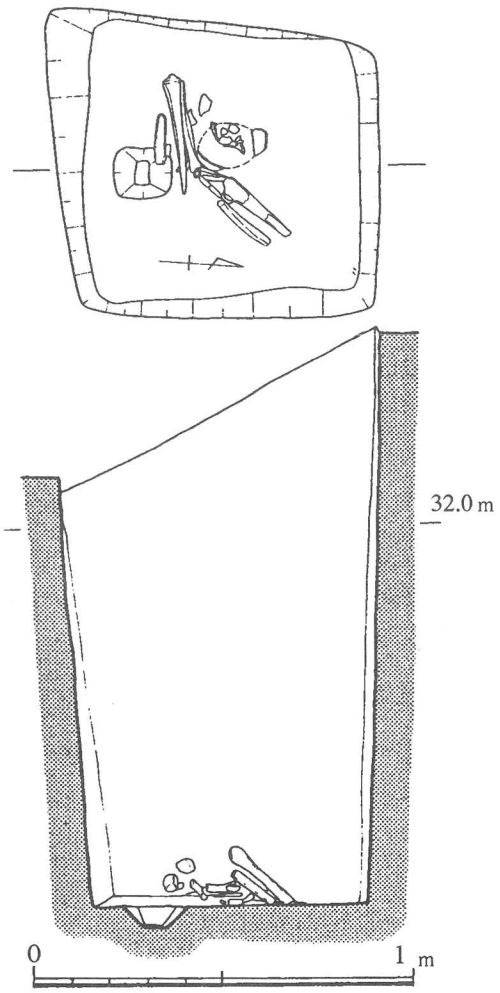


第226図　ＡＩ区西72号墓出土遺物実測図

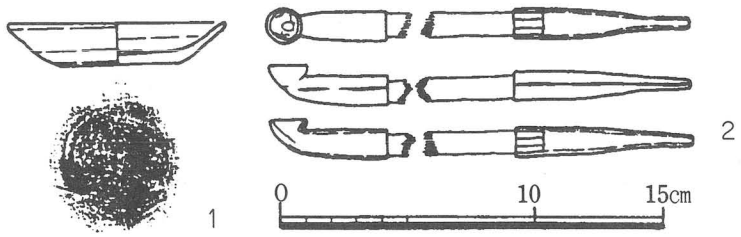
西73号墓（第２２７図）墓域の北端に位置する。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長径が88㎝、短径70㎝を測る。深さはやや深く、検出面から150 ㎝を測る。主軸の方向はＮ－７°－Ｅである。土壙の底面には一辺16㎝、方形の穴が掘り込まれている。土壙内からは人骨１体と煙管、土師質土器皿が出土している。

人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。熟年男性と推定される。立膝坐位でＳ－25°－Ｗを向いている。

煙管（第２２８図－２）火皿側の金具は長さ4.7 ㎝、火皿の口径1.4 ㎝、羅宇挿入口の口径1.1 ㎝となっている。火皿は逆台形を呈する脂返しの湾曲は消失し、火皿の下に首が直角に接続する。吸口側の金具は長さ7.0 ㎝、羅宇挿入口の口径1.1 ㎝、吸口の端部の口径0.4 ㎝を測る。羅宇には竹が用いられている。火皿内にはタール状の付着物が認められる。

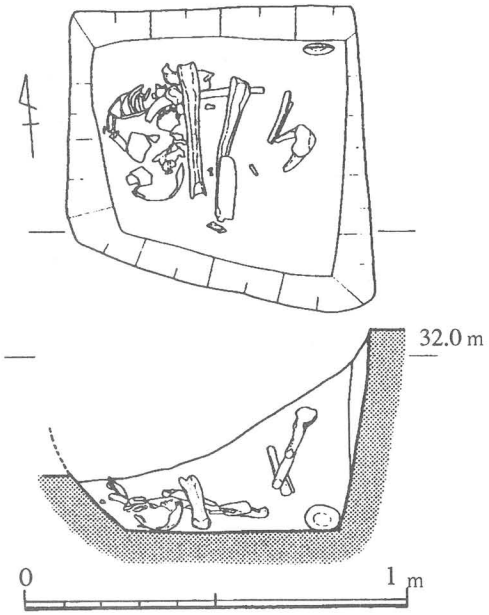


第227図　ＡⅠ区西73号墓実測図



第228図　Ａ　区西73号墓出土遺物実測図

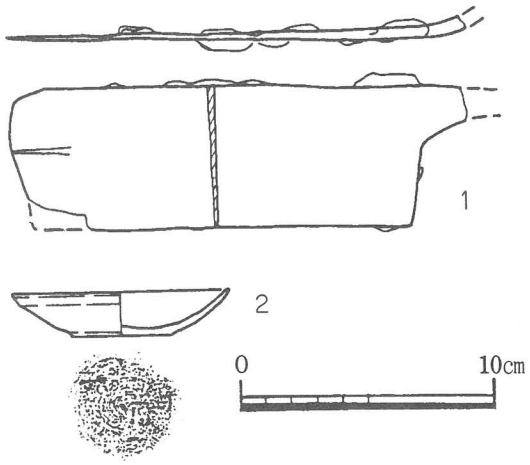
西74号墓（第２２９図）墓域の北端に位置する。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長径が88㎝、短径70㎝を測る。深さはやや深く、検出面から150㎝を測る。主軸の方向はＮ－７°－Ｅである。土壙内からは人骨１体と包丁、銭貨、土師質土器が出土している。人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。壮年女性と推定される。立膝坐位でＳ－40°－Ｗを向いている。



第229図　ＡＩ区西74号墓実測図

包丁（第２３０図－１）土壙底の中央、大腿骨の上から出土した。刃部先端と茎部分が欠損している。刃部先端は供献時にはすでに欠損していたものと考えられる。残存長18.0㎝、幅5.5㎝、厚さ0.3㎝を測る。

銭貨は銅製である。土壙底の西側、頭蓋骨の下から出土した。２枚が錆により付着して出土した。いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。錆化が著しく文字の判読は不明である。片面に布が付着している。



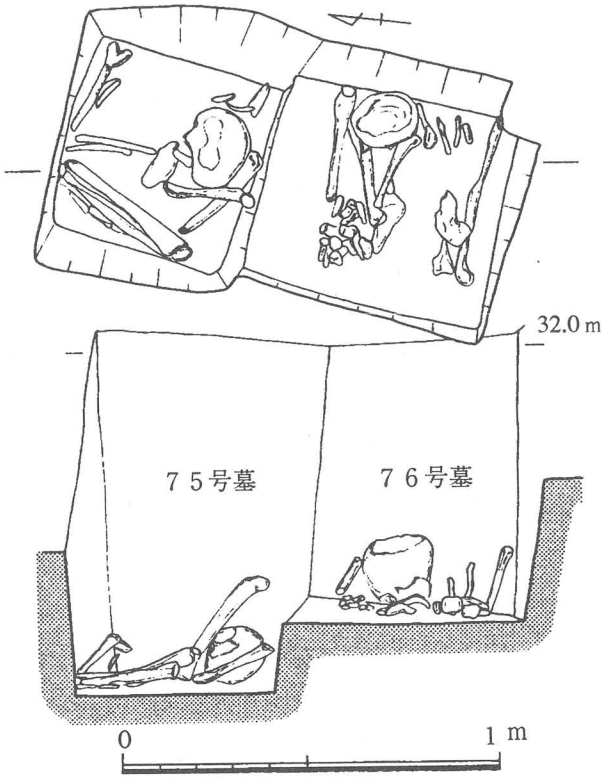
第230図　Ａ　区西74号墓出土遺物実測図

土師質土器皿（第２３０図－２）口径8.6 ㎝、底径4.0 ㎝、器高1.8 ㎝を測るもので、やや内湾する体部をもち、口縁端部は丸くおさめている。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡赤黄色である。

西75号墓（第２３１図）墓域のやや北に位置する。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的小さく、長径が74㎝、短径60㎝を測る。深さはやや浅く、検出面から98㎝を測る。主軸の方向はＮである。土壙内からは人骨１体と釘99本が出土している。

人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。壮年後半～熟年男性のものと考えられる。

立膝坐位でＮ－65°－Ｗを向いている。

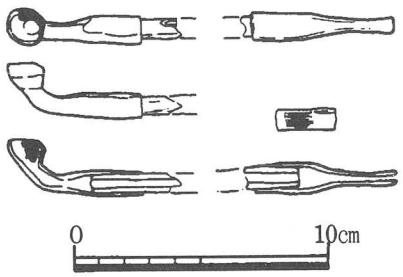


第231図　Ａ　区西75・76号墓実測図

西76号墓（第２３１図）墓域のやや北に位置する。平面ほぼ正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的小さく、長径が75㎝、短径70㎝を測る。深さはやや浅く、検出面から76㎝を測る。主軸の方向はＮである。土壙内からは人骨１体と煙管、釘46が出土している。人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。熟年男性のものである。

仰臥坐位でＮ－70°－Ｗを向いている。

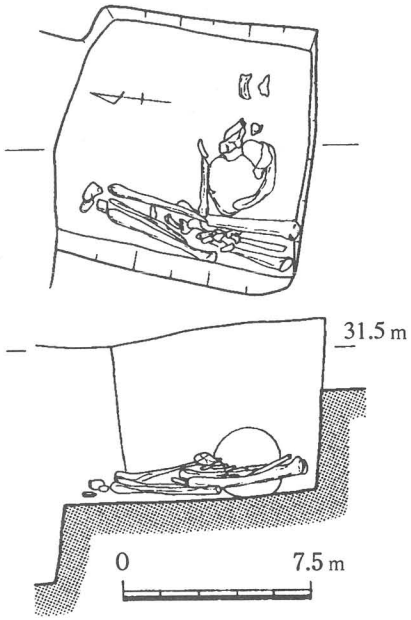
煙管（第２３２図）火皿側の金具は長さ5.3㎝、火皿の口径1.4㎝、羅宇挿入口の口径1.1㎝となっている。挿入口側には使用時の衝撃により平坦になった部分があり、使用されていたものであることがうかがえる。吸口側の金具は長さ5.6㎝、羅宇挿入口の口径1.1㎝、吸口の端部の口径0.6㎝を測る。羅宇には竹が用いられている。火皿内にはタール状の付着物が認められる。脂返しの湾曲は小さい。



第232図　Ａ　区西76号墓出土遺物実測図

西77号墓（第２３３図） 墓域の北西に位置する。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的小さく、径が68㎝を測る。深さはやや浅く、検出面から48㎝を測る。主軸の方向はＮである。土壙内からは人骨１体と土師質土器、銭貨、釘90が出土している。人骨は西壁よりの床面よりやや上で出土している。老年女性と推察される。仰臥坐位でＮ－80°－Ｗを向いている。

第234図　Ａ　区西77号墓出土銭拓影



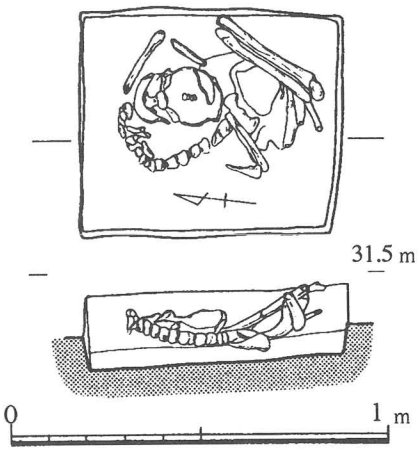
第233図　ＡⅠ区西77号墓実測図

銭貨（第２３４図） 銅製。5枚が錆により付着して出土した。いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。内訳は1 枚がハ寶銭、その他は腐食が著しく文字の判読は不明である。

西78号墓（第２３５図） 北西隅に位置する。平面ほぼ正方形の土壙である。大きさは比較的小さく、長径が69㎝、短径が60㎝を測る。深さは非常に浅く、検出面から20㎝を測る。但しこの辺りは検出面より１ｍ以上盛土をしていたものと考えられる。主軸の方向はＮである。土壙内からは人骨１体と釘４が出土している。

人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。

壮年女性のものと考えられる。仰臥坐位でＳ－35°－Ｅを向いている。



第235図　ＡⅠ区西78号墓実測図

西79号墓（第２３６図） 墓域のやや北に位置する。

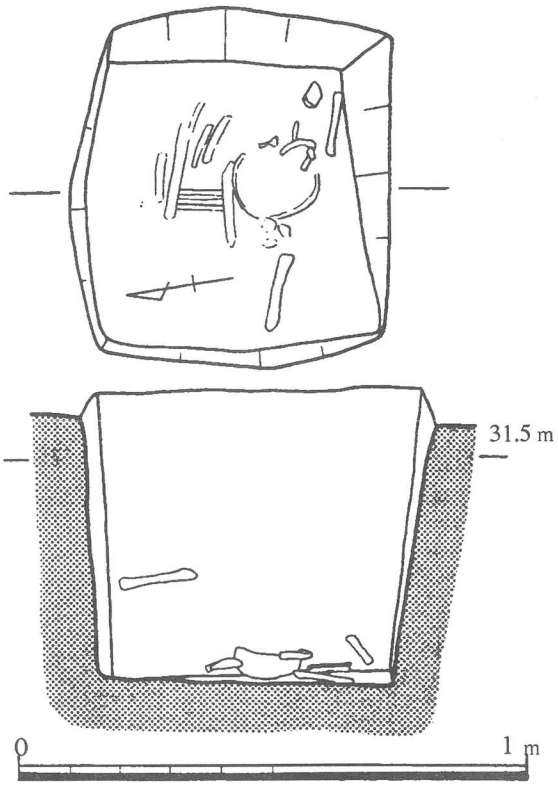
平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的小さく、長径が70㎝、短径が60㎝を測る。深さは非常に浅く、検出面から60㎝を測る。主軸の方向はＮ－７°－Ｗである。土壙内からは人骨１体と銭貨8、櫛２、鎌１、釘42、土師質土器皿が出土している。人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。熟年女性のものと考えられる。仰臥坐位でＮ50Ｗを向いている。床面には毛髪が残存していた。

銭貨（第２３７図） 銅製。9枚が錆により付着して出土した。いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。内訳は2枚がス寶銭、6枚がハ寶銭である。ハ寶銭の中には文銭1 枚と、寛通の間に素穴があるもの1 枚がある。

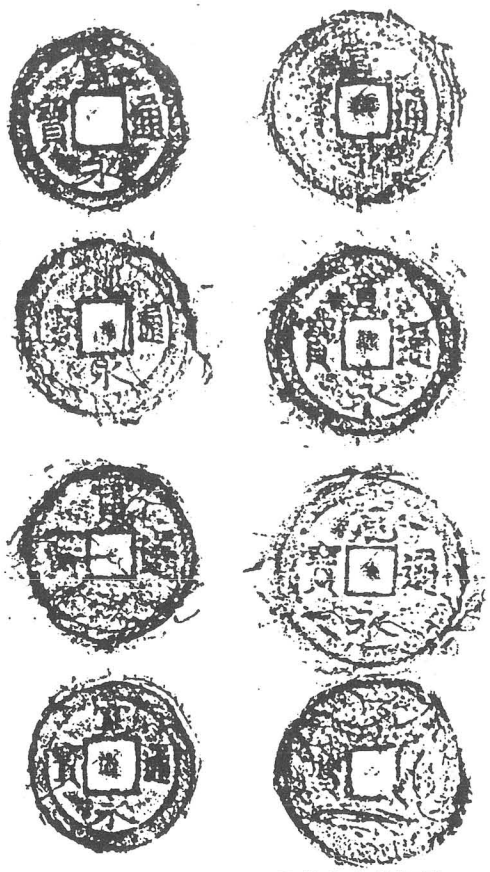
櫛（第２３８図－１・２） 竪櫛と横櫛がある。人骨の下で検出した頭髪の中にあった。１は竪櫛で幅2.3㎝、残存長3.5㎝、厚さ0.4㎝を測る。表面に黒色の漆状付着物が認められる。２は横櫛で端部片である。

鎌（第２３８図－４） 草刈鎌の中央より先端部分と推定される。先端が折れ付着している。残存長6.5㎝、幅2.5㎝、厚さ0.5㎝を測る。

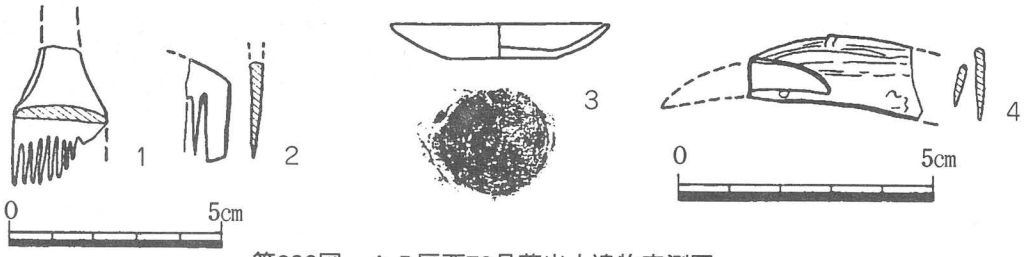
土師質土器皿（第２３８図－３） 口径8.0㎝、底径3.8㎝、器高1.3 ㎝を測るもので、やや内湾する体部をもつ。焼成は良好で内外面とも淡黄色である。



第236図　ＡⅠ区西79号墓実測図



第237図　ＡⅠ区西79号墓出土銭拓影



第238図　ＡＩ区西79号墓出土遺物実測図

西80号墓（第２３９図） 墓域の北西端に位置する。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的小さく、長径が76cm、短径が72cmを測る。深さは非常に浅く、検出面から64cmを測る。主軸の方向はＮ－７°－Ｅである。土壙内からは人骨１体と銭貨6、煙管1、銅製金具、釘66が出土している。

人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。熟年男性のものと思われる。立膝坐位でＷを向いている。

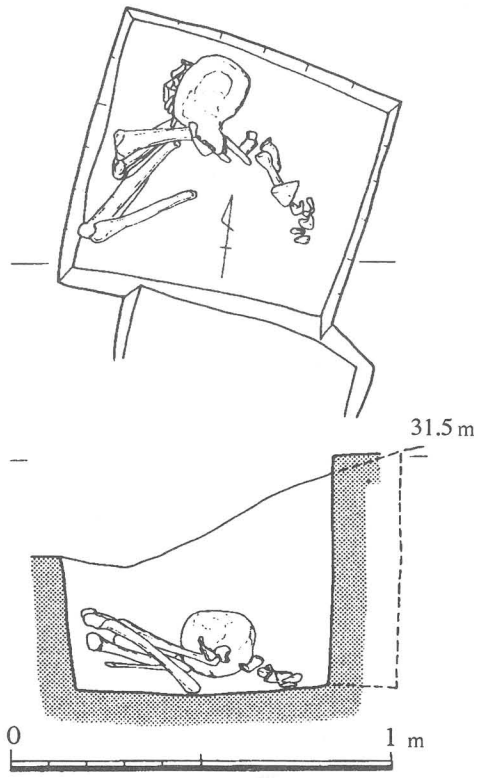
銭貨（第２４２図） 銅製。土壙のほぼ中央、頭蓋骨の下から出土した。6枚が錆により付着して出土した。

いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。内訳は1枚がス寶銭、5枚がハ寶銭である。ハ寶銭の中には文銭1枚がある。

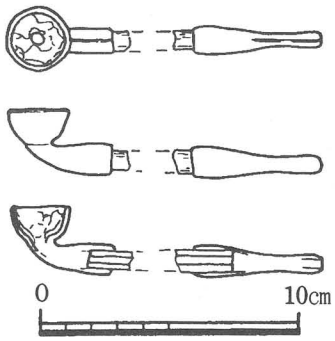
煙管（第２４０図） 土壙のほぼ中央、頭蓋骨の下から出土した。火皿側の金具は長さ4.2㎝、火皿の口径2.5㎝、羅宇挿入口の口径1.1㎝となっている。吸口側の金具は長さ4.9㎝、羅宇挿入口の口径1.0㎝、吸口の端部の口径0.6㎝を測る。接合のバリが上に現れている。火皿が非常に大きく、全体的に丸みを帯びている。脂返しの湾曲は消失している。

羅宇には竹が用いられている。火皿内にはタール状の付着物が厚く付着している。

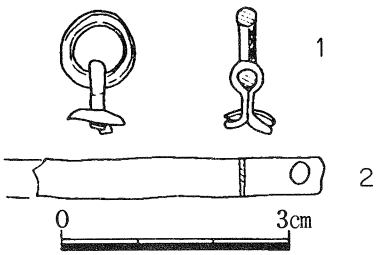
銅製金具（第２４１図－１・２） 板状金具と留金具



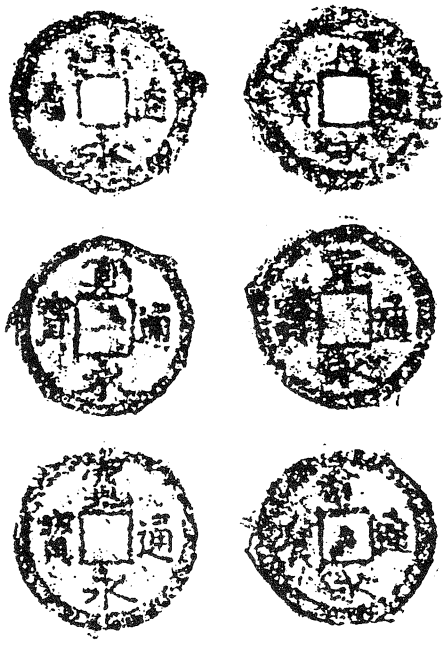
第239図　ＡＩ区西80号墓実測図



第240図　ＡＩ区西80号墓出土遺物実測図



第241図　ＡⅠ区西80号墓出土遺物実測図



第242図　ＡⅠ区西80号墓出土銭拓影

がある。板状金具は一部欠損しており、残存長4.0㎝以上幅0.5㎝で非常に薄い。端には径0.3㎝の穴が開いている。全体的に緑青がふいている。留金具は径１㎝の環状金具と径0.8㎝の盤状金具が金具で留められている。

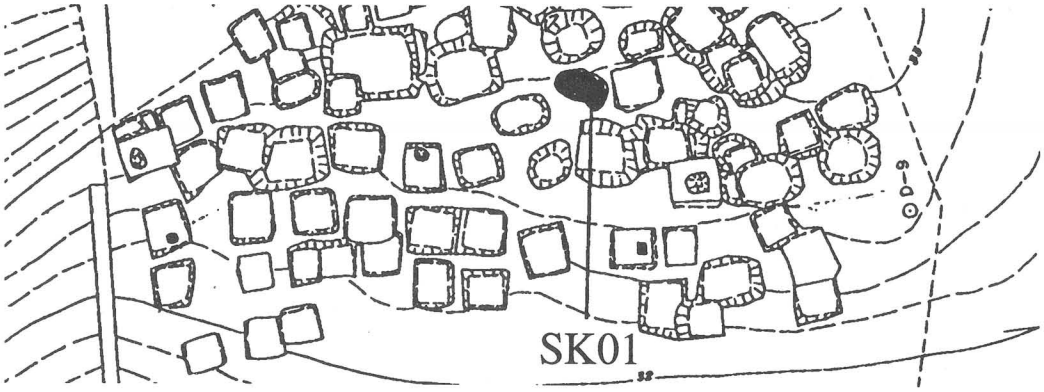
土器溜遺構　近世墓群の墓域中央よりよりやや南側で、西11号墓・西29号墓・西30号墓・西41号墓に囲まれた空間で不整形な溝を検出した。溝の大きさは検出面から長さ90㎝、幅70㎝、深さ30㎝を測る。溝は淡茶色のサクサクとした砂質土に覆われており、その中から須恵器瓶１、杯身１、壺１、高杯９が出土した。（第２４４図）土器類は土壙のやや西側によっている。溝の底面と土器の間には若干の間がある。

須恵器瓶（１）口径8 5㎝、頸部径4.0㎝、胴部最大径10.9㎝、器高10.7㎝を測る。口縁端部内面には段が1段つく。頸部には波状文が施されている。肩部は自然釉がはがれ黄色のあばた状を呈す。底部は丸底で、手持ち不整方向ヘラ削りのあとハケで調整している。焼成は良好である。

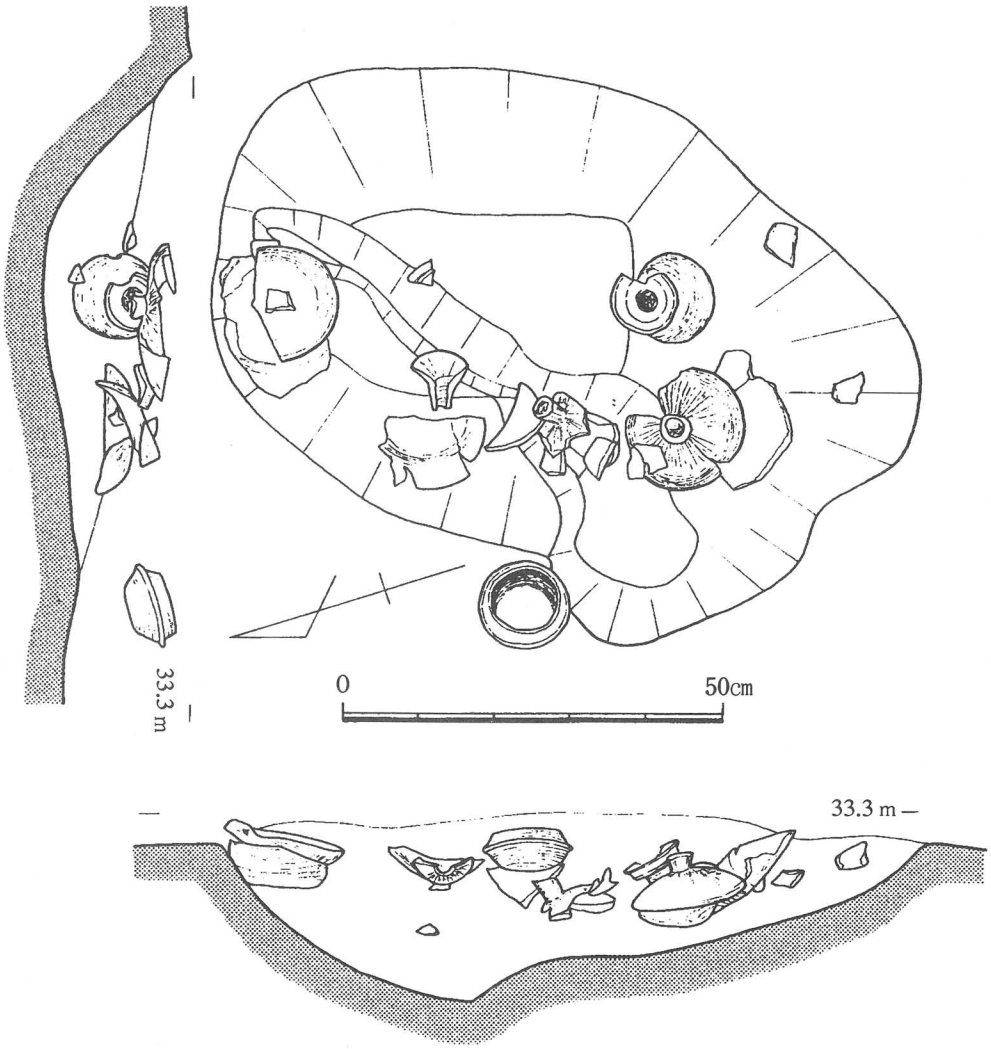
須恵器杯身（２）口径9.1㎝、胴部最大径12.5㎝、底部径6.5㎝、器高4.8㎝を測る。色調は淡淡灰青色を呈し、焼成はややあまい。口縁部は長く、端部は丸くおさまっている。

土師器壺（３）口縁部～頸部が残存する。口径8.5㎝、頸部径5.2㎝、残存高4.7㎝を測る。口縁部は墓ほどで肥厚する。口縁部外面は縦ハケの後回転ナデを施す。口縁部内面は横ハケが施されている。色調は赤黄色を呈す。

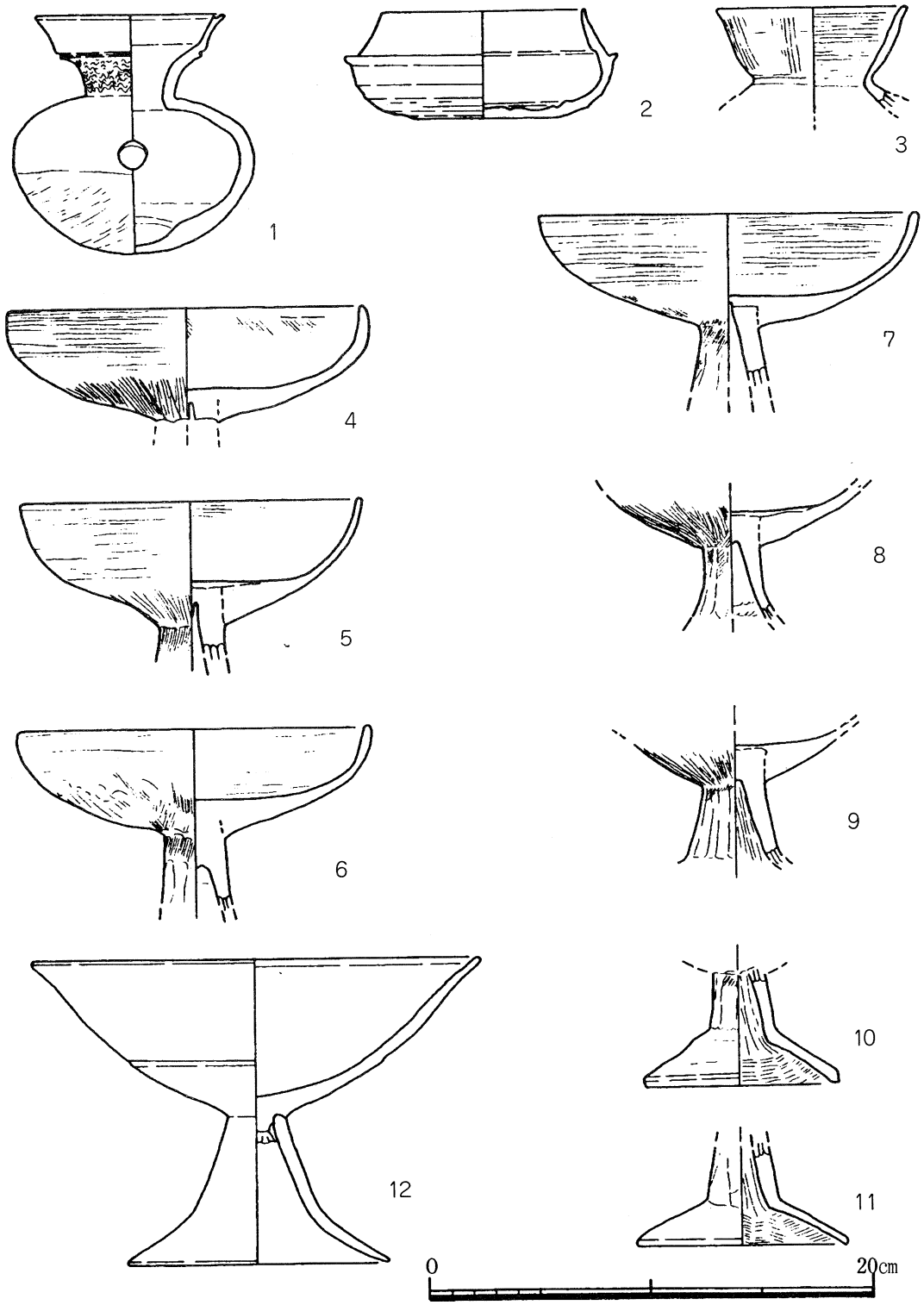
土師器高杯（４～１１）口縁部が内湾するもの（４～１１）８点と外反するもの（１２）１点の大きく２種類に分けることができる。口縁部が内湾するものは口径が16㎝～17㎝、杯部高5㎝、脚部高2㎝程度、裾部径9㎝を測る。口縁部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面～脚柱部上端にはたて方向のハケ調整を施す。脚柱部～裾部外面には縦方向のヘラ磨きが施される。脚柱部と裾部の変換点は明瞭な稜線ができている。脚柱部内面には絞り目ができており、裾部内面にはヨコ方向のハケメ調整が施される。裾部端は外側に面をもつ。底部の脚柱部との接する部分には1㎝の深さの穴



第243図　ＡＩ区西土器溜位置図



第244図　ＡＩ区西土器溜遺物出土状態実測図



第245図　ＡⅠ区西土器溜遺物出土状態実測図

を穿がっている。脚柱部上端の横に継ぎ足すような形で杯部が作られている。色調は赤黄色を呈す。（8）には黒斑がみられる。口縁部が外反するものは、口径20 5cm、裾部径12cm、器高13 5cmを測る。杯部外面には段がつき、裾部端は丸くおさめる。杯底部と脚柱部の接合は杯部と脚柱部を別々に作ったあと接合している様子である。これらの土器は大谷編年の山陰１期属することから、古墳時代中期の溝を伴う何らかの施設があったものと考えられる。

西地区表採遺物

近世墓が密集する平坦面では多量の表採遺物を検出した。（第２４６図）

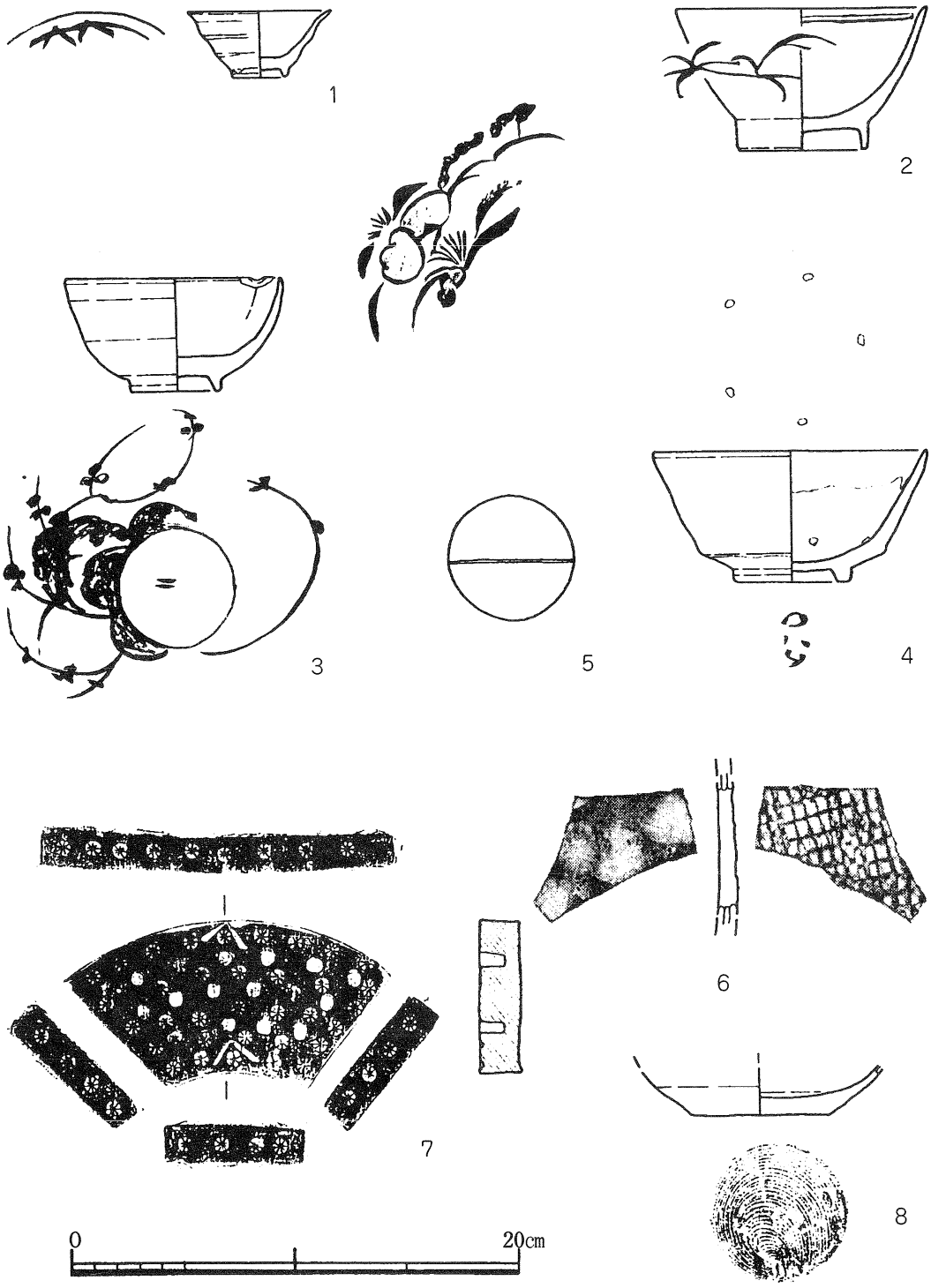
磁器湯飲み（１）染め付け磁器。平坦面の東よりで採取された。口径6.5 cm、底部径2.5 cm、器高3.0 cmを測る。胴部は直線的に開き、口縁部は外反する。焼成は良好であり、色調は淡灰白色の施釉が施されている。外面はロクロ挽きの凹凸が明瞭に現れている。口縁部外面には文様が施されている。湯飲みもしくは杯として使用されたものと考えられる。

磁器飯碗（２）染め付け磁器。Ａ１西６２号墓付近で採取された。口径11.0 cm、高台5.8 cm、器高6.3 cmを測る。いわゆる、広東碗である。高台との接合部から口縁部にかけて、直線的に開く。焼成は不良であり釉薬が溶けきっておらず、所々白色を呈す。色調は青みがかった灰色である。口縁部内面に２条の線、底部内面に１条の線、外面に花をあしらったの文様が施されている。飯碗もしくは向付として使用されたものと考えられる。１９世紀第２四半期に地方窯で焼かれたものと考えられる。口縁部が故意に打ち欠かれた部分があり、埋葬に伴って使用されたものであろう。

磁器飯碗（３）染め付け磁器。Ａ１西４１号墓付近で採取された。口径9.7 cm、高台4.0 cm、器高4.9 cmを測る。胴部は内湾している。内外面は淡い灰色である。文様は淡い墨色を呈し、底部外面から高台にかけて２条の線、胴部外面に梅をあしらったと推定される文様が施されている。飯碗もしくは向付として使用されたものと考えられる。１８世紀前半に肥前付近で焼かれたものと考えられる。口縁部が故意に打ち欠かれた部分があることから、埋葬に伴って使用されたものであろう。Ａ１西４１号墓出土のものと器形・文様ともに酷似する。

磁器飯碗（４）施釉陶器。Ａ１西４１号墓付近で採取された。口径12.2cm、高台5.2 cm、器高5.8 cmを測る。胴部は直線的で、底部との境には稜がつく。色調は黄みの灰色である。外面から内面上部にかけて、青磁色の釉薬が掛かっている。内面には５カ所のトチンが痕跡が認められる。底部外面には墨書らしき痕跡が観察できる。飯碗として使用されたものと考えられる。１９世紀後半に地元で焼かれたものと考えられる。口縁部が故意に打ち欠かれた部分があることから、埋葬に伴って使用されたものであろう。トチン痕跡が磨滅した様子がないことから、未使用であった可能性あり。

銅板（５）平坦面の東側で出土した。直径5.5cmの円盤である。厚さ１mm表面は緑青に覆われている。用途は不明である。



第246図　ＡＩ区西表採遺物実測図

甕形土器（６）胴部片である。内面の当て具は擦り消されている。外面には粗い格子目が残っている。近世の焼き締め陶で、いわゆる亀山焼などと称されるものであるが、産地は不明である。

扇形土製品（７）外縁が１６cm、内縁が6.3cm、幅6.6cm、厚さ1.8cmを測る。表面には、径0.5cm、深さ1.1cmの穴が１７カ所３列に並んで開いている。そして、その間を埋めるように、米印３１カ所と花印３カ所のスタンプが押されている。また、扇の中央には傘印スタンプが上下２カ所押されている。側面には、２１カ所に米印スタンプが押されている。裏面には全く装飾が施されていない。全体的に淡い黄色を呈し、全体に入念な横方向のヘラ磨きをほどこして、器面が滑らかである。細かい雲母のような粉末が付着しており、光沢をもっている。用途は不明である。

土師質土器（８）底部片である。底径6.3 cm、残存高2.2 cmを測る。底部は７mmとかなり厚く、裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡赤色である。

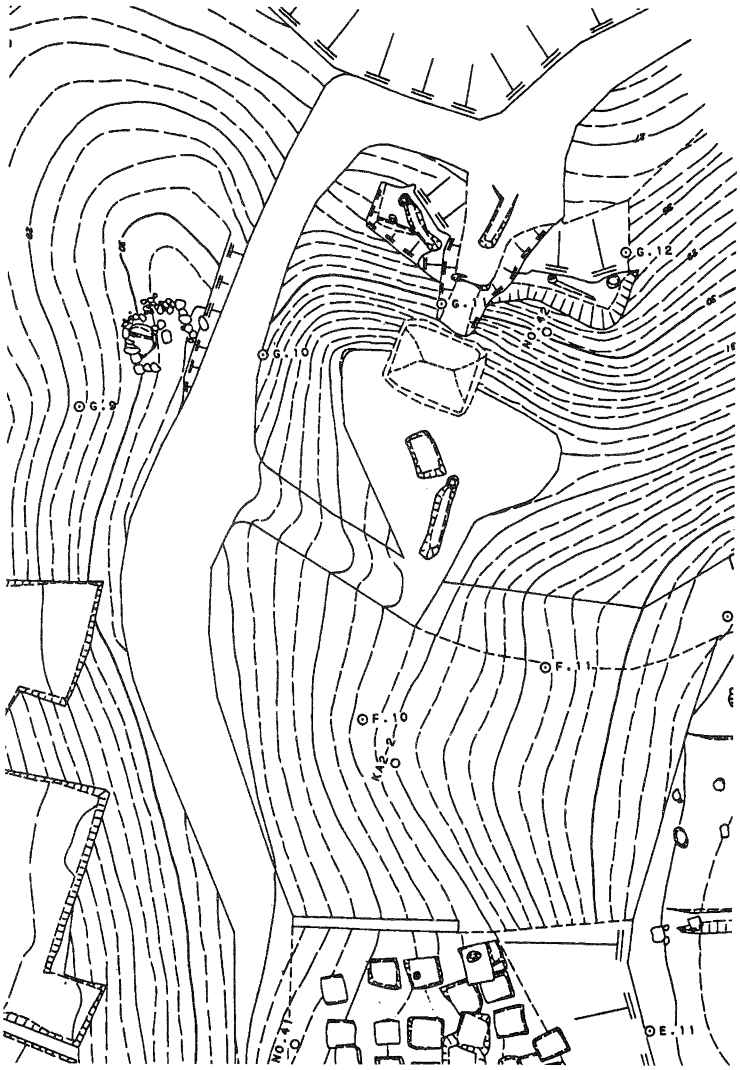
Ａ西81号墓・Ａ西82号墓

Ａ区中から北西にのびる小さな尾根上に２カ所の平坦面がある。（第２４７図）上のものがＡ西81号墓であり、下の平坦面がＡ西82号墓である。

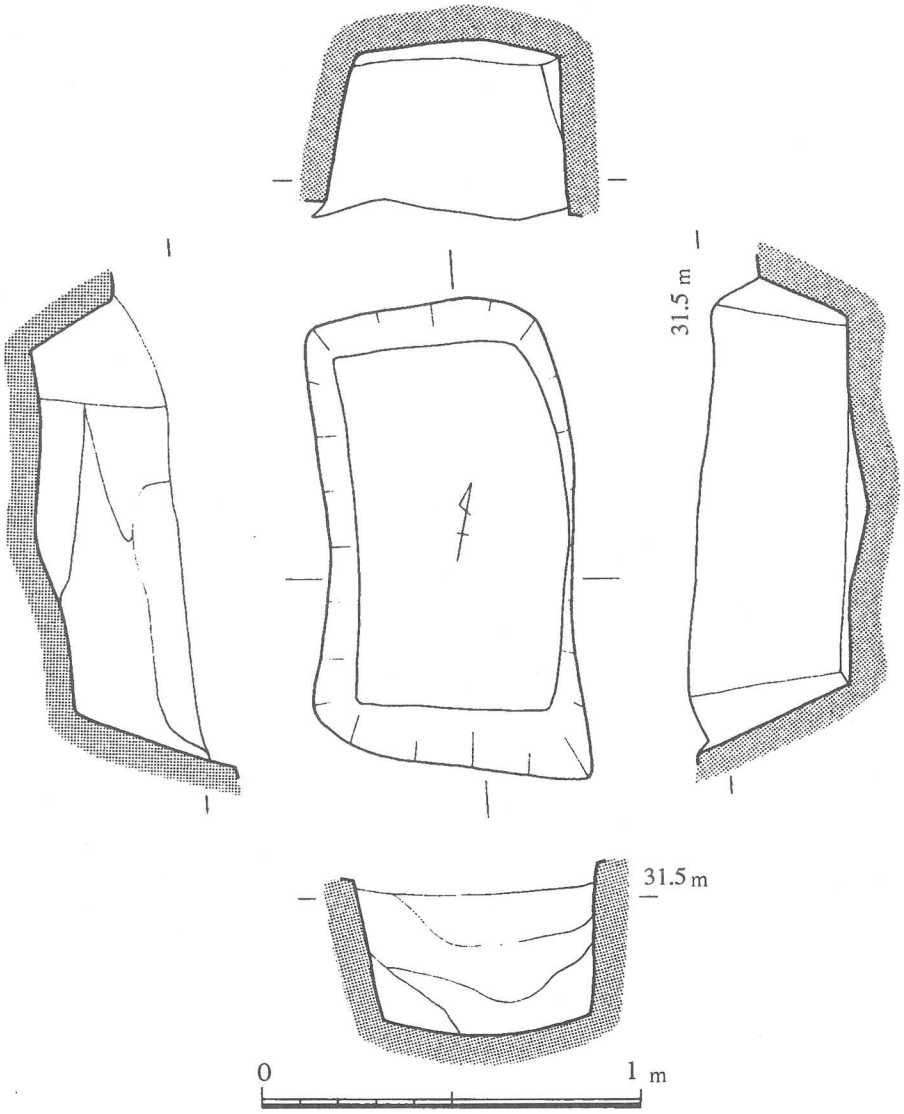
Ａ西81号墓（第２４８図）北横穴玄室の真上にあたる。６ｍ×４ｍの平坦面に長方形の土壙と溝状遺構が掘り込まれている。土壙の規模は、長さ120 cm、幅65cm、深さ50cmであり、素堀りである。

土壙内からは銭貨１が出土している。溝状遺構は長さ200 cm、幅40cm、深さ25cmである。土壙に伴うものと考えられる。付近には五輪塔が散乱していた。

銭貨は銅銭で、開元通寶である。開元通寶（初鋳845年）は渡



第247図　Ａ　区西81・82号墓位置図



第248図　ＡＩ区西81号墓実測図

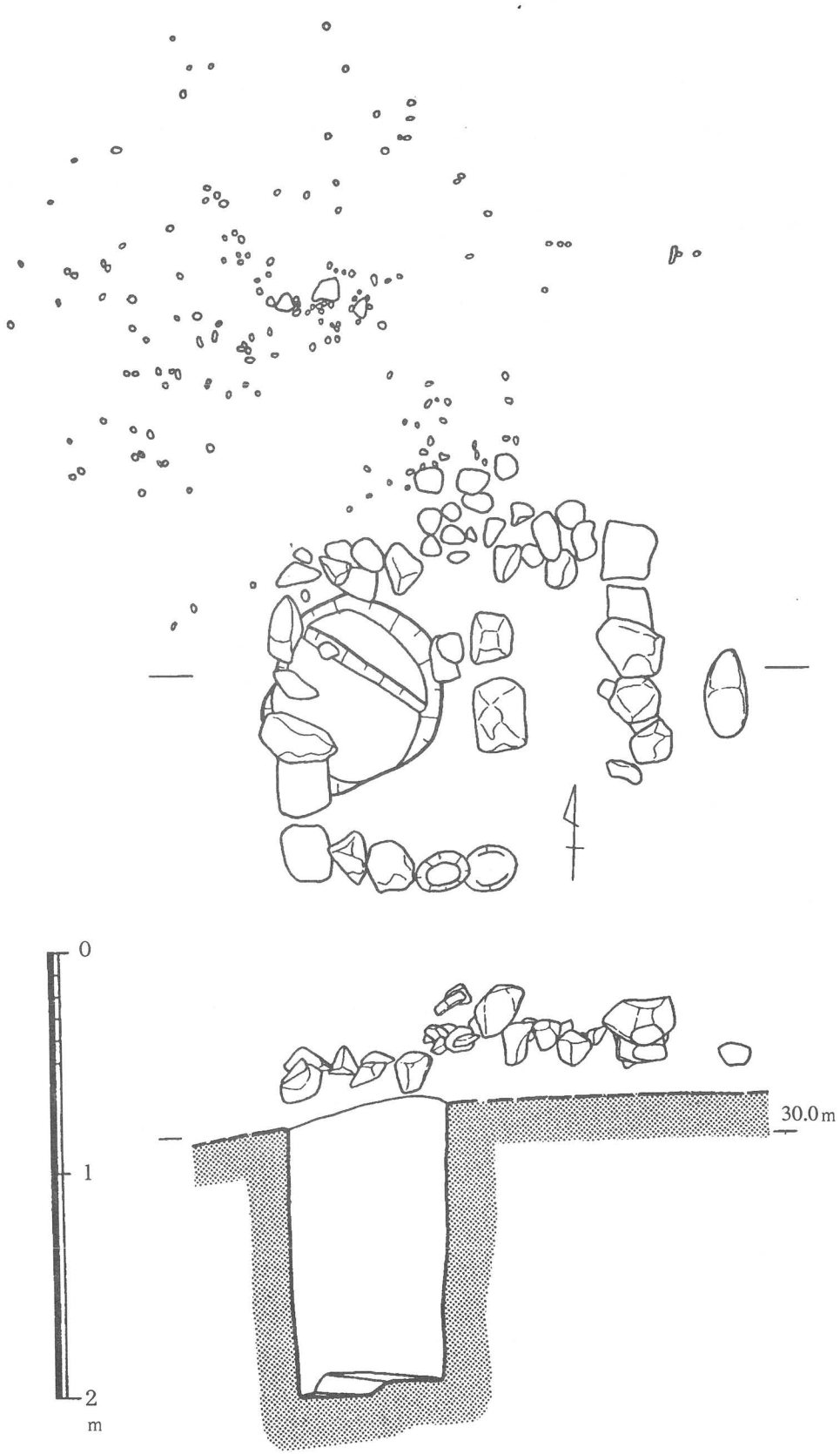
来銭である。

土壙の形状と出土遺物から中世に属するものと考えられる。

Ａ西82号墓（第２４９図） 北横穴の西側に所在する。５ｍ×４ｍの平坦面から方形に配置された列石と円形土壙が検出された。平坦面一体には指頭大の円礫が散乱していた。

方形の配列は東西南北にほぼ方位があっている。東西１６０㎝、南北１４０㎝の方形で、列は１列で巡っている。東辺と南辺は18㎝～22㎝大の方形の厚手の平石を使っている。西辺は２８㎝大の比較的大きい不整形な石を用いている。北辺は大きくても１５㎝大の小さい不整形な石を用いている。円形土壙が主体部であり、その墓域の区画のために配石がなされていたものと推定される。

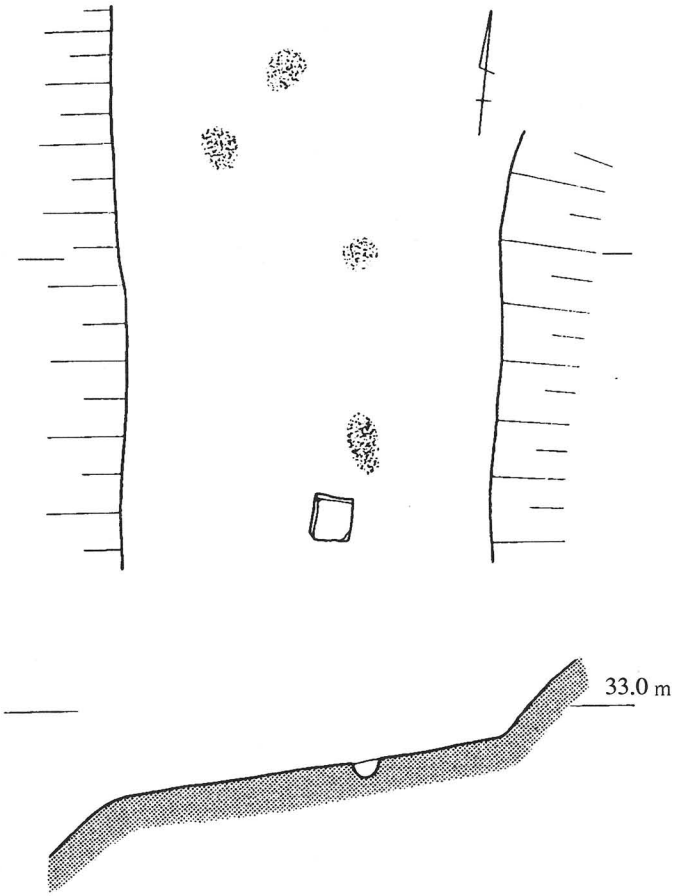
円形土壙は方形の区画の下に位置するが、西側に寄っている。地山を掘り込んでおり、径77㎝、深さ130㎝を測る。底面は半分が８㎝程高くなっている。土壙内から遺物は検出できなかった。



第249図　ＡⅠ区西82号墓実測図

火葬墓（第２５０図） Ａ１区中央部ＳＢ01西下方向、Ａ区西近世墓群とＡ区西８１号墓に挟まれた斜面に沿って、幅２ｍの平坦面がある。標高は約32.5ｍである。この平坦面には火葬骨片が多量に散乱していた。特に集中する場所が4 箇所確認できた。径20㎝程度の不整形な円形～楕円形をしており、深さは検出面から7 ㎝程度である。それぞれは60㎝～１ｍの間隔をもっており、不規則に配置されている。

骨片は指先程の小片であり、詳細は不明である。南側には五輪塔の地輪があることと斜面の下に五輪塔の空風輪が崩落していることから、かつては五輪塔が建っていたと考えられる。



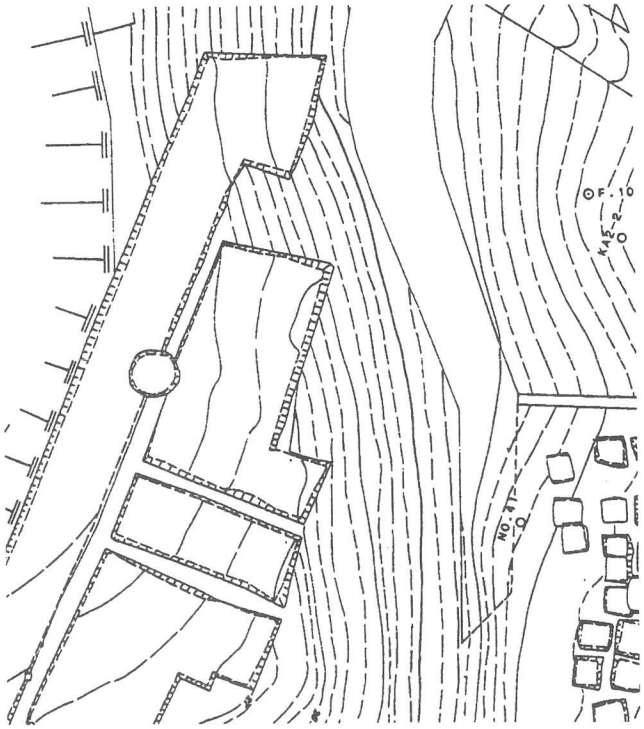
第250図　ＡⅠ区西火葬墓分布図

A西裾で検出した遺構

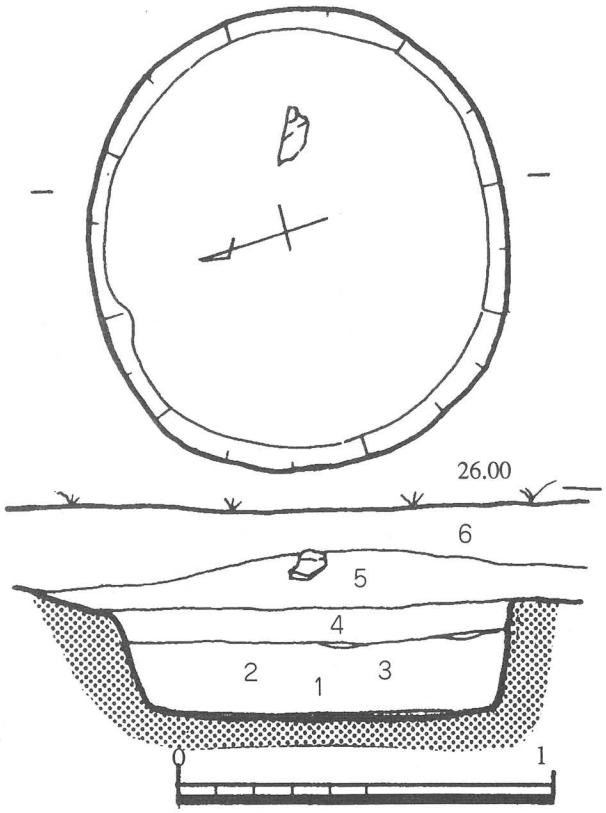
丘陵の裾には、性格を明確にするはできなかったが、平坦な面が形成れていた。この平坦な床面からは、丘陵の上から流れ落ちたと考えられ五輪塔片が床面から出土している。その後、丘陵上での近世墓の造成や造成後の近世墓の流失で、この平坦面は完全に埋まってしまったものと考えられる。明確な遺構は、この平坦面の北川に円形の土坑が検出された。

平坦面は、東西方向へ奥行き４ｍ、南北方向８ｍの平坦面である。この平坦面からは、白色の石材が検出されている。調査の結果、来待産の凝灰岩別名白粉石と判断された。

円形土坑は、表土下２０㎝から検出された。東西径１２０㎝、南北径１１０㎝のやや楕円形を呈し、深さ３０㎝を測る。土坑内部の土層は、４つの層からなっており、流れ込んだ土と考えられる。土坑を被覆した土層からは、炭化物が出土しているがこの土坑に伴う遺物は認められなかった。



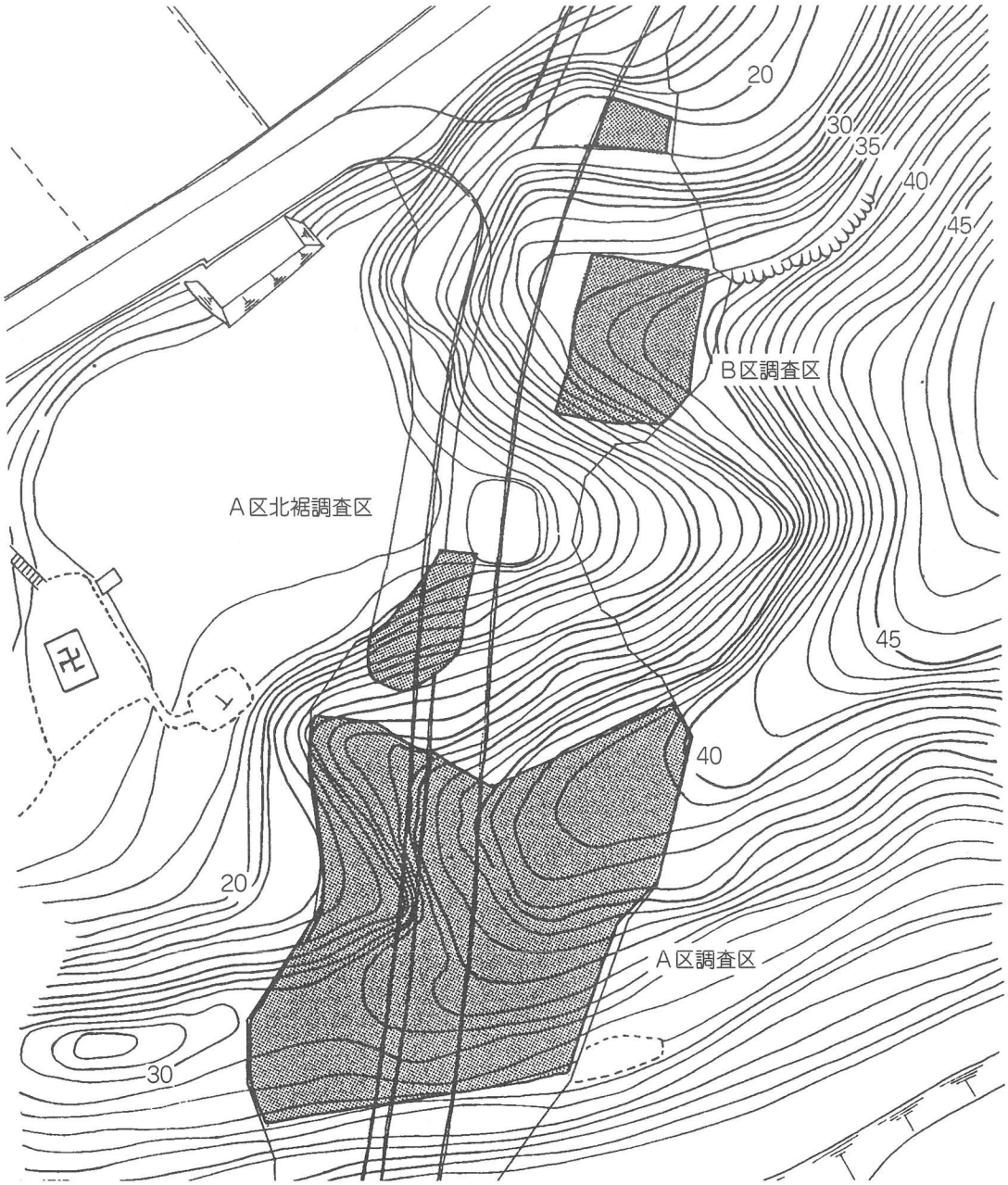
第251図　Ａ区西裾検出遺構分布図



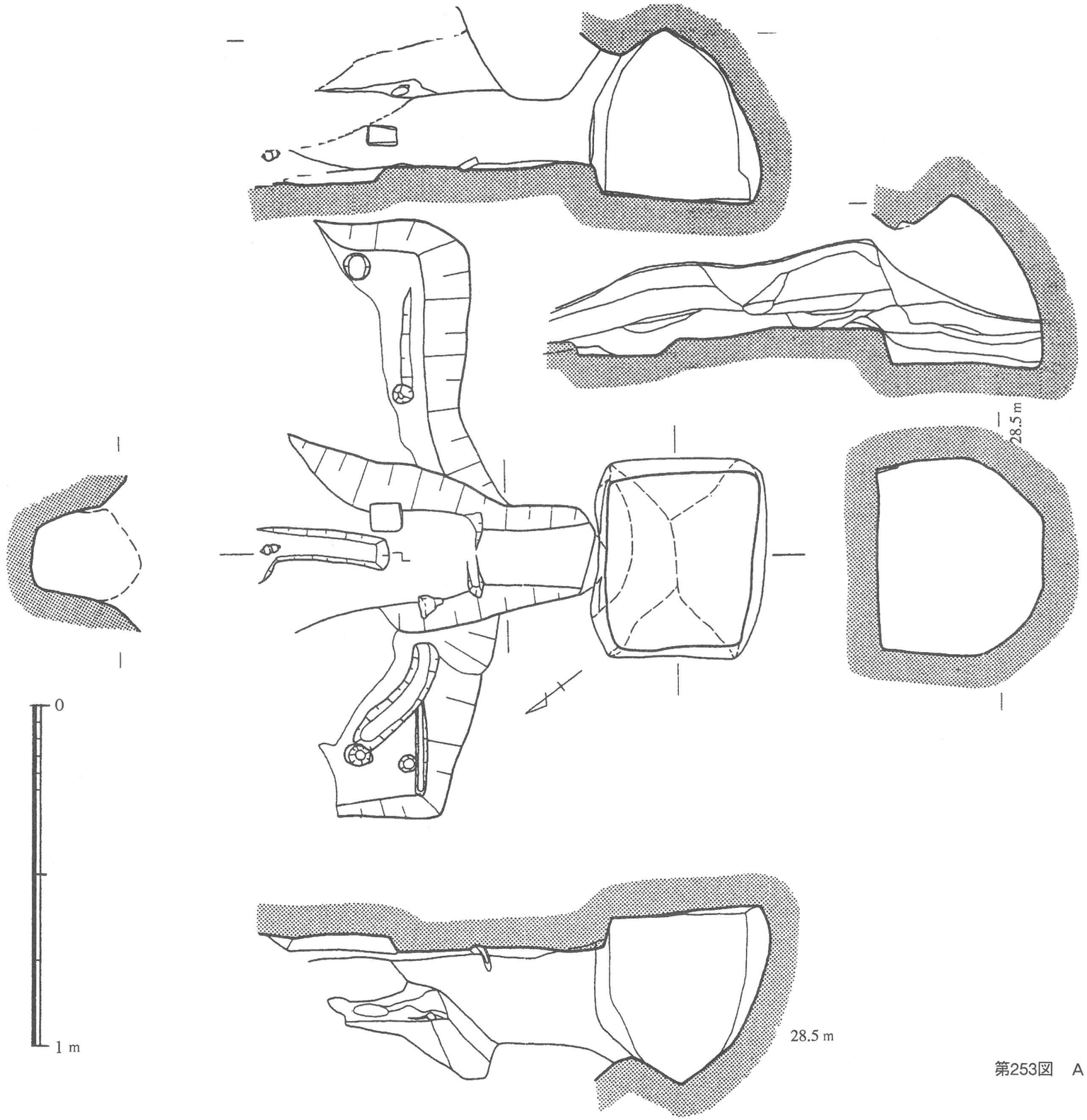
第252図　Ａ区西裾１号土坑実測

A区北裾調査区（第254図）

この調査区は、僅かに道路予定にかかる部分を調査したもので、全体の性格を明確にはしえなかった。この部分は、丘陵の斜面を削り、平坦面をつくったもので、柱跡と考えられる土坑、それに伴うと考えられる溝状遺構が検出された。但し、ここで検出したものは、柱穴の大きさからいっても、大規模な建物でないと判断された。また、この建物と隣接して池も所在した。この池は、道路用地に買収されるまで、清水大日堂の西側の安部氏の所有であった。この池の造成時期等

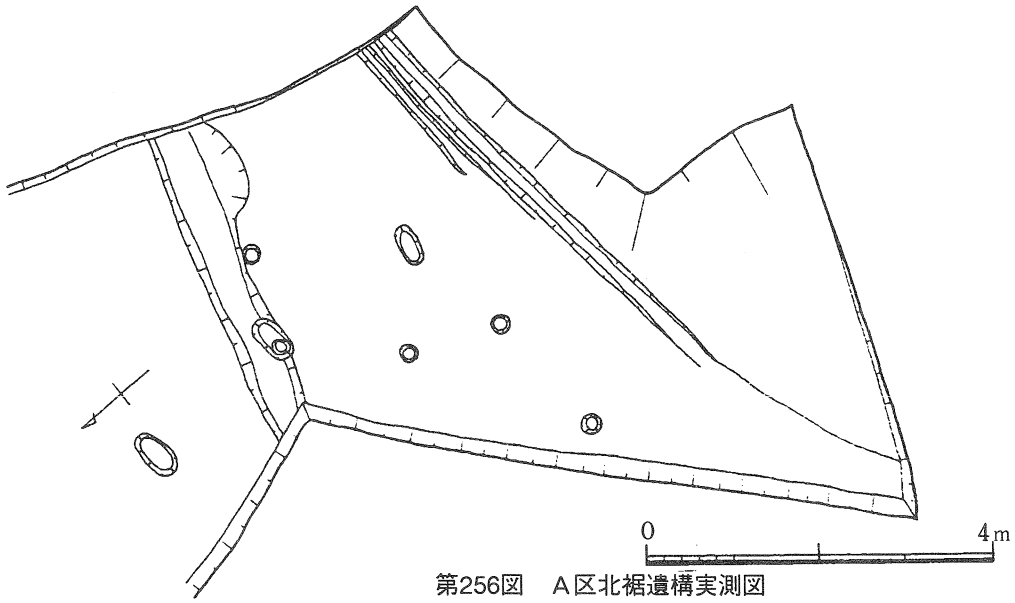


第254図　A区北裾調査区位置図



第253図　A　区　北　横　穴　実　測　図

第255図　A区北斜面検出遺構分布図



第256図　A区北裾遺構実測図

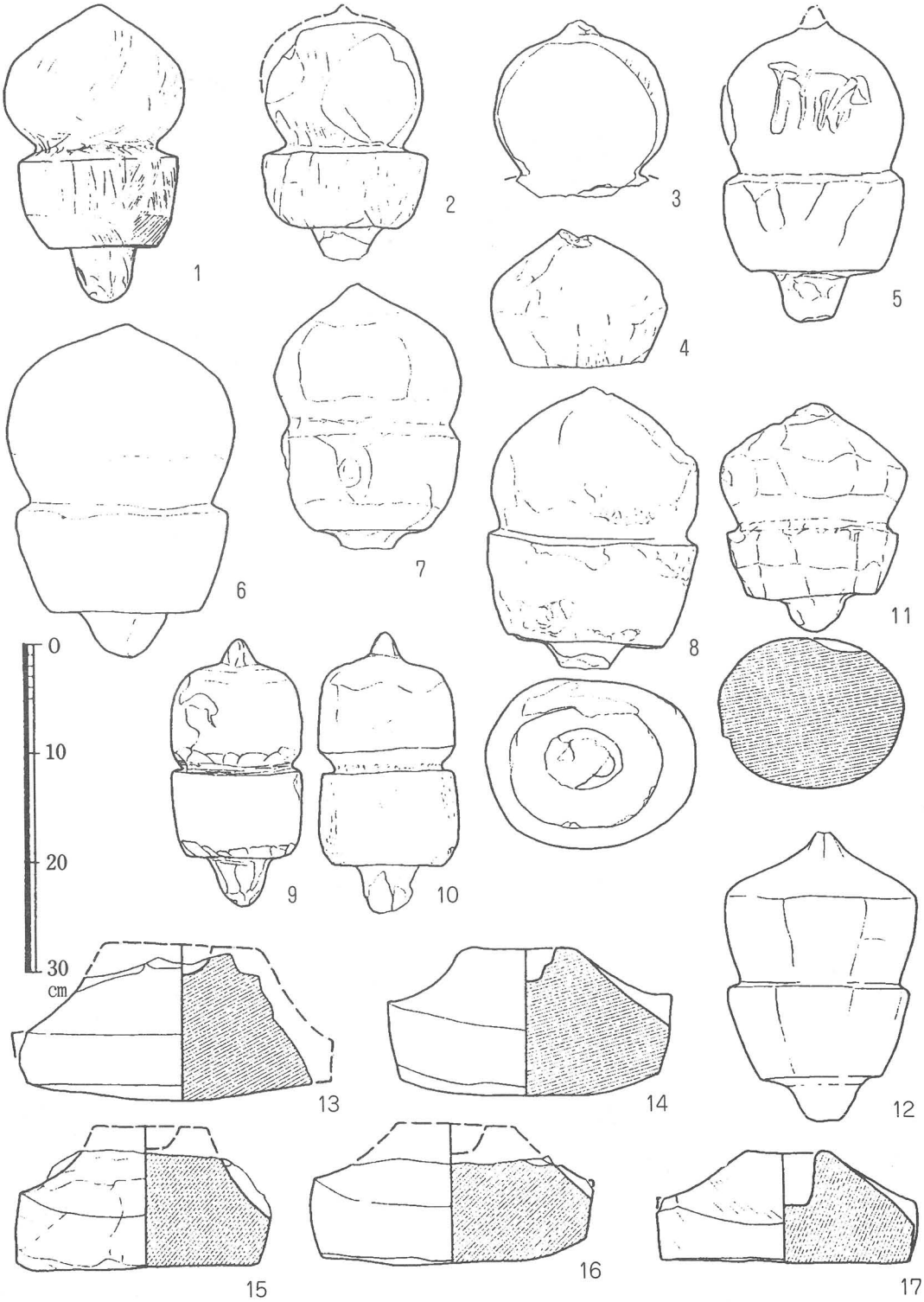
については未詳である。以上の調査等によって知ることができたことや荒神さんや清水大日堂の建物が所在する部分は、一辺１００ｍの四角形を呈する平坦面である。丘陵を削り出して大規模な造成を行った中心施設があるものと考えられ注目される。

掘立柱建物は、梁間２間の３ｍ、桁行２間の４ｍが検出されている。検出された柱穴の柱間は、一律で梁間の柱間１．５ｍ、桁行の柱間２ｍである。柱穴の深さは、２０㎝である。柱穴が検出された地山面には、青灰色の土層に覆われていた。

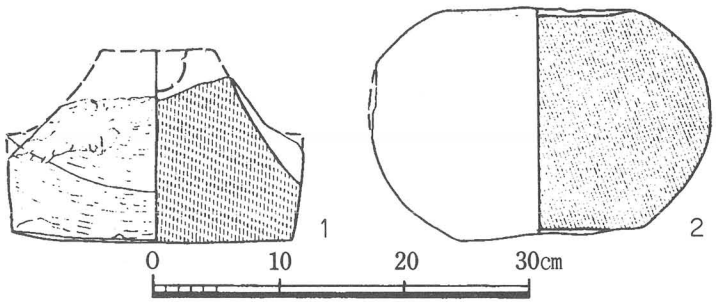
出土遺物は、上記の青灰色の土層中から（第259図）１青磁碗の見込みや２備前瓶の口縁片が出土している。

A区北側谷（第260図）で認められた石製五輪塔である。しかし、ここから検出されたものは、丘陵から落ちた二次的なものであり、五輪塔のセット関係を組むには至らなかった。石材は何れも凝灰岩である。このことはA区北側斜面も同様である。以下特徴を抽出して記すこととにする。

（第260図１）比較的小型の空風輪で、風輪の上部を欠損している。空輪の径１３㎝を測る。横断面は正円形を示し、空風輪の境となる溝の加工は入念で、風輪の形態が球形に近いものと考えられる。（２）は出土したものでは大型の空風輪で、風輪下端から空輪頂部まで２６㎝、空輪径１７．５㎝、風輪径１６㎝を測る。空風輪の境となる溝の加工は比較的入念で、風輪の形態が球形に近いものである。（３）は出土したものでは大型の空風輪で、風輪下端から空輪頂部まで２５㎝、空輪径１９㎝、風輪径１９．４㎝を測る。（４）は出土したものでは中型の空風輪で、風輪下端から空輪頂部まで２１㎝、空輪径１５．６㎝、風輪径１６．５㎝を測る。この（３・４）二つの風空輪は、断面V字形の溝を荒く入れ、空風輪の境としいる。溝の加工や全体の面取りが不徹底で、滑らかな曲線を成すに至っていない。横断面は楕円を呈す。（５）は水輪で、水輪の径２９．５㎝、高さ２０㎝を測る。この水輪は、上下面取り加工を最小限に止めたもので、火輪・地輪に接する部分に僅かに内　が施されている。（６）は火輪である。火輪の軒幅２２．５㎝、高さ１３㎝を測る。四隅の反りは顕著ではなく、軒下端から四隅端部までの反りは１㎝を測る。空輪を差し込む穴があり、深さ５㎝、径４．８㎝を測る。表面には加工痕跡を留めるものである。



第257図　A区北斜面出土遺物実測図（1）

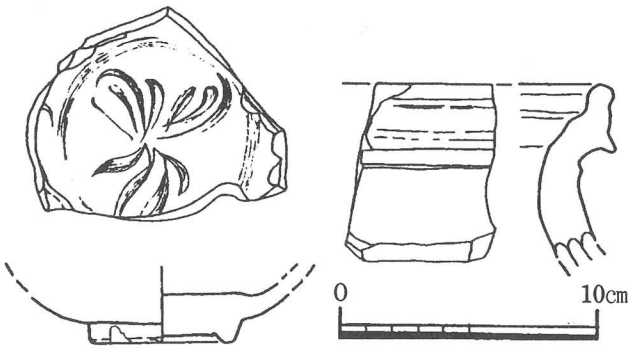


第258図　A区北斜面出土遺物実測図（２）

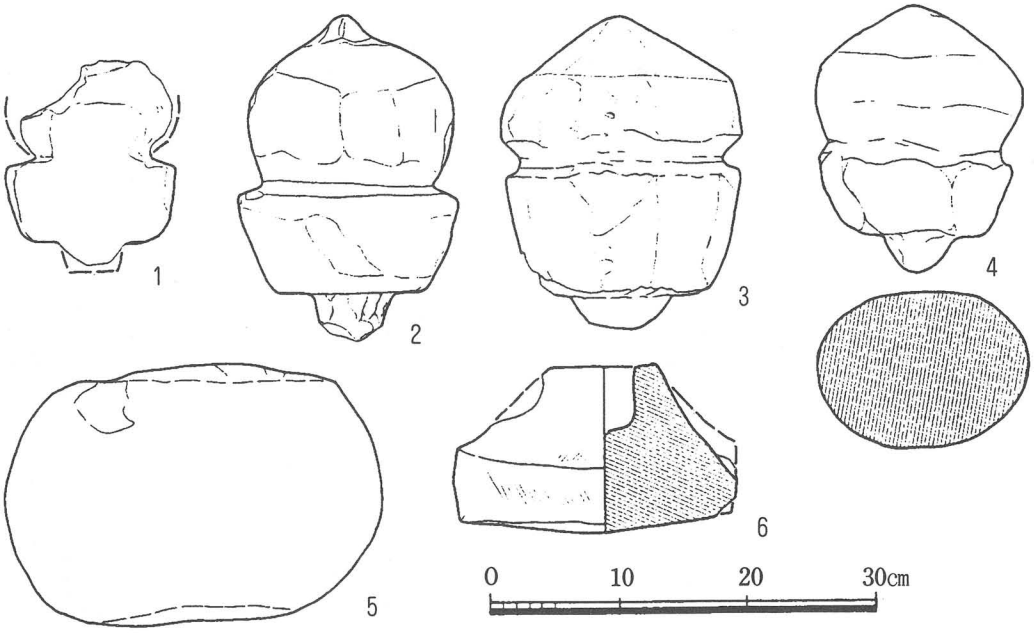
A区北側斜面（第２５７図）から出土した石製五輪塔である。

（第２５７図１・２・３・４・５・６）は空風輪の境となる溝の加工は入念で、風輪は球形に近く、横断面は円形を呈する。（１）は下端から頂部まで２７㎝、空輪径１６．５㎝、風輪径１４．５㎝を測る。（２）は空輪径１５．５㎝を測る。（３）は空輪径１５㎝を測る。（４）は空輪径１５．５㎝を測る。（５）は下端から頂部まで２８㎝、空風輪ともに径１６．５㎝を測る。（６）は大型の空風輪で、下端から頂部まで３０．５㎝、空輪径１９．５㎝、風輪径２０．５㎝を測る。（７・８）は空風輪の境に断面V字形の浅い溝を巡らす。横断面は円形を示し、風輪上部が滑らかな曲線を成すに至っていない。（７）は下端から頂部まで２４．５㎝、空風輪径ともに２０．５㎝を測る。（８）は下端から頂部まで２５．５㎝、空風輪径ともに２３．５㎝を測る。（９・１０）は、断面に深い溝を巡らし空風輪の境とし、風輪突起が鋭角的に突出するもので、滑らかな曲線を成すに至っていない小型のものである。（９）は下端から頂部まで２４．５㎝、空風輪径とも１２㎝を測る。（１０）は下端から頂部まで２６㎝、空風輪径とも１２㎝を測る。断面U字形の深い溝に円形の工具の痕跡が巡る。（１１・１２）の横断面は円形を示し、空輪の最大径は中央よりやや上に位置し、断面は多面形を呈する空風輪である。（１１）は下端から頂部まで２７㎝、空輪径１５．５㎝、風輪径１７．５㎝を測る。空風輪の境は断面V字形の深い溝を巡らす。（１２）は下端から頂部まで２６㎝、空輪径１６㎝、風輪径１７．５㎝を測る。横断面は正円形を示し、丁寧に仕上げられている。（１３・１４・１５・１６・第２５７図１）は軒部の反りある火輪である。（１３)は軒幅２９㎝を測る。

頂上部を欠損している。(１４)は軒幅２５㎝、高さ１３．５㎝を測る。(１５)は軒幅２３㎝を測る。(１６)は軒幅２６㎝を測る。(第２５８図１）は軒幅２２．５㎝を測る。表面には加工痕跡を留めるものである。(第２５７図１７)は軒部の下端が水平な火輪である。軒幅２４㎝、高さ１０㎝を測る。下端の火輪に接する部分は僅かに内刳が施されている。表面には加工痕跡を留めるものである。(第２５８図２）は水輪で、水輪の径２７㎝、高さ１７．５㎝を測る。この水輪は、火輪・地輪に接する部分に僅かに内刳が施されている。



第259図　Ａ区北裾出土遺物実測図（１）

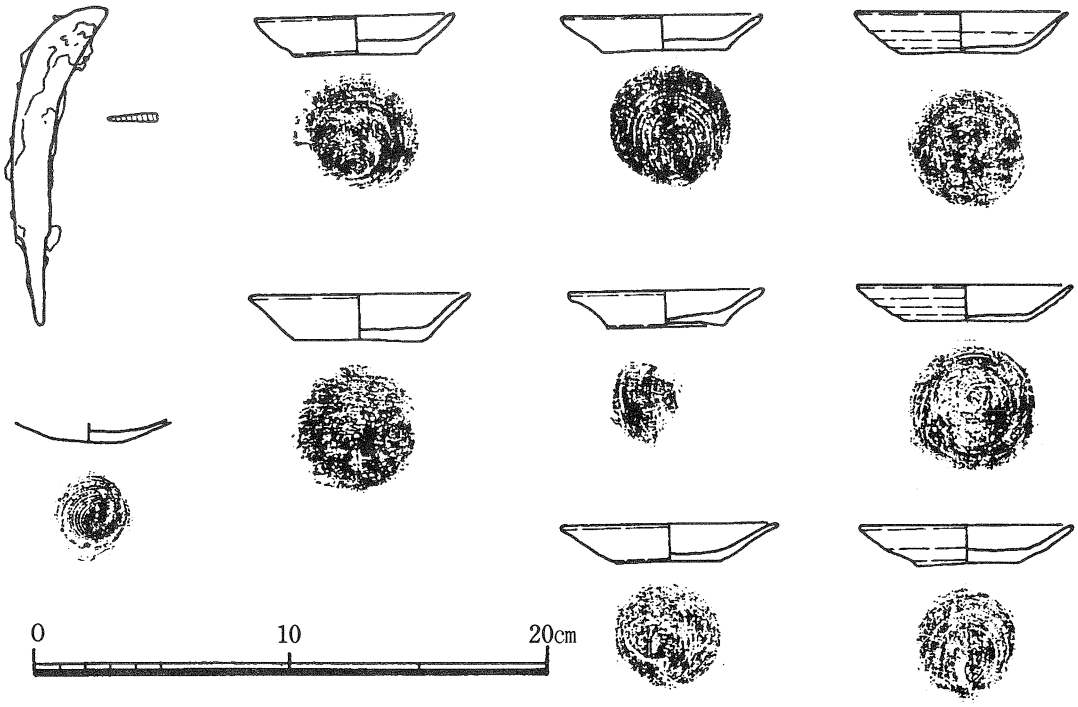


第260図　Ａ区北裾出土遺物実測図（２）

かさもりさん

調査区丘陵の北側斜面中腹部分下に、かわらけが多数表採できるところがあり、調査が始まってそこが「かさもりさん」と呼ばれて、昭和３０年代位まで祀られていたと古老は言う。調査時まであった神木の回りにかわらけに団子をのせてお供えしたと言う。この木は、２代目であったと言う。また、この木の東側には半月状の平坦面が検出された。この平坦面は、斜面を削りだしてつくられており、祠が設置されていた可能性があり、調査を実施した。結果、この平坦面は、斜面部分が１０ｍ、奥行き２．６ｍであり、楕円形の浅い土坑が３つ検出されたものの、この平坦面にどのようなものが所在していたのかを明確にすることはできなかった。ここからは、前述したように、主に祀られていた神木を中心に、かわらけ、寛永通宝、小形薙刀状鉄器などが出土している。

この「かさもりさん」であるが、病気、疫病の平癒のために、子供が中心となり祀っていたとのことである。また、かわらけに団子をのせて供えることが行われていた。以上のことから「かさもりさん」の由来を考えると、東京都台東区の感応寺の西に鎮座する笠森稲荷が考えられる。この稲荷は、瘡稲荷として皮膚病に効験があるとされており、団子を供える習慣がある。どのような経緯でこの他に持ち込まれたかは未詳であるが、宇賀荘町のかさもりさんは、江戸時代に江戸の笠森稲荷からの伝えられたものと考えたい。



第261図　かさもりさん出土遺物実測図

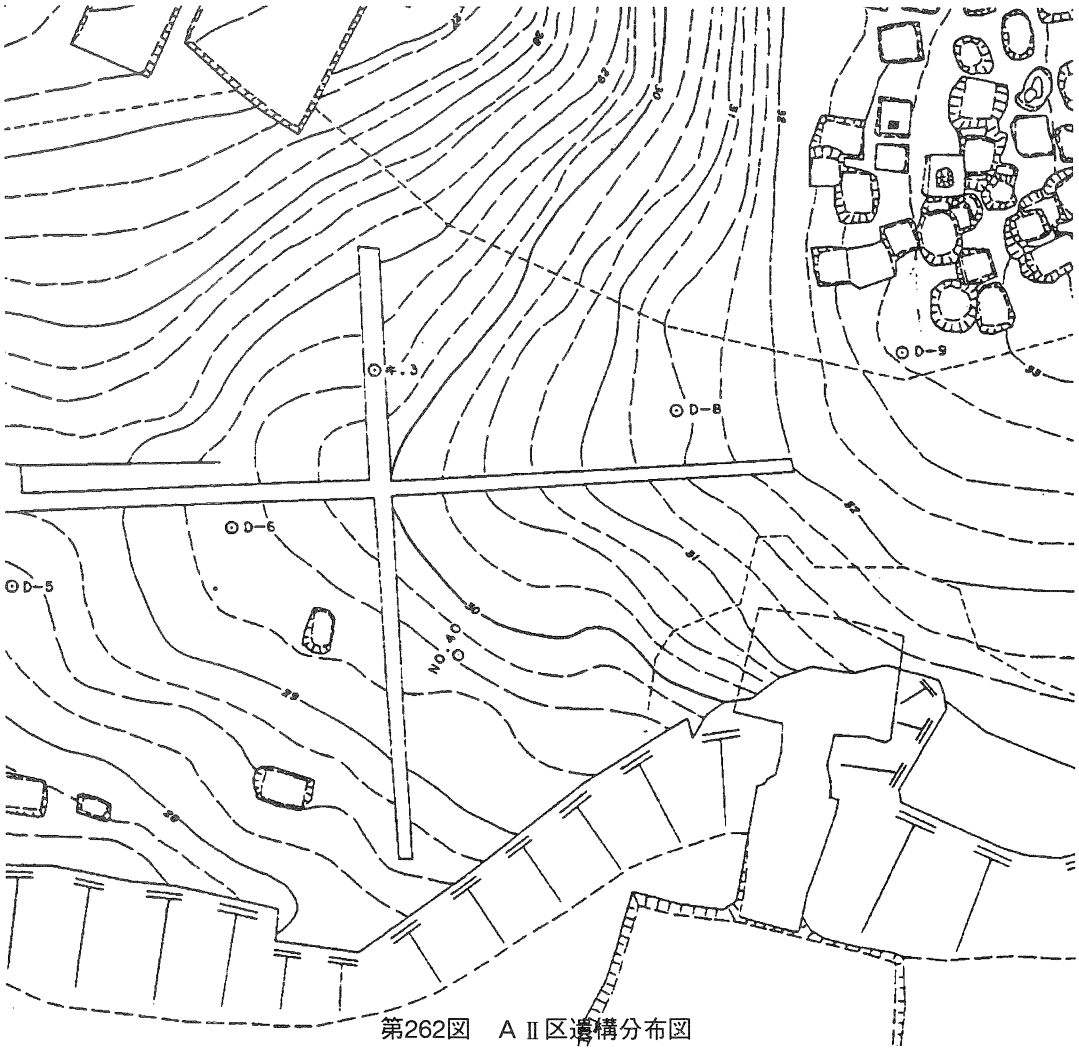
第２節　ＡⅡ区の調査

（１）尾根上で検出した遺構と遺物

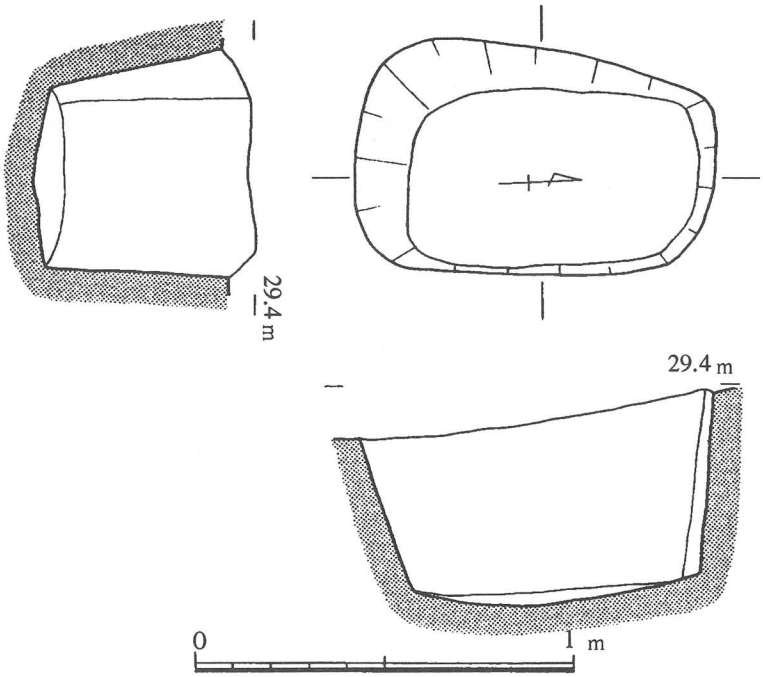
ＡⅡ区の立地は東西にのびる尾根の按部に位置する。同一の尾根上に連なるＡＩ区（東方向にあたる）、と調査区外の古墳（西方向）の間にあたる。両地区より高さが低くなる部分であり、標高は約３０ｍである。

尾根に沿ってベルトを残し、掘り下げたところ、尾根の頂部より南側の緩斜面でで４基の土壙墓を検出した。尾根にたいして平行、または直行する。以下その概要を記す。

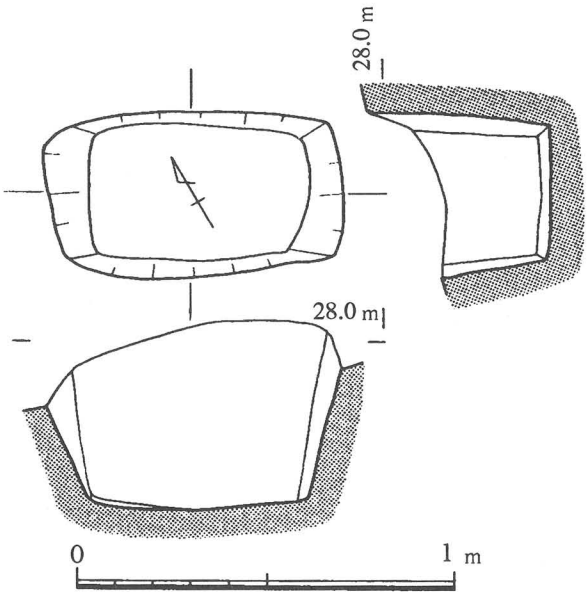
１号墓（第２６３図）　素掘りの土壙墓である。４基の中でもっとも北東側に位置する。平面形は上縁部分で長さ０．９３ｍ×幅０．５５ｍの小型の隅丸長方形である。床面の形状も同様で長さ０．７５ｍ×幅０．４５ｍである。主軸は唯一尾根に直交する。深さは０．５ｍである。床面の標高は２８．８ｍである。遺物は出土していない。



第262図　ＡⅡ区遺構分布図



第263図　A Ⅱ区１号墓実測図



第264図　A Ⅱ区２号墓実測図

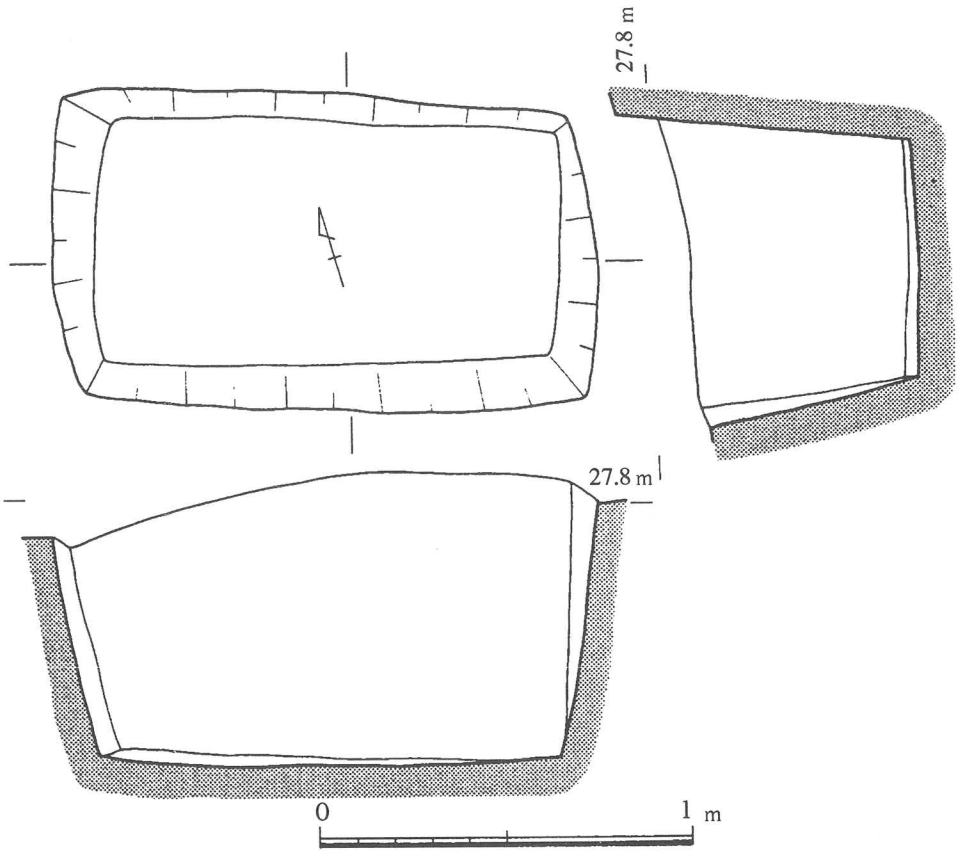
２号墓（第２６４図）　素掘りの土壙墓である。

土壙墓群の東端に位置する。平面形は上縁部分で長さ１．２ｍ×幅０.７５ｍの長方形である。床面の形状も同様で長さ０.９５ｍ×幅０.６５ｍである。主軸は尾根に平行する。深さは０．５ｍである。床面の標高は２８．１ｍである。

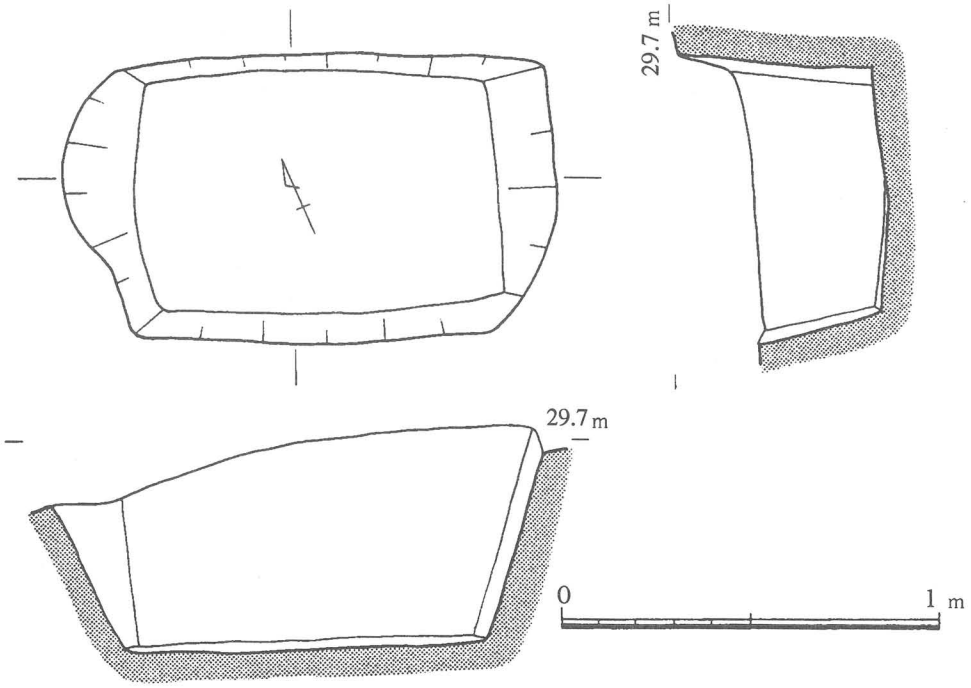
遺物は出土していない。

土層は床面直上に１㎝の厚みで赤茶褐色粘土が堆積し、その上は黄色ブロックを多量に含む茶褐色土が堆積する。

３号墓（第２６５図）　素掘りの土壙墓である。２号墓と４号墓の間に位置する。平面形は上縁部分で長さ0.７５ｍ×幅0.４３ｍの小型の長方形である。床面の形状も同様で長さ0.５６ｍ×幅0.３７ｍである。主軸は尾根に平行する。深さは０．５ｍである。床面の標高は２７．６ｍである。遺物は出土していない。



第265図　ＡⅡ区３号墓実測図



第266図　ＡⅡ区４号墓実測図

４号墓（第２６６図）　素掘りの土壙墓である。土壙群のもっとも西に位置する。平面形は上縁部分で長さ１.４５ｍ×幅０.８４ｍの長方形である。床面の形状も同様で長さ１.２２ｍ×幅０.６５ｍである。主軸は尾根に平行する。深さは０．７ｍである。床面の標高は２７．１ｍである。遺物は出土していない。

これら土壙の時期については　素掘りの土壙形態、人骨が消失していることなどはＡＩ東の中世土壙と類似する。よって築造時期も同じく中世ごろと推定される。

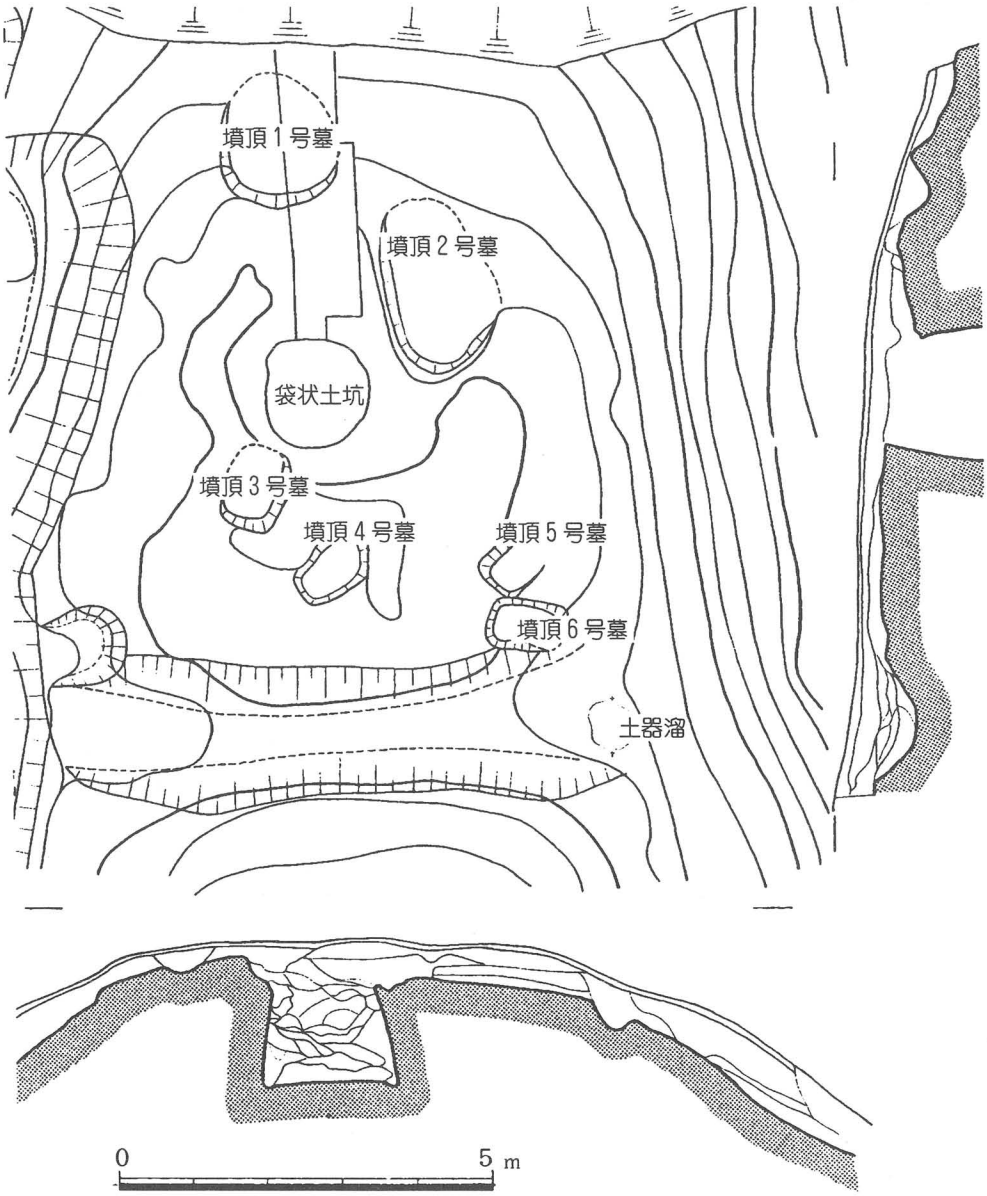
第３節　Ｂ区の調査

（１）丘陵頂部で検出した遺構と遺物

清水大日堂裏古墓群Ｂ区とした調査区は、前述したＡ区の北側にあって、今回の調査の原因となった新設県道布部安来線と現状の県道との取り付け部分の東側に位置している。このＢ区と前述したＡ区との間には東に若干入り込む小さな谷があるものの、実は一体のものである。つまりＡ区、Ｂ区ともにその東にあって、県道布部安来線と平行して走る標高50ｍを測る丘陵から派生する支脈である。Ｂ区の丘陵の頂は、標高約35ｍを測るが、ここでは古墳時代中期に属すと推定されるＢ1号墳を検出した。このＢ1号墳の墳上には、火葬墓と推定される墓壙が多数認められた。また後述するが、墳丘のの表土中には火葬骨の小片がいたるところでみられた。これは、あたかも火葬骨を散布したことを想定させるような状況であった。

南側斜面では五輪塔を伴う火葬墓の他、火葬墓と推定される墓壙が多数認められた。この他、遺体を火葬に付したとみられる河原石を伴う土坑などを検出した。Ｂ1号墳の北斜面、標高約23ｍ付

第267図　Ｂ区調査区位置図

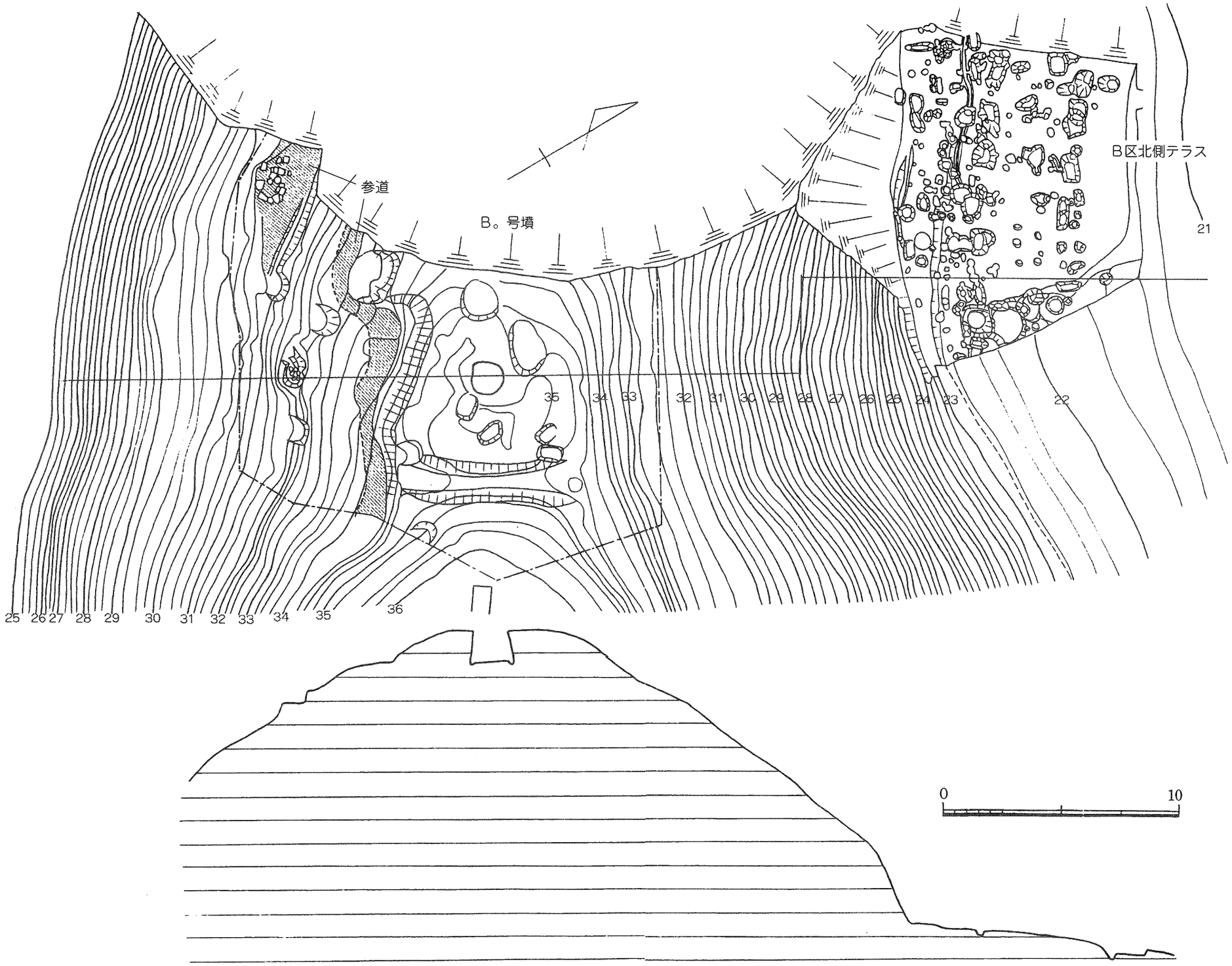


第268図　Ｂ区１号墳々丘実測図

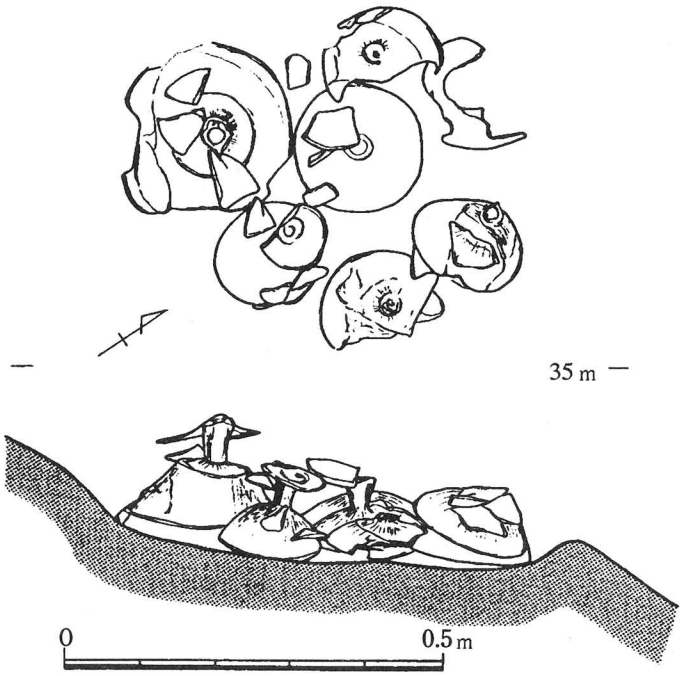
近には幅10ｍの平坦面が形成されており、この一部が工事の対象となったため調査を実施した。ここでは、中世末から近世に属すとみられる掘立柱建物、井戸、柵などを検出した。これらの遺構は、検出した遺構や遺物が埋葬に関わるものに限定されることから推すと、一般的な住居ではない可能性の大きいものであった。

以下、Ｂ区丘陵部で検出した遺構の概要を記すことにする。

Ｂ１号墳（第268図） Ｂ区丘陵頂部に位置する1号墳周辺は、調査に着手した時点では西側は工事のため既に大きく掘削されていた。本墳の墳丘の築造にあたっては、西方に向かって延びる支脈を



第269図　B　区　検　出　遺　構　分　布　図



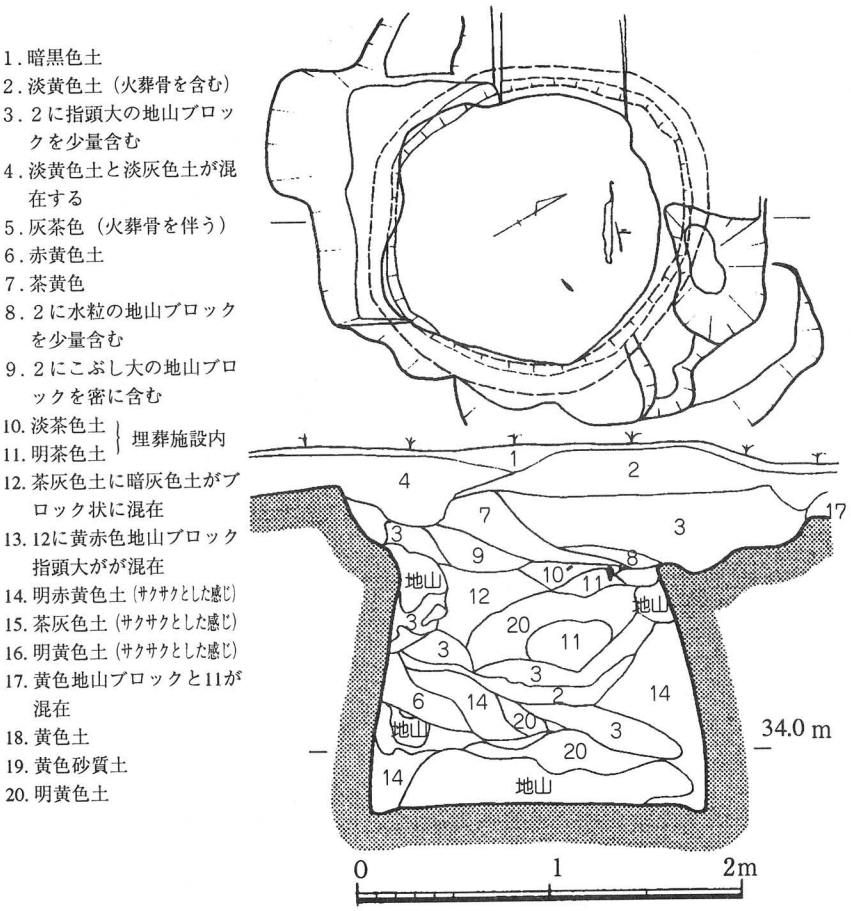
第270図　B区１号墳土器溜実測図

東方の高所側において、支脈と直交する溝を設けることによって、方形墓域を造りだす方法をとっている。この事からからすると本墳以外にも西方に同様な規模の墳丘が続いていたであろうと推定される。墳丘規模は南北長8ｍ東西残存長9.5ｍ、高さ2ｍを測り墳丘の主軸方位は、N－60°－Eであった。墳丘の東側の一端を画す溝は上幅1.8ｍ、下幅0.5ｍ、深さは表土下1ｍを測る。この北端で、土師器の高杯が７個まとまって認められた。これらは、いずれも杯部を伏せた状態で出土した。主体部は墳丘中央部で鉄器が集中して出土したことから、この部分と判断された。

ただしこの位置は、後に触れる袋状土坑と重複していたこととも関係して、その輪郭を明らかにしえなかった。

表土を除去する時点で、土中には墳丘全体を覆うように指頭大の火葬骨片がみられた。また墳丘上で大小6個の不整形な土壙を検出した。これらは火葬骨片の分布密度が高いことから、埋葬施設と推定された。

厚さ約20㎝を測る表土を除去すると、その下は明黄色の堅緻な地山となっていた。したがって、B1号墳の埋葬施設の調査については、この地山面を四方から中央に向かって追えば容易検出できるものと考えられた。しかし墳丘中央で直径1.5ｍにわたって暗茶色土の広がりが認められ、この円形を呈すプランが、埋葬施設とは考え難い状況であった。そこで先の円形プランの東端及び墳丘東西中軸線にに沿って、サブトレンチを設定し調査を進めることとした。このサブトレンチ内から鉄剣1、鉄鏃2、刀子1を検出した。これら鉄器はB1号墳の副葬品と考えられるものであるが、後述する袋状土坑と重複しており、埋葬施設の輪郭については、それを明らかにしえなかった。つまり、袋状土坑の口縁部は火葬骨片を含む土層に覆われており、後世の撹乱をかなり受けていること、袋



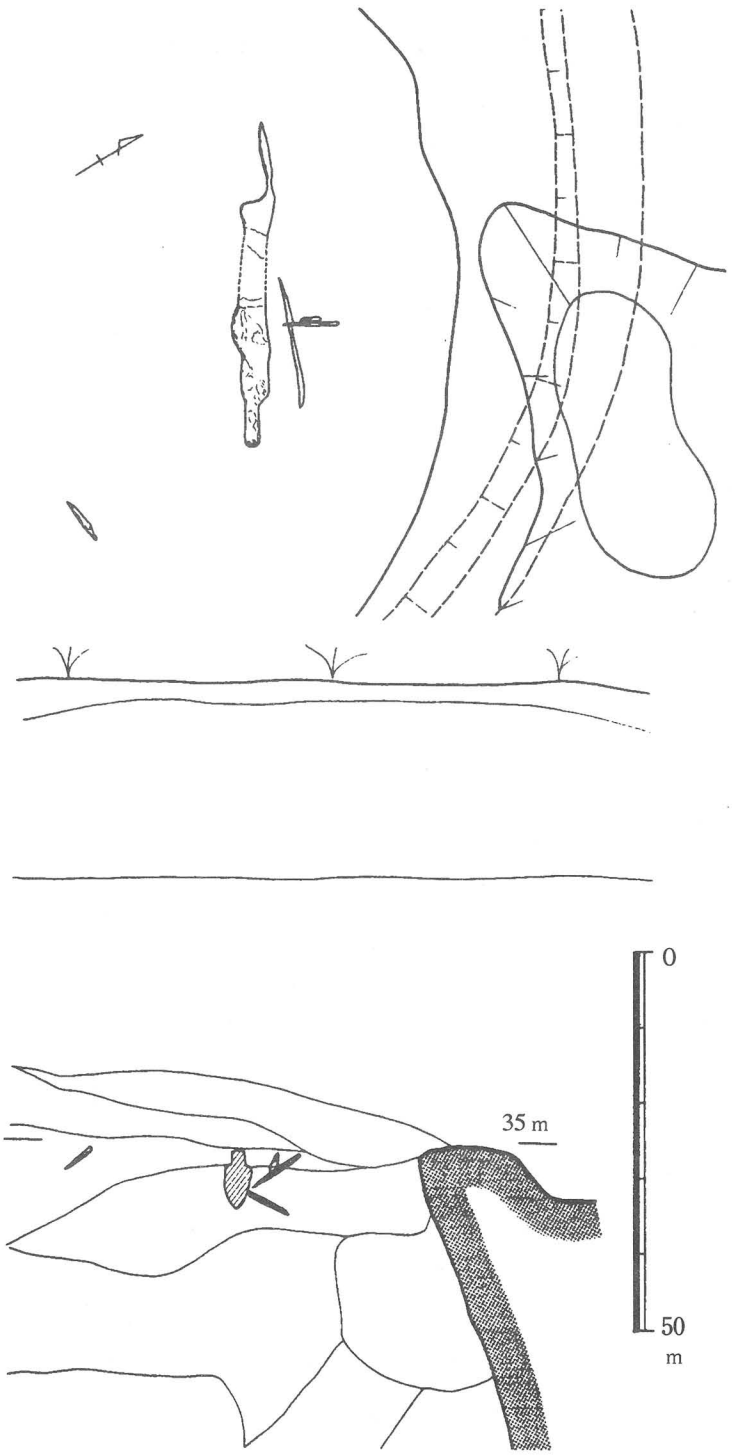
第271図　B区１号墳中央部検出土坑実測図

状土坑の埋土と鉄器周辺の埋土と平面的には識別困難な状態であった。したがって、B1号墳の埋葬施設については、南北方向の土層観察によって壙底の確認と鉄器の出土状態を記録したに止まった。その観察結果からすると、幅は70㎝を測り、各鉄器はその面よりやや浮いた状態で認められたことから棺あるいは遺体の上に置かれていたものと推定された。

袋状土坑（第271図)袋状土坑はは口径1.5m、深さ1.6m、底径1.75mを測るものであった。土坑の底部はほぼ水平となっており、プランは円形を呈す。壁は内湾しながら口縁部に至り、したがって口径は、底の径より小さい造りとなっていた。袋状土坑の壁沿い底面には断面U字形の周溝が認められた。周溝は幅約10㎝、底面からの深さ5㎝はを測るものであった。

土層の堆積状態は土坑の口縁付近は前述した火葬骨片を含む、土が覆い、その下層の3、7、8、9の各層には火葬骨片は認められなかった。したがって、これらはB1号墳の盛土で、10、11は埋葬施設の中に堆積した土と判断された。埋葬施設の底と判断した面から、上層の火葬骨を含む層までは50㎝を測る。

袋状土坑の土層堆積状態は極めて複雑で、明黄色を示す地山ブロックがなだれ落ち、その後、隙間に腐植土が流入したように観察された。内部には穀物などを収納した痕跡は認められなかった。この袋状土坑とＢ１号墳との直接的な関係は認められなかった。積極的根拠があるわけではないが、Ｂ１号墳とはかなりの時期的隔たりがあるものと判断された。

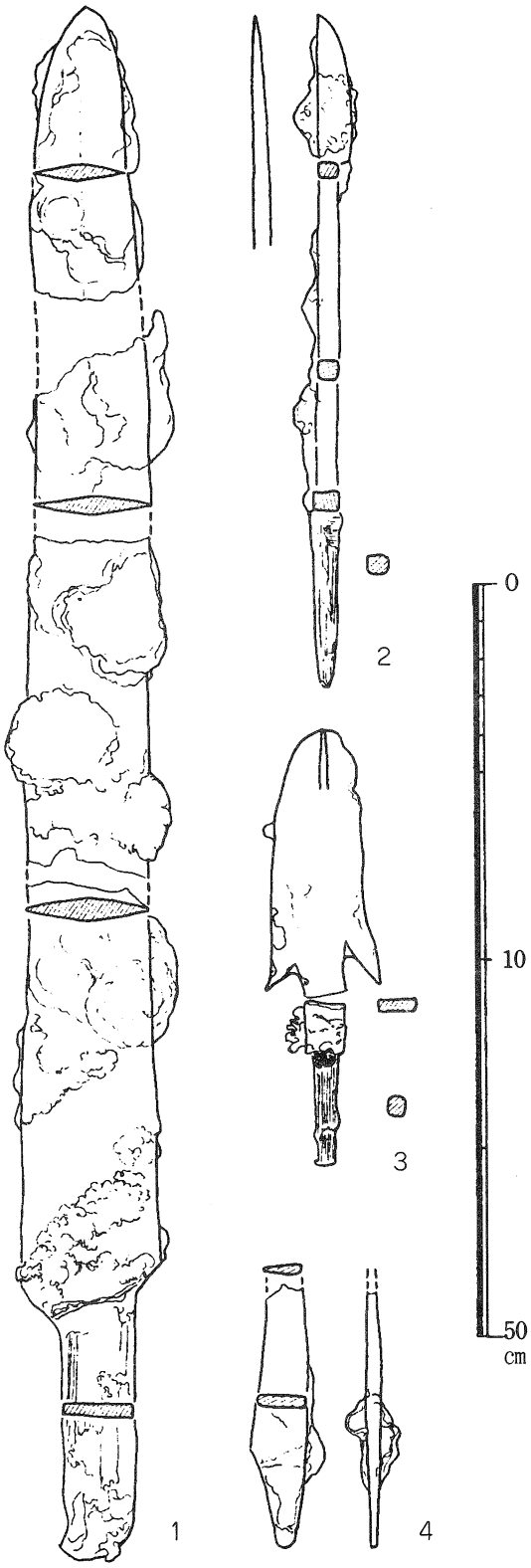


第272図　B区１号墳鉄器出土状態実測図

Ｂ１号墳第Ⅰ主体部出土遺物（第273）

出土遺物はいずれも鉄器で、剣１、鏃２、刀子１であった。剣は２ケ所を欠損しているが、刃先線を結ぶとその全長は、41㎝前後であったと推定される。茎は長さ8㎝、幅2㎝厚み0.3㎝を測る直茎で、茎尻は錆で本来の形態を留めていないが、やや丸みをもっておさまるものとみられる。関部の形態は斜角関あるいはナデ角関と分類されるものである。剣身は幅3.5㎝を測り、断面レンズ形を呈す。剣身の厚みは長さや幅に対してやや薄く感じられた。

剣身及び茎尻に木質が認められたことから、外装を付けた状態で副葬されたものと判断された[7]。鉄鏃は平根式の断面レンズ形を呈すものと、長頸鏃と称されるものとの二種がある。前者は比較的深い腸抉を持つもので、鏃身は長さ7㎝、左右に開く腸抉幅は３㎝を測る。茎上方には幅1.5㎝を測る樺巻きの痕跡が、また茎部過半には矢材の一部が付着しているのが認められた。後者の長頸鏃とした物は全長18㎝を測り、鏃身は刀



第273図　B区1号墳出土鉄器実測

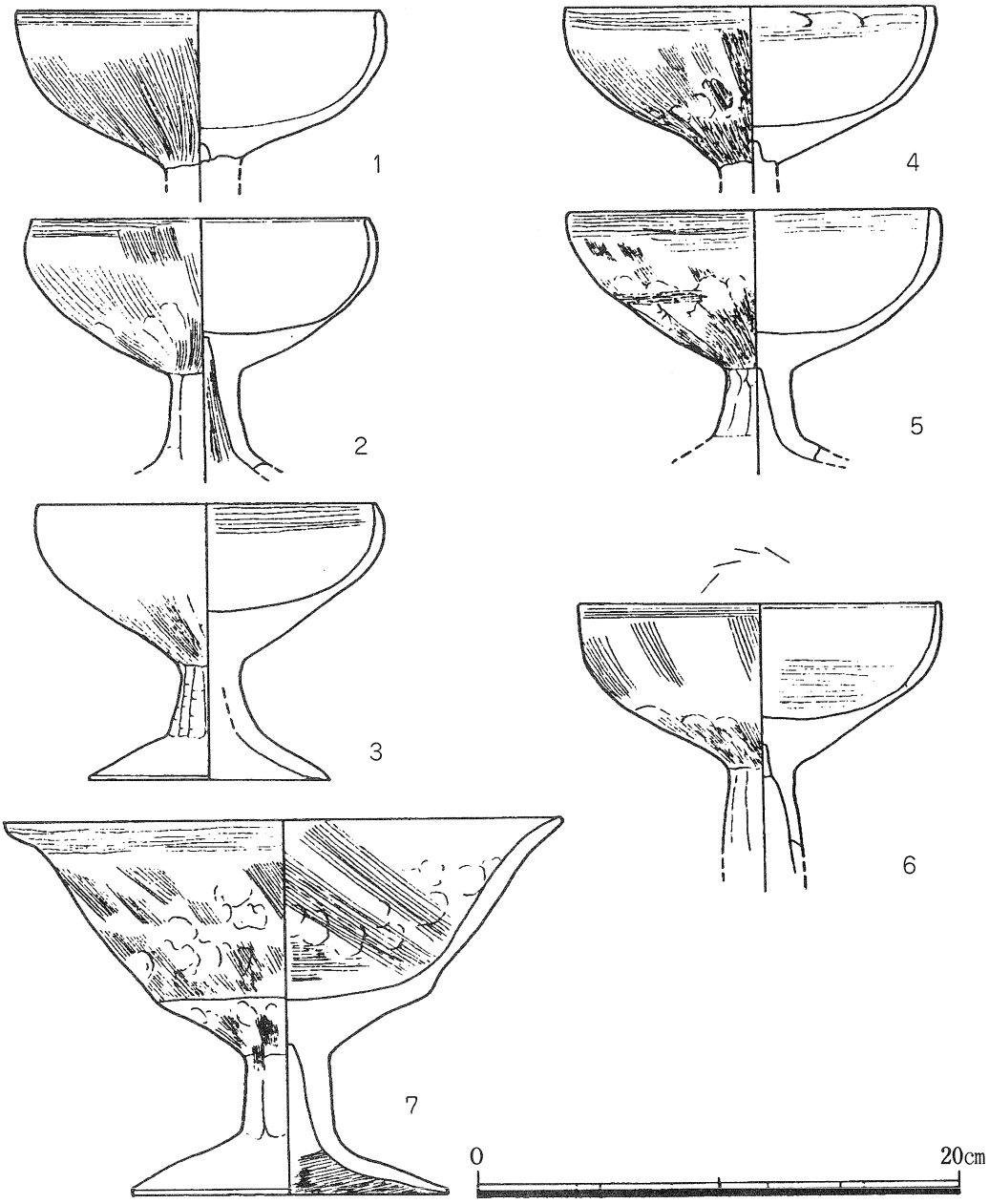
子形の片刃式となっている。箆被は長さ9.5cm、幅0.5cmを測り、断面形は正方形を呈す。茎部は長さ5cmを測り、上方に樺巻きの痕跡と、その下に縦方向に走る矢材の繊維が認められた。

刀子は先端部を欠損しており、残存長6.5cmを測り、茎長は2cmと比較的短いつくりとなっている。関部は錆が付着し、詳細は不明ではあるが片関の形態と判断された。刀身の関際は断面長方形を呈し、刃部に向かって重ねが薄くなる傾向は見られない。このことから、刃は関から若干の距離をおいて研ぎ込まれる造りと推定される。

B１号墳溝内出土遺物（第274図）以下記す溝は、支丘の主軸に直行する形で、B１号墳の墓域の東限を画すために施されと考えられるもので、溝内出土土師器はこの北端から出土した。出土位置は溝の北端底面で、支丘の北側斜面傾斜変換点付近にあたる。出土土師器の器種はいずれも高杯で、伏せた状態認められ、原位置を動いていないと判断された。葬送儀礼に伴う土器のありかたの一端を窺わせた。

これらの高杯は、杯部と比較的短い脚部からなり、脚部は下半部から急に開く形となって脚端部にいたるものである。ただし、杯部の形態には、二種があって、椀形となる小型なものと、朝顔形に大きく開く比較的大型のものとがあり、前者6個体、後者1個体がある。

前者はいずれも同様な形態で、杯部の口径15cm、高さ11.5cmを測り、数値もほぼ近いものとなっている。内外面ともに明るい赤黄色を



第274図　B区1号墳土器溜出土遺物実測図

示し、焼成は比較的良好であるが、伏せた状態で長期間風雨にさらされていたため脚部及び、杯外面は剥離した部分がみられる。杯部外面は、縦方向に目の細かいハケで整え、内面横方向に目の細かいハケメが認められる。脚部外面は比較的幅の広いヘラ状工具による磨きが施されている。後者

の杯部は外反して大きく開く形態となっており、杯部の口径23㎝、高さ15.2㎝で、杯部の下半部から脚接合部にいたる中間に稜線が廻っている。これが前者と大きく異なる点である。焼成、色調とも前者に類似している。これらの所属時期について、A区西29号墓の北に隣接して検出した土器溜り出土の土器と類似点が多く、ほぼ同時期と推定される。そこでは山陰でも最古の時期に属すと考えられる須恵器を伴っている。従って本墳の時期も５世紀後半頃として大過ないものと思考される。

Ｂ１号墳墳丘上出土陶製五輪塔（第275図） 以下に述べるのは、Ｂ１号墳の墳丘上で得られた直接古墳に伴なわないと判断した遺物についてである。これらは中世の古墓に関わる人頭大の自然石、陶製五輪塔などがあったが、いずれも原位置を保つものでないと判断され、所謂表採遺物である。

陶製五輪塔は小片も含めると約20点近い数となるが、図示しえるものは10点であった。

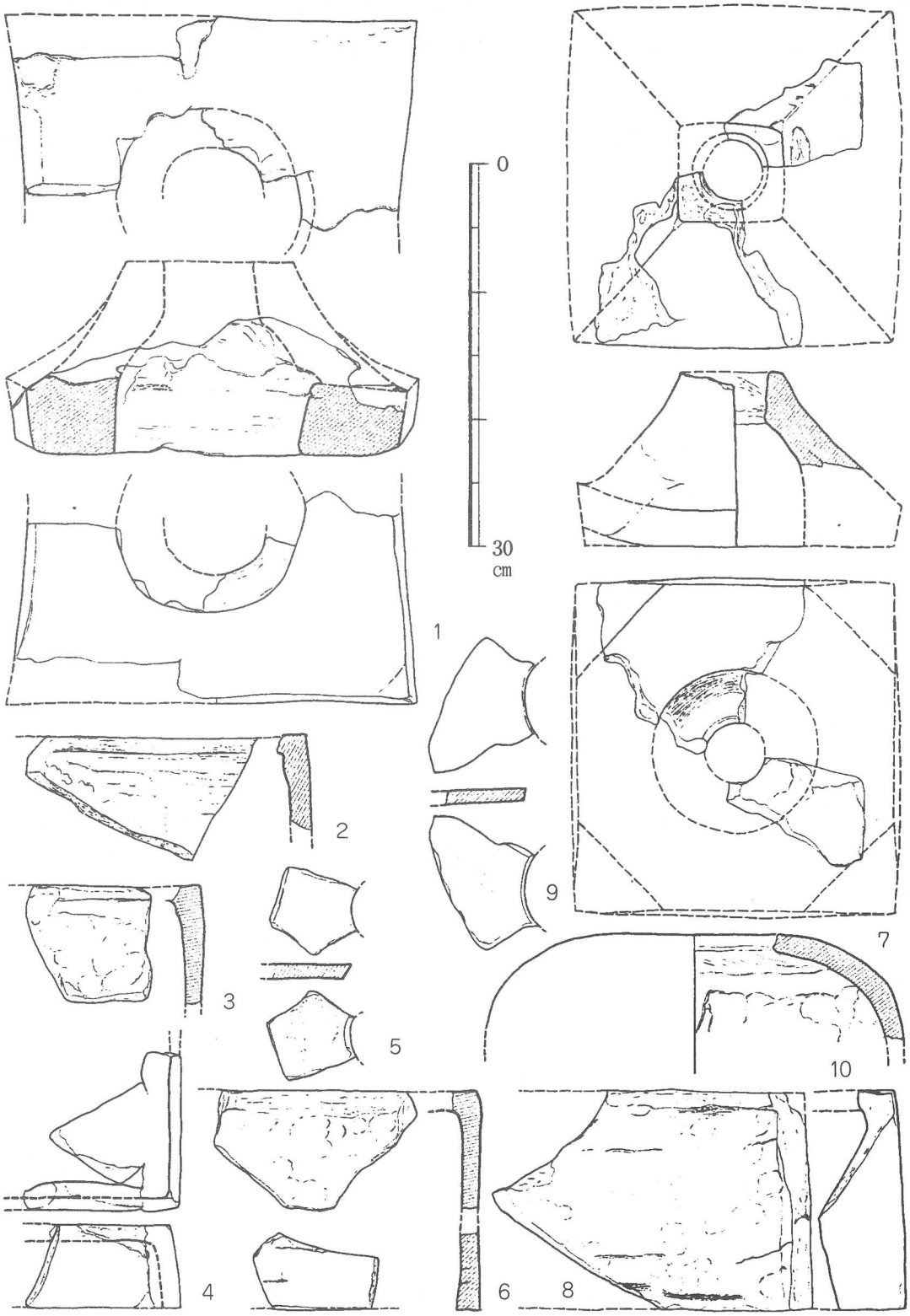
(1) は火輪の一部で、軒幅は28.5㎝、軒厚さ5㎝㎝を測り、裏面には径14㎝の内繰りが見られ、(7) を参考にすれば、この内刳りは上の方形平坦面に向かって口径を縮小しながら貫通しているものと推定される。(7) は前述したものよりややこぶりの火輪である。裏面には推定径13㎝の内繰りが施され、上部に向かって径を縮小しながら貫通している。上面には風輪が乗る、推定一辺　8㎝の平坦面がある。本資料には２条しか残存しないがこの平坦面の四隅から寄棟の稜線が軒先へむかって下降していたと考えられる。全体に暗茶色を示し、焼成は比較的良好である。(2～6・8・9) はいずれも地輪の一部と判断したものである。焼成は比較的良好で暗灰色、あるいは黒色を示す。(2～4・6・8) は地輪の側面から上面の一部にかけての破片である。(5・9) は円形の穴の一部が認められる。他の例を見るとこのような円形の穴をもつのは地輪の上面で、下端は底部を持たないものがある。したがって、この２片は地輪の上面中央部の破片であろう。(10) は水輪の破片とみられるものである。胴部最大径32㎝を測り、上面には推定径12.5㎝の円形の穴がみられる。ただ上下関係は不明である。暗黒色を示し、焼成は不良である。

Ｂ区南側斜面で検出した遺構と遺物

Ｂ１号墳の南側裾から谷底に向かう斜面の上半で中世の埋葬に関わる遺構や遺物を検出した。

調査当初、この斜面には遺構は存在しないものと思われたが、一応尾根筋と直行する方向に幅1ｍの試掘溝を入れたところ、以下に記すような遺構の一端を検出した。遺構は斜面の上半の範囲に集中して認められた。検出遺構は2条の参道と推定される細長い平坦面の他、火葬墓5、荼毘跡1であった。火葬墓については、五輪塔を伴うものと、斜面の窪みから火葬骨片が若干認められる程度のものとがあった。ただ後者が当初から墓標を持っていたか否かという点は即断のかぎりではない。つまり、後述するように、調査中に谷底でかなりの数の五輪塔を表採しており、これらが伴った可能性も捨て切れないからである。

道状遺構（第275図） 古墓に関わる参道と推定下もので、上下２条がある。上方のものはＢ１号



第275図　B区1号墳陶製五輪塔実測図

墳の南裾に沿って刳りる形で作られ、標高32．5～34ｍにかけて走り、幅1.5ｍを測る。西端はやや低くなっており、一旦Ｂ１号墳側に屈曲し、墳裾に沿って序々に上がっと調査区外に至る。　西端部が大きく屈曲するのは、Ｂ南１号墓を穿ったためと、この道が上方に登ることを意図して作られたことを窺わせた。下方の道状遺構としたものは標高30.5ｍ付近に等高線にそって走る、幅1ｍを測り、斜面上方側に幅20cm、深さ10cmの側溝を備えている。西端は工事で削られ、東端は調査区のほぼ中央で、崩壊している。これは、この部分の傾斜が急であることに加えて、地盤が軟弱であったことに起因するものと考えられる。この道状遺構の南辺には、後述するＢ南5～7号墓がある。

火葬墓（第276～278図）Ｂ南1～7号墓があり、いずれも斜面を若干掘り窪めた土壙で、埋土中から僅かな火葬骨片が出土した以外、副葬品などは認められなかった。

以下、各火葬墓の概要を示すこととする。

Ｂ南１号墓　Ｂ１号墳北西隅の若干下方にあって、東西上縁長2ｍ、底部奥行き1ｍ、壙底から斜面掘り込み口までの距離は1.5ｍを測り、底の平面は小判形となっていた。

Ｂ南２号墓　上方の道状遺構の南側にあって、前述したＢ南１号墓の対面にあたる。東西上縁長1.2ｍ、底部奥行き1ｍ、壙底から斜面掘り込み口までの距離は80cmを測り、底の平面は半円形となっていた。

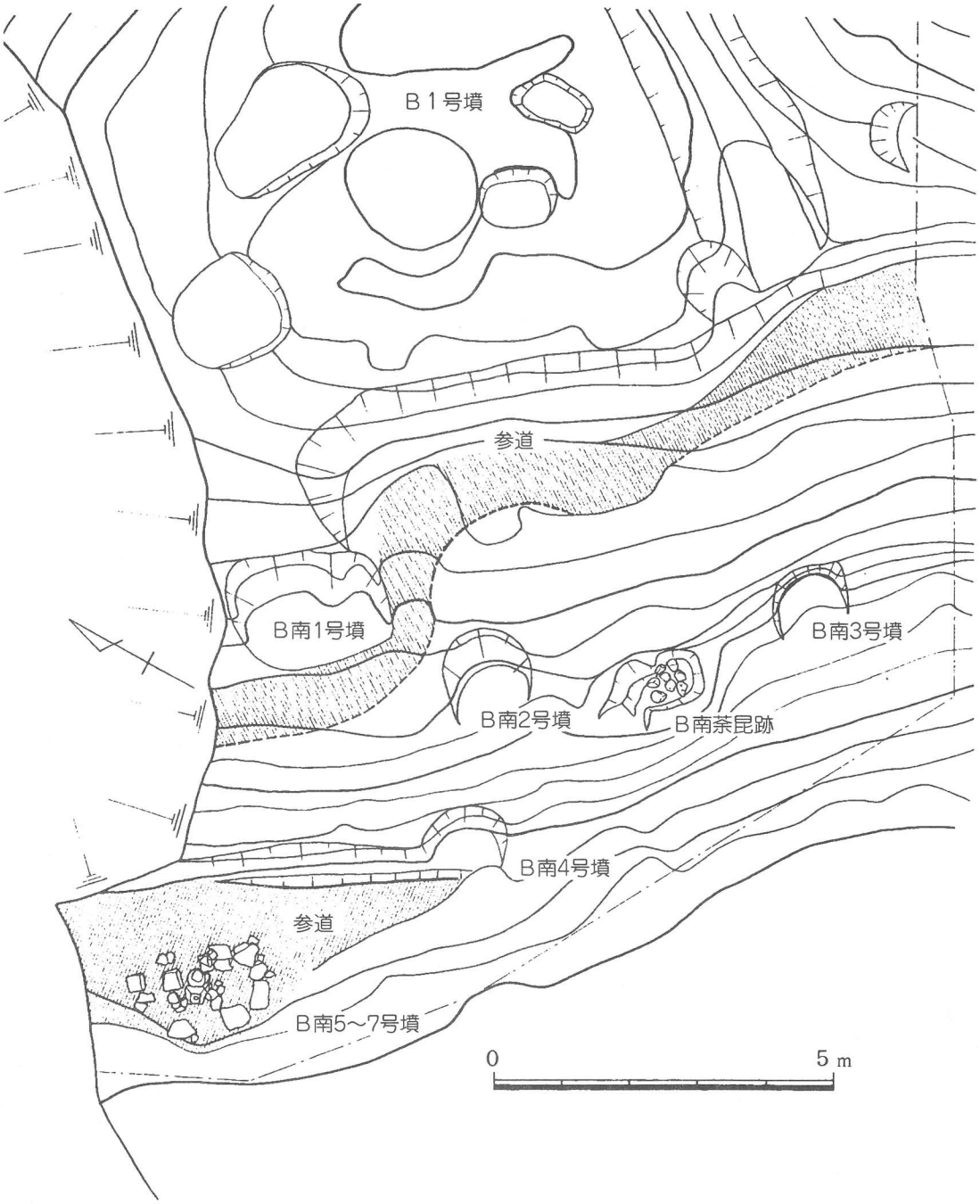
Ｂ南３号墓　調査区の中央やや東方、標高32ｍ付近に位置するもので、東西上縁長1ｍ、底部奥行き50cm、壙底から斜面掘り込み口までの距離50cmを測り、底の平面は半円形となっていた。

Ｂ南４号墓　下方の道状遺構の東端に接して存在するもので、東西上縁長1.1ｍ、壙底奥行き80cm、壙底から斜面掘り込み口までの距離1.2ｍを測り、底の平面は半円形となっていた。

Ｂ南５・６・７号墓（第277図）下方の道状遺構の西端南側に接して位置する火葬墓で、石製五輪塔の各部分が折り重なった状態で認められた。この火葬墓が他の例とは異るのは、道状遺構の南辺に沿って石列が認められる点である。これは上面の平坦な一辺50cm、厚さ20～30cmの石材を複数並べることによって、墓域を画す形となっている。検出遺構としては、道側の辺に対して直角に南（谷）側に曲がる隅部分が認められる。この部分の観察からすると石列は、一段のみであったと思われる。道状遺構及び5～7号墓の造成にあたっては以下のような順で行われたと推定される。まず南面する斜面の標高31ｍ付近を逆Ｌ字状に掘削して平坦面を作る。さらに掘削時に出た土を平坦面の南側斜面に盛り、平坦面を拡張する。盛土部分を埋葬地として使用し、掘削してつくった平坦面（地山）と盛土で作った平坦面の境（道状遺構の南辺）に沿って石を並べ、墓域を画す。石列の内（南）側に五輪塔などを建てるといった工程であろう。

Ｂ南５～７号墓は五輪塔の各部分を除去すると、浅い土壙が３つ連結した状態で認められた。

Ｂ南５号墓は、平面隅丸方形を呈し、一辺45cm、深さ7cmを測る。内部には火を受けた長幹骨の他、



第276図　B区南斜面検出遺構分布図

骨片が出土した。成人骨と思われるが、採集した量は１体分には及ばないと判断された。

B南６号墓は５号墓の南に接して、B南７号墓との中間に位置する平面楕円形の土壙である。長径45㎝、短径25㎝、深さ9㎝を測る。中からは若干の火葬骨片が出土した。

B南７号墓は、B南６号墓の東に接して掘り込まれた土壙である。土壙の上縁は時期を異する掘り込みにより元の形態は留めていないものと判断された。したがって、この土壙の法量は火葬骨のまとまって認められた範囲を若干上回る径50cmほどのものであろうと推測される。

中からは、火を受けた長幹骨の他、頭部とみられる骨片がまとまとって出土した。ただし成人１体分には及ばない量であった。壙底から7cm上方で土師質土器杯１点が出土した。この杯がB南7号墓に伴う遺物であるか否かは即断の限りではない。つまり先にも述べたように、時期を異にする掘り込みが著しく、７号墓に伴わない可能性の方が大きいように感じられた。時期を異にする掘り込みについては、五輪塔の建てられた後にも、随時継続して地輪脇から行われたことが窺えた。そして、五輪塔を据えた旧表土面からも、おびただしい火葬骨片が認められた。このことから火葬骨埋葬に際しては鄭重に土をかぶせるといった意図はうかがえなかった。

出土土師器杯（第279図） 7号墓の上面から出土したもので、口径11.8cm、底径5.2cm、深さ3cmを測る。焼成は比較的良好で、底部裏面には糸切り痕が認められる。

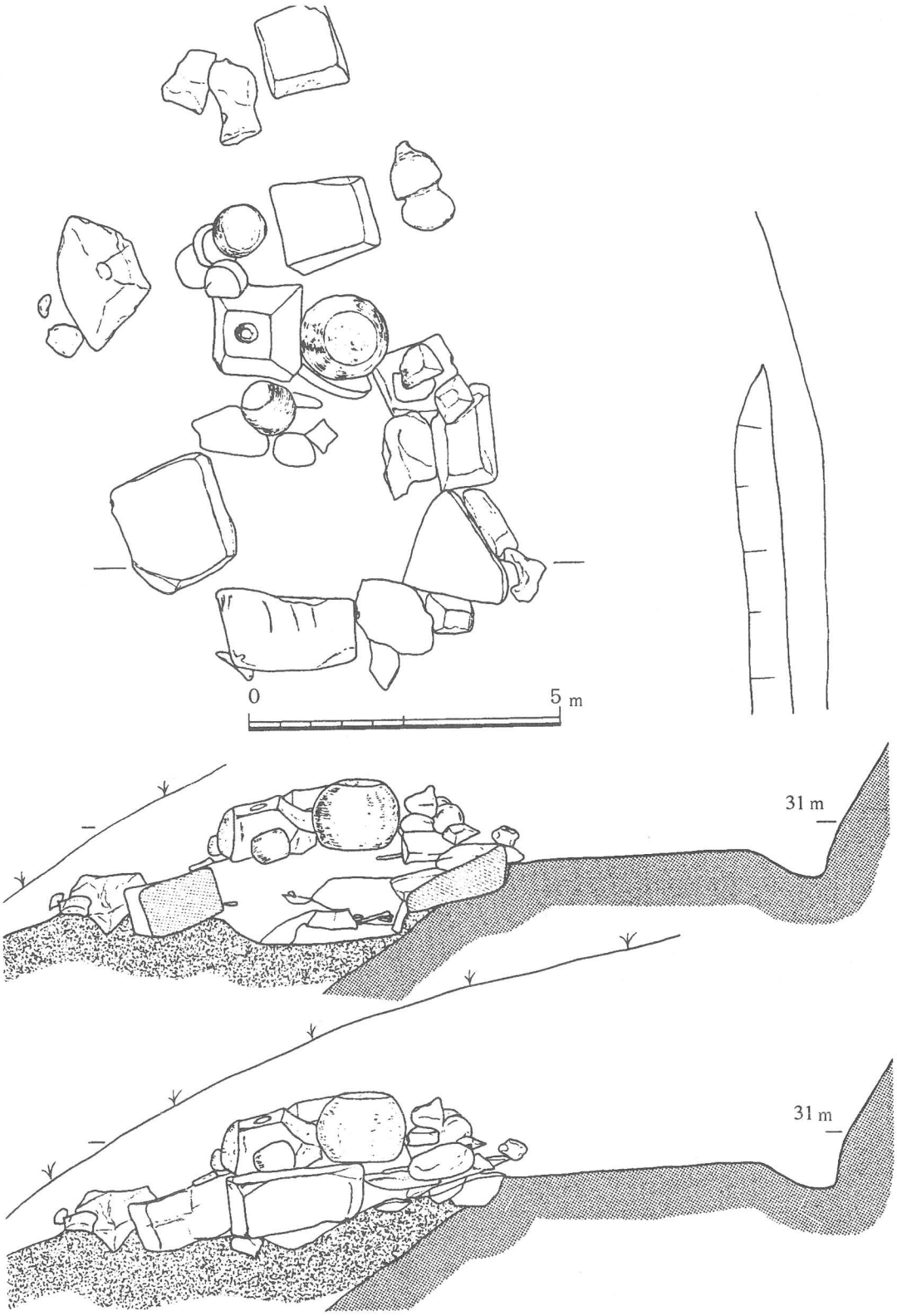
B南５～７号墓出土石製五輪塔（第281図） ここで検出した図示しえる石製五輪塔は、空風輪部3点、火輪部2点、水輪部4点、地輪部2点である。空風輪は風輪部の径より空輪部が若干おおきい作りとなっている。（1・2）ともほぼ同様な大きさで、空輪部径は16cmを測る。(2)は表面の仕上げが入念で、火輪部（5）に似る。火輪（4）はかなり欠損しているが表面は入念な仕上げとなっており、比較的早い時期に転倒して地中に埋もれたものと推測される。頂部平坦面には径5cm、深さ9cmを測る風輪部のほぞの挿入孔が穿たれている。

（5）は高さ20cm、軒幅30cm、軒厚10cmを測る火輪で、腰高である点が注意される。

水輪は3点があるが著しく欠損している。完形の（9）は高さ18cm、最大径27cmを測る。他の3点も径はやや異なるかに見えるが、高さはほぼ同じ値を示すものと推定される。地輪は２点あって、（10・11）とも高さは２０cmとほぼ同じであるが、（10）のほうが一辺29cmと一回り大きい。いずれも石質、加工痕跡などからするとセットにはなりえないと判断された。

荼毘跡（第280図） B南12号墓とB南13号墓にの間に位置する。

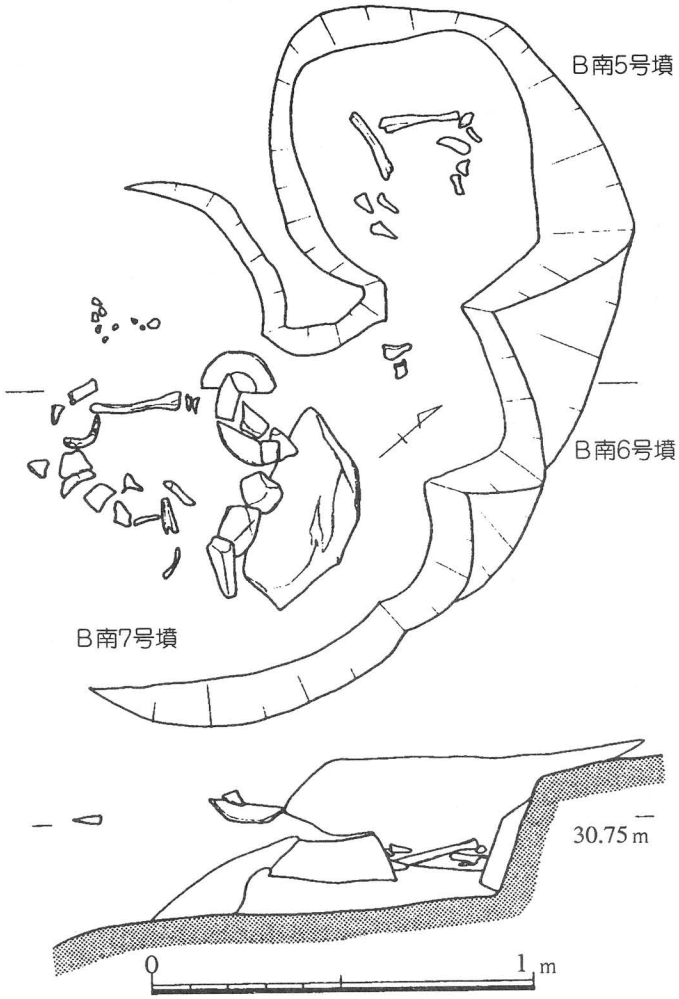
この遺構は、標高32ｍの位置に等高線に沿って、長径1.4ｍ、短径0.8ｍを測る棚状の加工段である。中央部が若干掘り窪められ、底面には人頭大の自然石が、不規則に並べられていた。その石の隙間には、薪を燃した残りとみられる炭化物が窪み全域に認められた。炭化物の厚さは約5cmを測り、その中には火を受けた骨片、長幹骨がみられた。周囲の地肌はさほど火を受けた痕跡は見られなかったが、底に並べ置かれた石はいずれも火を受け、変色していた。これらの状況からこの遺構は荼毘跡であろうと判断された。石は棺を浮かせ、酸素の供給を促す目的で据え置かれたものであろう。



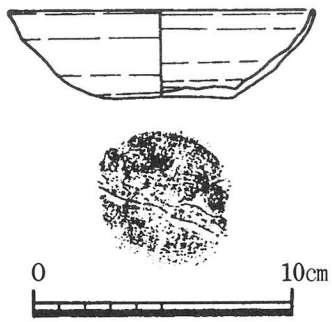
第277図　B南５～７号墓実測図（１）

Ｂ１号墳付近出土石製五輪塔（第282図）墳裾で認められた石製五輪塔の部分は、30個近い個数となる。しかし、セットを組むには至らなかった。以下特徴のあるものを抽出して、記すこととする。（1・2）比較的小型の空風輪で、風輪下端から空輪頂部まで18㎝、両輪とも径12㎝を測る。円柱状の石材の中央に、断面Ｖ字形の浅い溝を回らし、空風輪の境としている。形態、加工痕跡、法量から同工の手によるものであろうと判断された。（3）は空輪部の破片であるが、横断面が正円に近く、入念であることが注意され、（4・5）と同様な形態となるものと推定される。(6)は風輪の下端の突出部で上部最大径9㎝を測る。横断面は正円形を示し、仕上げは入念である。Ａ区中ＳＢ００１付近出土の空風輪と接合する事実は重要である。

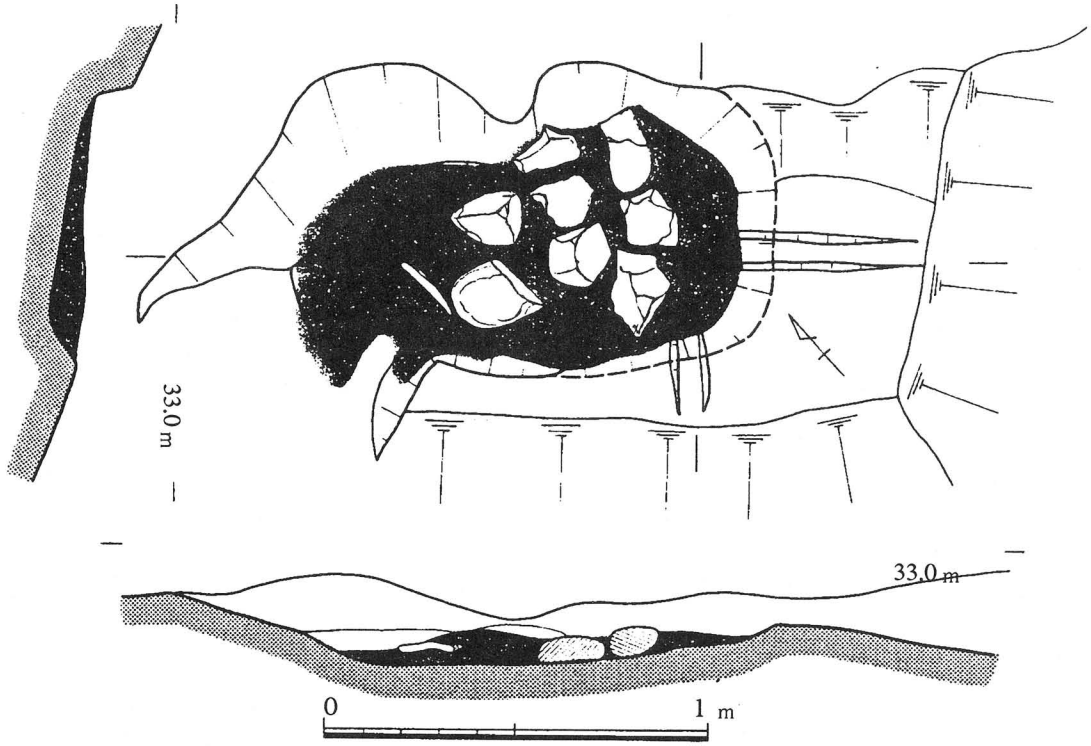
（7・8）は四角柱状の石材中央に、断面Ｕ字形の浅い溝を荒く入れ、空風輪の境としている。溝の加工や全体の面取りが不徹底で、横断面は楕円形を呈す。（7）は風輪上部が滑らかな曲線を成すに至ず、未完成品のような感じさえ抱く。(9)もそれらに順じて、粗い作りで、横断面は楕円形を呈す。火輪は２種あって、（10）は軒幅20㎝を測る。頂上部を欠損しているが、残存部の曲線からすると、さ



第278図　Ｂ南５～７号墓実測図（２）



第279図　Ｂ南７号墓出土遺物実測図

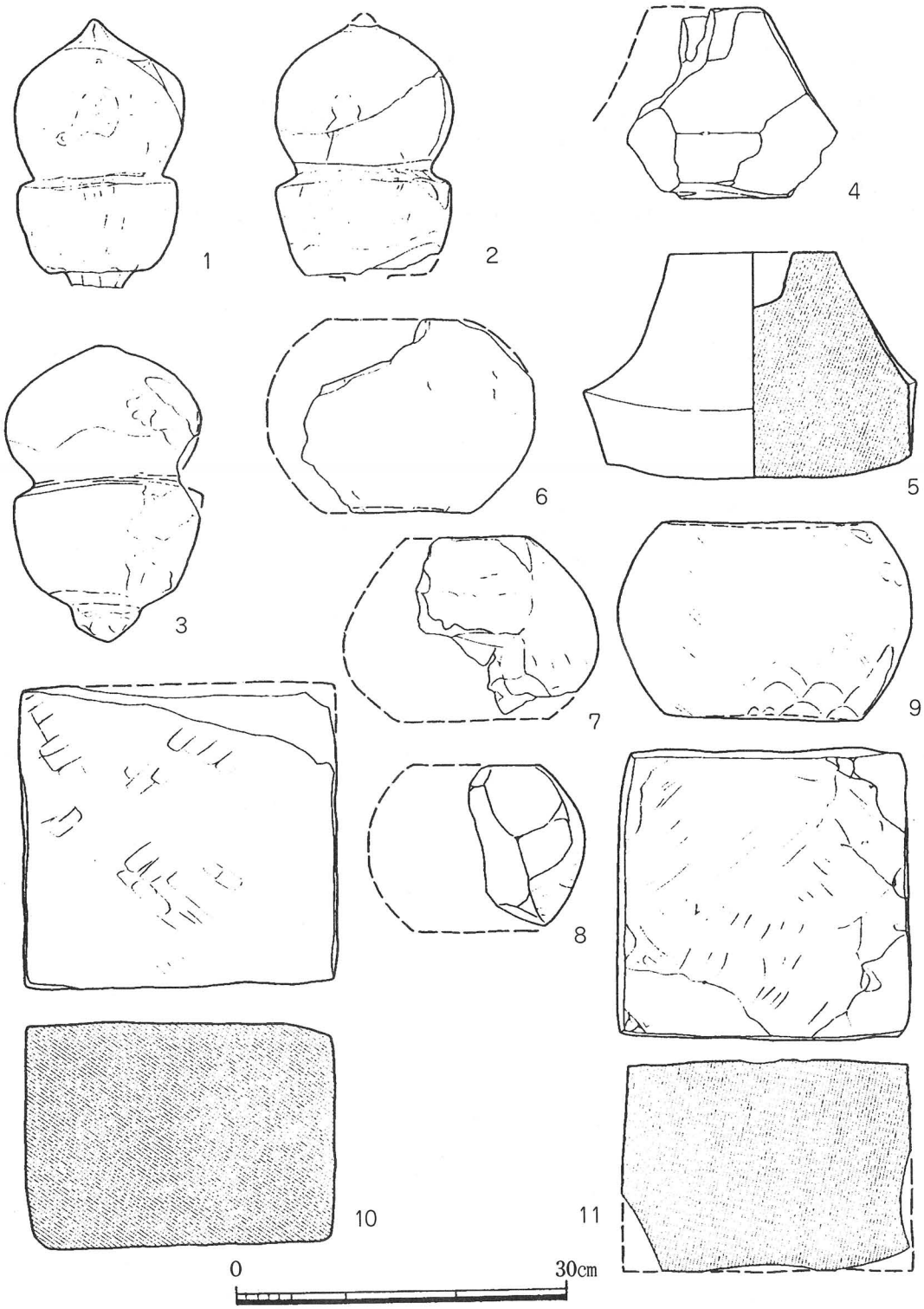


第280図　茶毘跡実測図

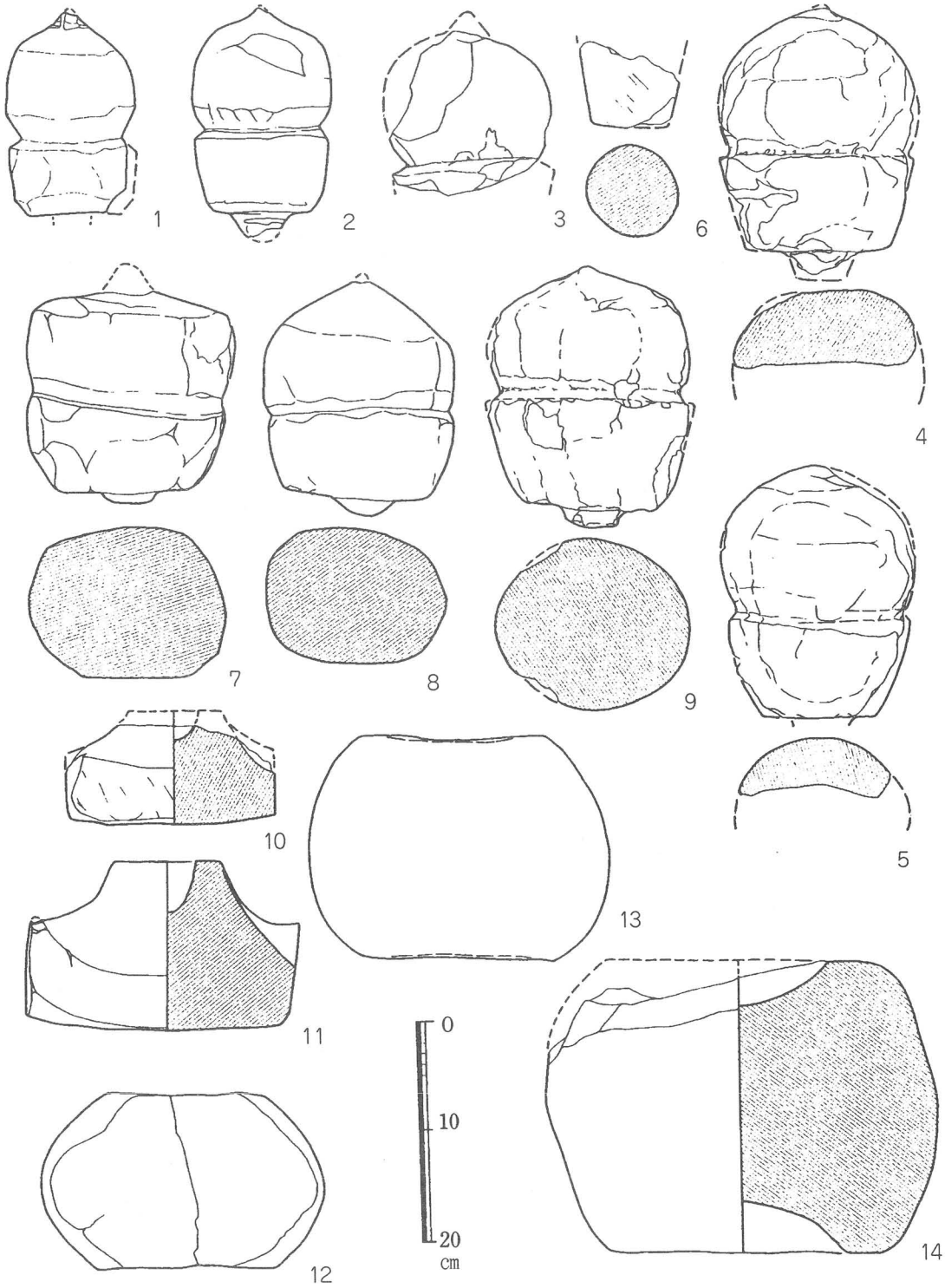
ほど高くはならないものと推定される。(11) 軒幅25cm、高さ15cmを測る。軒の四隅が大きく反り上がり、軒下端からの距離は10cmを測り、特徴的な形態となっている。水輪は二種あって、上下を入念に面取りを行い、中央の最大径の範囲が少ないもの (12)、上下面取り加工を最小限に止めたもの (13・14) がある。そのなかでも (14) には火輪・地輪に接する部分に内刳が施されている。

地輪は二種あって、(第283図1) は一辺21cm、高さ17cm、(2) は一辺25cm、高さ18cmを測る。(2) はとりわけ入念な仕上げとなっている。(3)は前述した地輪とは異なるもので、地輪の上半部の面を取ったような形態となっており、上面には径18cmを測る正円に近い平坦面が削りだされている。裏面中央には径18cm、深さ8cmを測る内刳が認められた。

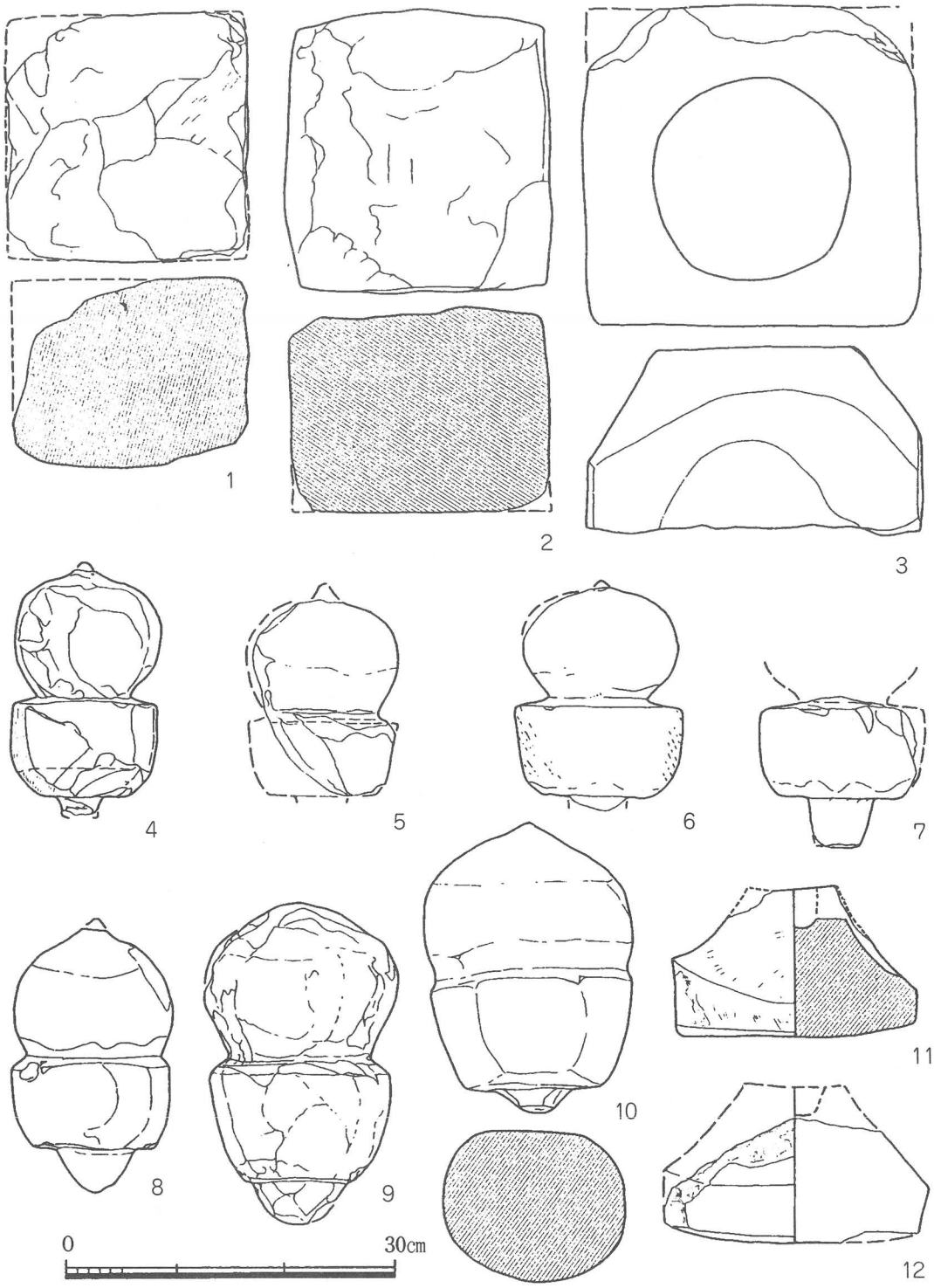
Ｂ区南斜面のＢ南5～6号墓の下方でもかなりの石製五輪塔が得られた。これらは、上方に設置されていたものが転落したのであろう。まず、空風輪から記すことにする。(4～7) は空風輪の境となる溝の加工が入念で、結果空輪の形態が球形に近いものとなっている。Ａ区ＳＢ００１付近出土の空風輪(１・２) に類似点が多い。(８・９) は前述したものより溝が浅く、若干雑な感じがする。(4～7)の横断面が正円形を示すのに対し、(10)が横断面楕円形を示すのは、施溝や面取り加工が不徹底であることに起因している。火輪は (11・12) ともかなり欠損個所がみられるが、軒幅22cm前後をの数値を示す。両者は材質、加工痕跡などから、同工房製作の規格品であろう想像される。



第281図　B南5～7号付近出土遺物実測図



第282図　B区１号墳南裾出土遺物実測図（１）

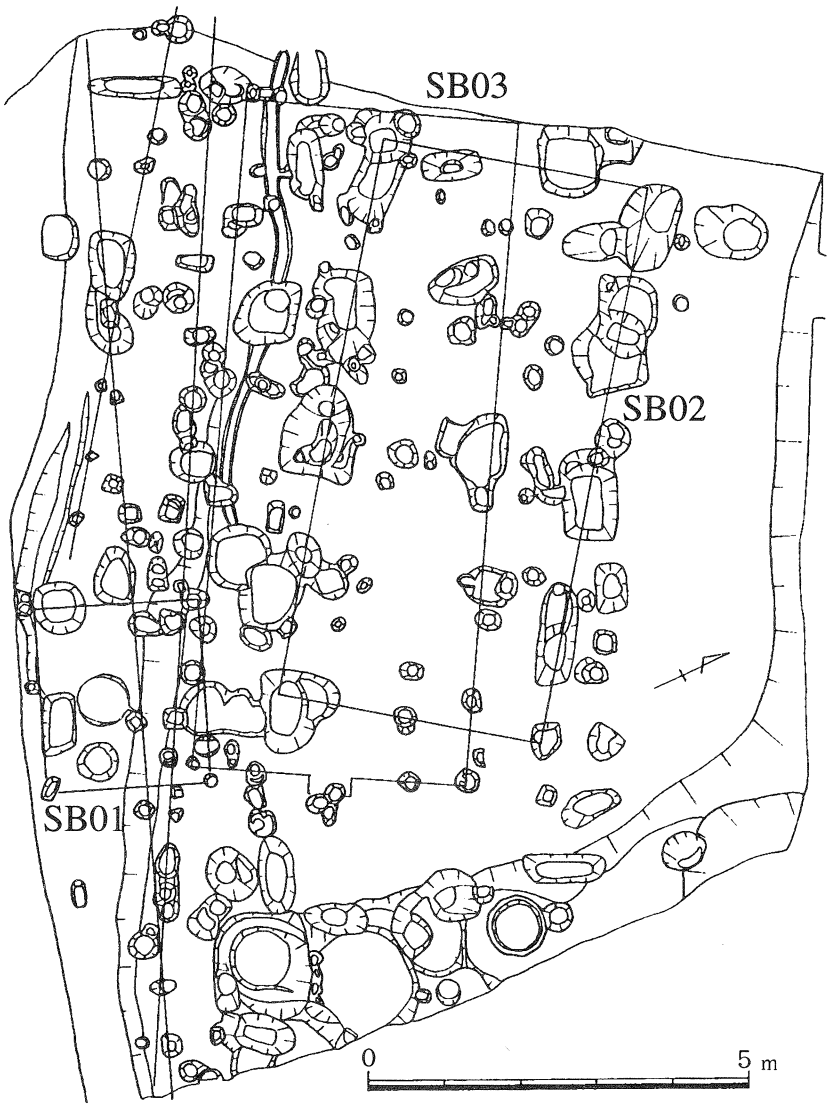


第283図　B区１号墳南裾出土遺物実測図（２）

Ｂ区北側テラスで検出した遺構と遺物

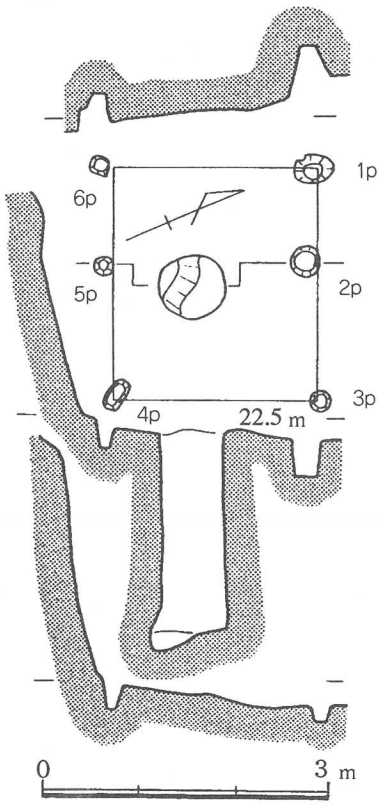
Ｂ１号墳の北側には標高23ｍ付近に、幅約10ｍを測る平坦面が削り出されている。現状は竹藪となっており、当初この平坦面は、造林などを目的とする造成であろうと考えられた。調査の進行にしたがって、以下記すような建物群の存在が明らかなった。この平坦面は丘陵裾部に沿って北東方向へ延びており、調査をすれば、建物の軒数もさらには増えるものと思われる。

検出した遺構は柱穴と推定される落ち込み150個所以上、柵状遺構3条、溝状遺構2条、井戸状遺



第284図　Ｂ区北側テラス検出柱穴群実測図

構1個所などがあった。このうち、柱穴と推定されるものは多数あったが、建物として理解しえたのは3棟であった。この平坦面は、Ｂ１号墳が築造されている丘陵の北側斜面を大きく削って造成されているため、現地に立って南を見ると、Ｂ区北側斜面の掘削面が屏風のように立ちはだかり、隔離されたように感じられる。したがって、周辺の竹や樹木がたとえ皆無であったとしても、日当たりは悪かったことは想像に難くない。

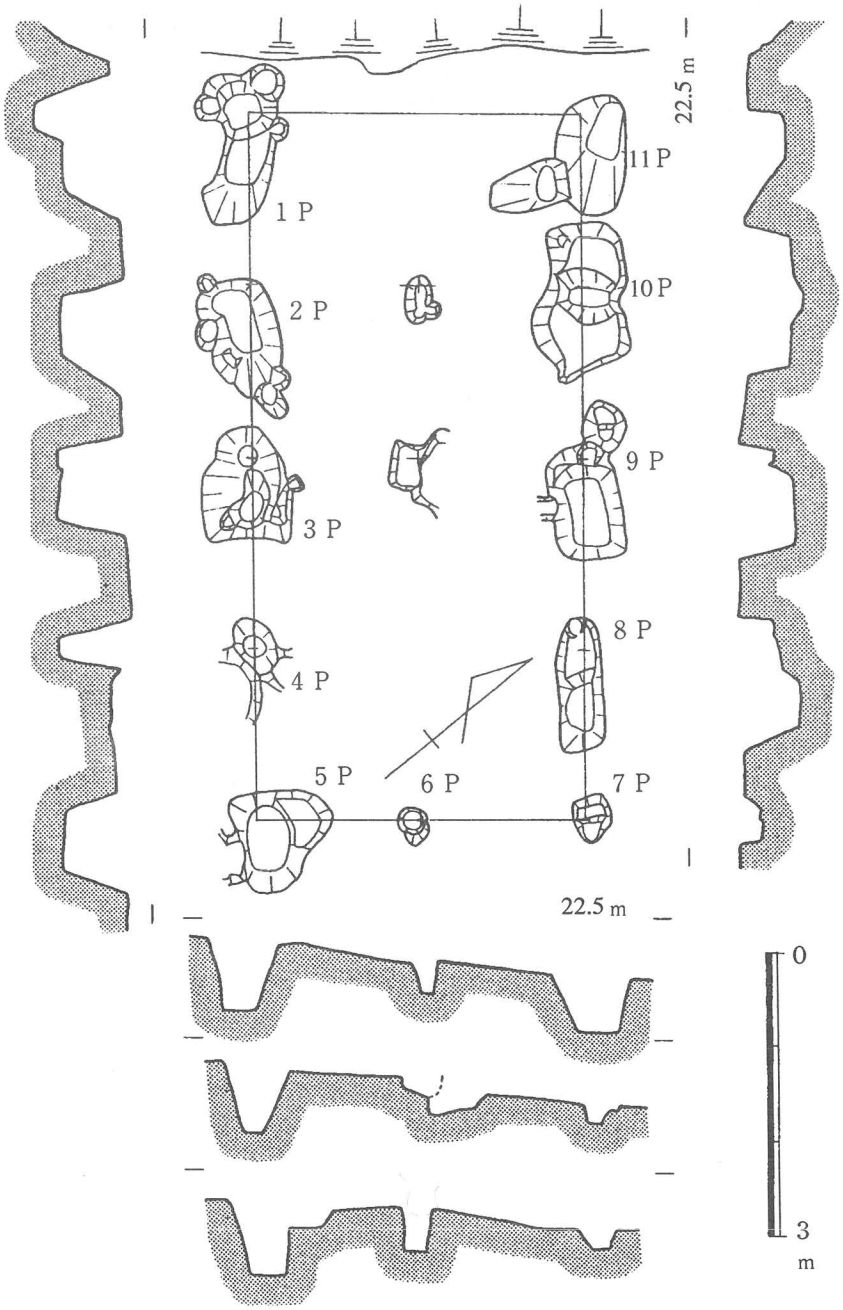


第285図　ＳＢ０１実測図

Ｂ区ＳＢ０１（第285図）この建物は平坦面の南辺、つまりＢ区北斜面の掘削下端に接して検出した東西棟で、桁行2間（2.4ｍ）、梁間１間（2.1ｍ）の規模をもつ掘立柱建物である。建物主軸方位はＮ－65°－Ｅである。柱間寸法は南側桁行1ｍ・1.4ｍ、北側桁行1ｍ・1.4ｍとなっている。この建物プランのほぼ中央で、井戸と推定される円形掘方を呈す素掘り土坑が1個所認められた。土坑は径0.65ｍ、深さ2.15ｍを測るもので、掘り込みは垂直となっている。底は北半部がほぼ水平となっているが、南半部は若干深く掘り下げられている。底部の一部が若干掘り下げられているのは、水垢を沈殿させその上澄を汲み取るための工夫と解される。調査時の観察からすると、土を掘り上げた状態で１日放置した場合、底部に近い土坑壁から地下水がしみ出して水深約５０㎝ほど溜ることを確認している。Ｂ区ＳＢ０１は井戸の覆屋的施設であったと判断された。

Ｂ区ＳＢ０２（第286図）この建物は、調査区中央で検出した東西棟で、西方は調査着手以前に工事による掘削で失われている。桁行５間（7.4ｍ）以上、梁間２間（3.5ｍ）の調査区内で最も大きな規模の掘立柱建物である。建物主軸方位はＮ－50°－Ｗである。柱間寸法は南側桁行1.8ｍ・1.8ｍ・2ｍ・1.8ｍ、北側桁行1.8ｍ・1.8ｍ・2ｍ・1.8ｍとなっている。一方、東側の梁間の柱間寸法は1.75ｍ、17.5ｍとなっていた。

各柱穴の掘方は長方形、円形のなどの他、形容し難い不整形もの、さらに大きさも様々であった。掘方は大きいものは長径1ｍ、短径0.7ｍを測るＰ9などがあるが、柱の痕跡をみると径20㎝前後の掘方に比較すると意外に小さいものであった。そしてＰ1・2・3に見られるように1個所の掘方に複数の柱痕跡が集中する例がみられた。Ｐ1の場合5回、Ｐ2は6回、Ｐ3は４回以上の建替えによったと



第286図　ＳＢ０２実測図

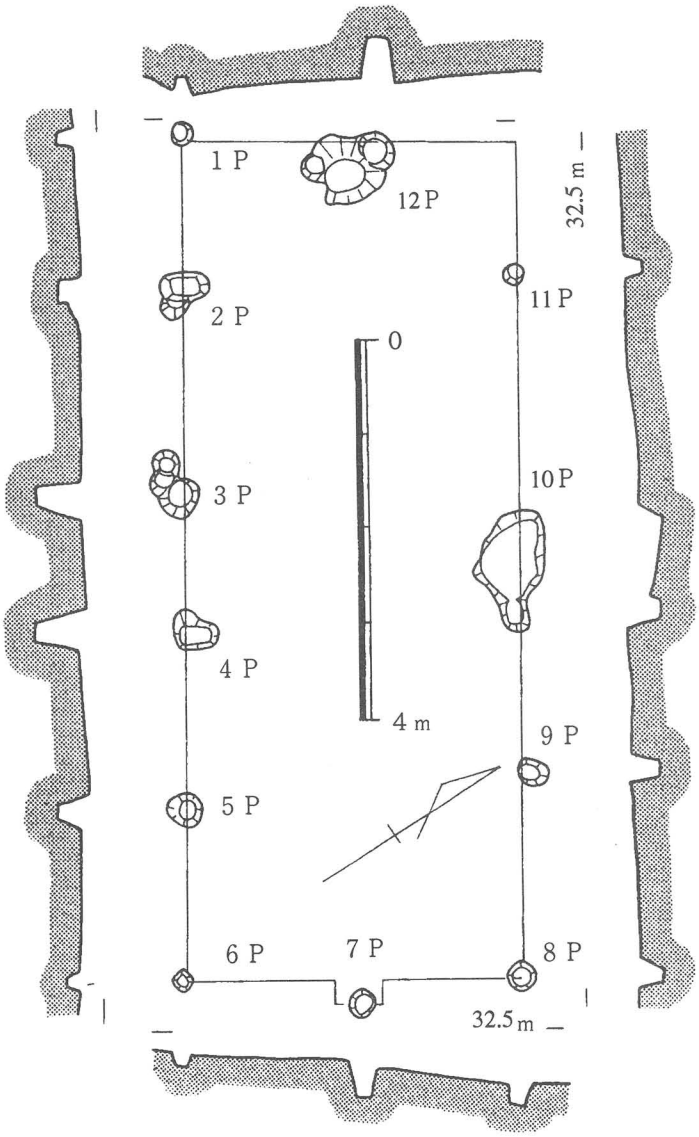
みられる柱痕跡が確認された。この例からすると、柱痕跡に対して掘方が大きくなる原因としては、

建物のプランを当初のままとして老朽化した部材が取替えられた可能性が考えられる。

つまりＳＢ０２は、同じ場所でプランを変更することなく長期にわたって存続する必要があった建物ということができよう。

Ｂ区ＳＢ０３（第287図）

この建物は、前述したＳＢ02と主軸方位を若干異にする東西棟で、そのプランの大方はＳＢ02と重複している。桁行5間（8.7ｍ）、梁間2間（3.6ｍ）の規模の掘立柱建物で、建物主軸方位はＮ－58°－Ｗである。柱間寸法は南側桁行1.8ｍ、1.8ｍ、1.5ｍ、2.1ｍ、1.5ｍ、北側桁行2.1ｍ、1.8ｍ、1.5ｍ、1.95ｍ、1.4ｍとなっており、一方、梁間の柱間寸法は東側は1.8ｍ、1.8ｍ、西側は1.5ｍ、2.1ｍとなっていた。



第287図　ＳＢ０３実測図

ＳＡ０１～０３（第288図）

Ｂ区北側斜面の掘削面下端に沿って東西に走る柱列で、西端が工事に伴う掘削によって失われているため、その全容を窺うことは出来ない状態となっている。柵あるいは垣と推定したものである。これらは、同様な場所にありながら互いに主軸方位を異にしている。それらの用途としては、掘削面の下端に体積する崩落土を、建物側に流入させないための施設であった可能性が考えられる。

ＳＡ０１は3条の柱穴列中最も南側、つまり崖の下端に近い位置で検出したもので、主軸方位は

N－52°－Eとなっていおり、残存長6.6mを測る。柱穴列は計7個の柱穴で構成され、全体に法量は不揃いで、個々の法量はさほど大きいものではない。ただし、P4、P7が深さ60cmと、特に深いことが注意される。

ＳＡ０２は３条の柱穴列、中央に位置するものである。

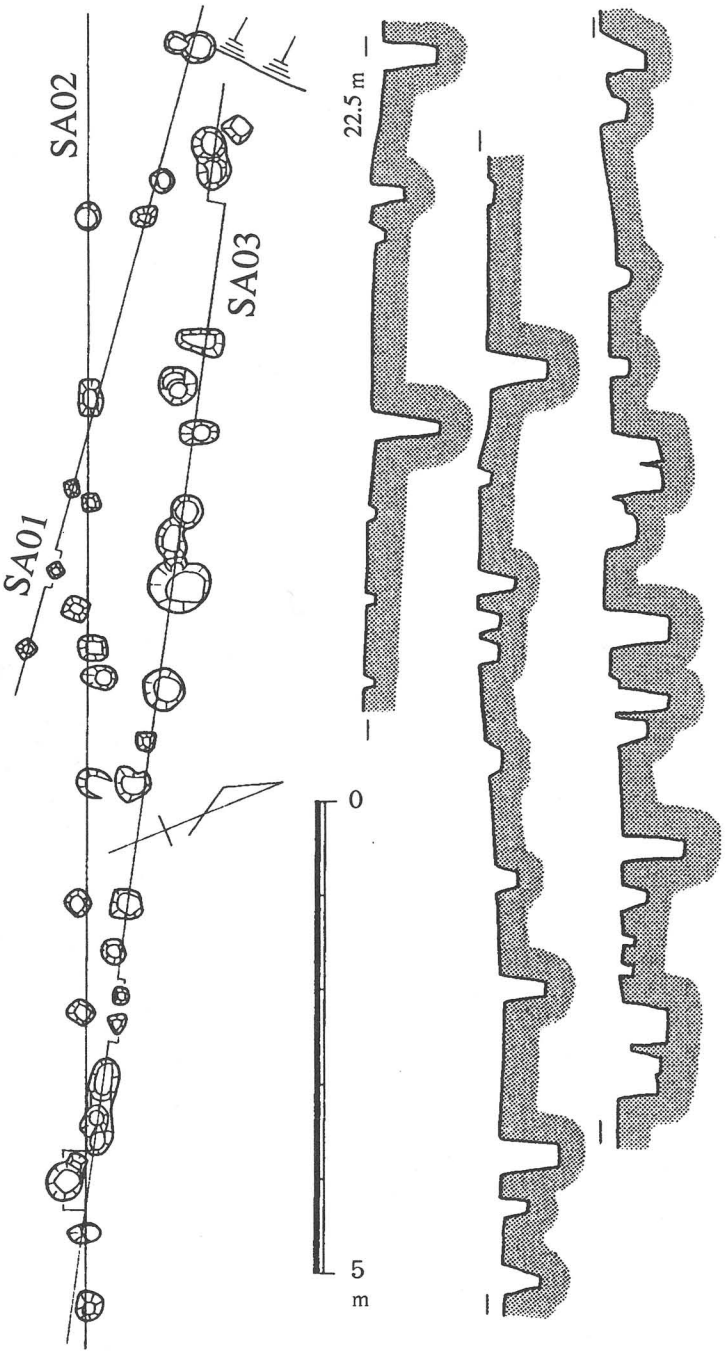
主軸方位はN－70°－Eとなっている。残存長11.4ｍを測る。柱穴列は、計13個の柱穴で構成され、個々の法量はＳＡ01と大差はない。

ＳＡ03は最も北側に位置するもので、主軸方位はN－60°－Eを測る。柱列は計17個で構成され、前述した2例より個々の法量は若干大きいことが目に着く。

出土遺物（第289図）

出土遺物は意外に少なく若干の陶磁器片と小柄の一部を得たにすぎない。

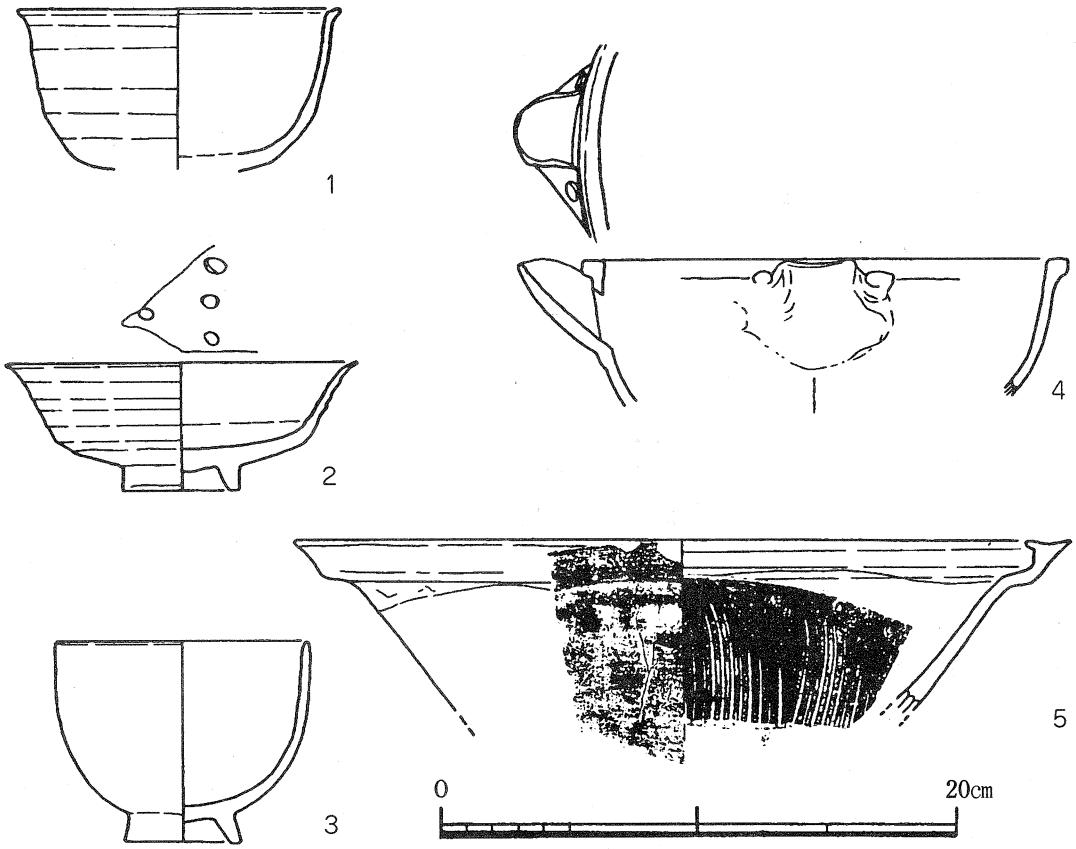
（1）は磁器の比較的大ぶりの碗で、口径16.7cmを測る。



第288図　ＳＡ０１～０３実測図

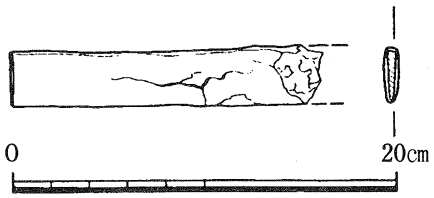
内外面に灰緑色の釉がかかる。15世紀代の輸入陶磁器である。（2）は磁器の皿で、高台はシャープに削り出され、口径14cmを測る。内外面ともに淡黄白色の釉がかかる、唐津系陶器である。見込面には「め跡」が4点認められた。

（3）陶器の碗で、口径10cm、高さ8cmを測る。身はゆるやかに弧を描いて立上り、全体に腰高とな



第289図　B区北側建物群内出土遺物実測図（1）

っている。(4) は陶製の片口で、口径19cmを測る。内外面全体に乳白色の釉がみられる。(5) は陶製のすり鉢で、口径30cmを測る。内外面とも明茶色を示し、良く焼締っいる。内面には10本を単位とする「おろしめ」がみられる。(第290図) は小柄の柄の一部で、残存長8cmを測る。銅製で、残存状態は悪く、装飾等は剥落している。本来刀剣の付属品となるものであるが、一般的に万能小刀として使用されたものと思われる。これらは、いずれも近世中葉から後葉に属すものと推定される。



第290図　B区北側建物群内出土遺物実測図（2）

第４節　Ｃ区の調査

（１）調査概要と出土遺物

はじめに

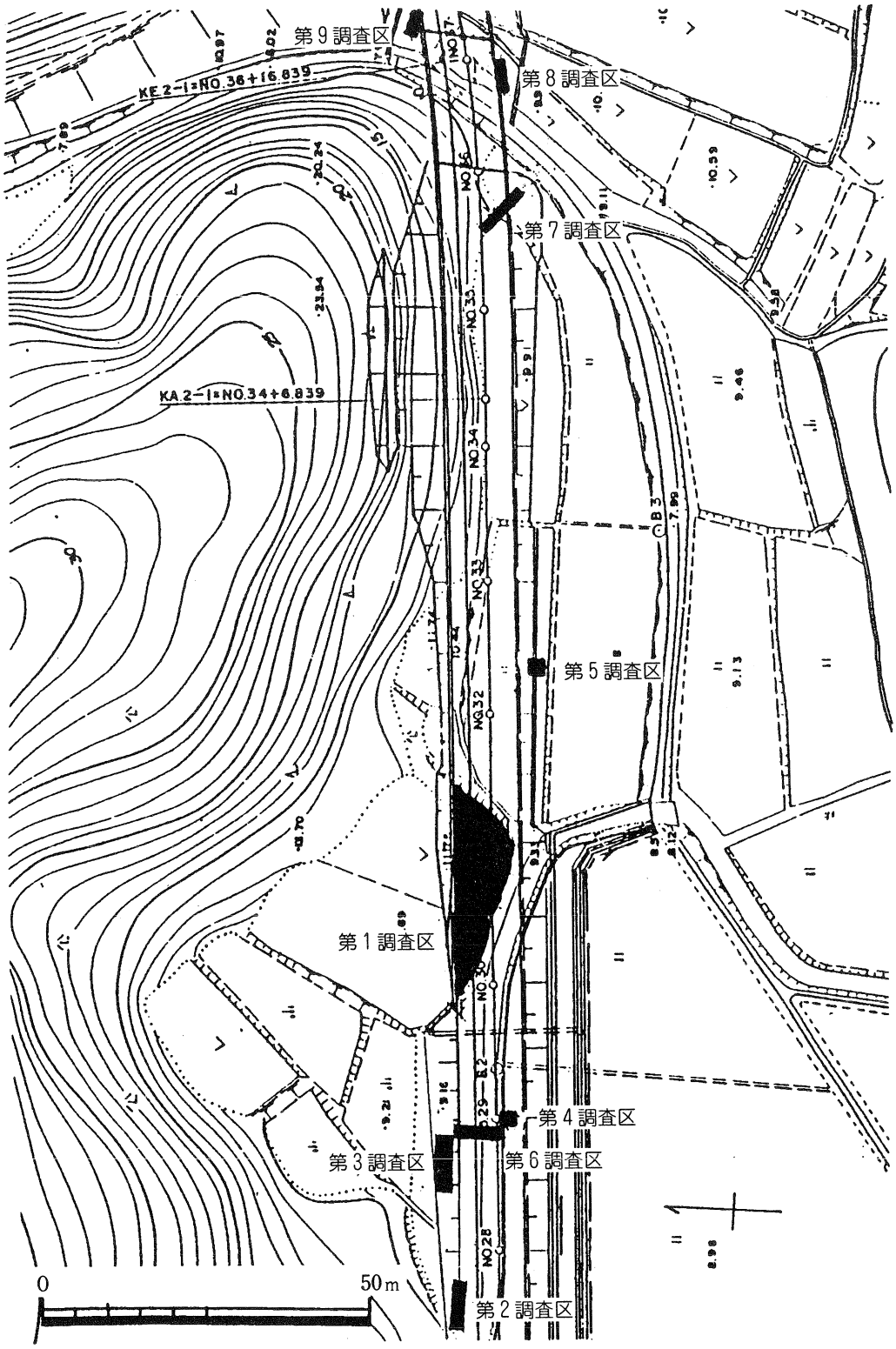
Ｃ区で遺構が検出された丘陵は、宇賀荘町字牧で、鎌倉時代末（元享２年ー１３２２）の創建である瑞塔山天長雲樹興聖禅寺（雲樹寺）の開基である牧新左衛門の居宅口承のある地域である。また、調査区の東側には、「千才」と呼ばれる池が存在し、鎌倉時代末の雲樹寺の創建に際して谷奥の丘陵を切り開いて池の水を尾根を隔てた隣の谷に流したとしていう口承で、その時の伝承として、この雲樹寺に関わる伝承として、大蛇伝説がある。これは、寺院創建時に今回のＡ調査区と雲樹寺の間にある切り通しを造った際、池に住む大蛇も水と一緒に出ていき、財力を有していた牧家は、没落してした、というものである。かなりの水を有する沼であったことを物語ることとして、時代は明確ではないが、雲樹寺から清井町の間は舟で往来していたという、口承も周辺にある。

以上のことから、２つの口承を確認するため、平成７年８月１７日から発掘調査を実施した。調査を実施にあたり、牧新左衛門の居宅口承のある丘陵部分で、現状では、竹林や畑となっており、斜面につては、陶磁器等の捨て場とされていた。畑に使用されていた部分に最初にトレンチを設定し調査を開始したが、その後、小さな柱穴らしいもの等が検出されたことから、９月１１日から、道路に伴う買収された範囲を機械を導入して発掘調査するに至った。池の口承調査等については、島根大学理学部徳岡隆夫教授の指導を受け、池の痕跡から解明するための調査区を設定した。調査区は、丘陵部分の第１調査区と水田部分に８カ所を２から９調査区と称して記述する。特に第２・３・４・５調査区は、徳岡教授の指導に基づき、設定して調査を実施した。

第１調査区

丘陵部分では、２基の地下式坑、井戸、柱穴群が検出された。特に２基の地下式坑は、地山の落盤しているため、土の色調が判然とせず、それが、地下式坑であると判断するのに、かなりの時間を要した。

１号地下式坑（第293・294図） 丘陵調査区のほぼ中央で検出された。道路予定で買収された部分と未買収部分のほぼ中央部分で分断されており、その関係で、半分しか調査はできなかった。しかも、ポールによる調査により、地表面から床面まで３３０㎝であり、これを掘り抜くと、調査壁が崩落する可能性が極めて高く、調査上から、一度は、床として使用されたと考えられる２００㎝の面部分までの調査で止めることとした。検出したのは、東西２７０㎝、南北１２０㎝の範囲であった。入り口と部屋との中央を主軸とするとほぼ磁北を主軸としている。この土坑には、当初柱穴と考えていたが、入り口も残されいた。この直径は７０㎝で斜めに部屋に続いていた。今回調査を止めた部分は、入り口の部分の土層からは、床として使用していたものと観察できる。そして、この



第291図　C区調査区配置

面でも、水を多量に含む土の状況である。内部からの出土遺物は、検出できなかった。

２号地下式坑（第295図） １号地下式坑の西方約３mの丘陵先端部分で検出された。全てが調査区の中に所在している。床面の規模は、東西２１０㎝、南北２６０㎝で、床面から残存している天井部分までの高さ１８０㎝である。主軸は、N-４０°-Eである。この入り口は、天井部の崩落時に、崩落したものと考えられる。入り口は、階段状の明確なものはないものの床面に近くなるごとに緩やかな傾斜となるよう掘られている。天井部が北側部分で僅かにのこっており、厚さが５０㎝である。床面には天井部がのこっていた時期に流れ込んだと考えられる粘質土が僅かに確認されており、その上部は全て崩落とその後の流れ込みである。従って、地下式坑は、土が流入しなように管入り口部分で方法は未詳であるが、管理がなされていたものと考えられる。調査で床面の流入した土を取った後には、浅く水がたまる状況である。

出土遺物は、坑中央の床面に倒立した状態で五輪塔の空・風輪部分が検出された。この五輪塔部分は、人為的に置かれたものというより、転がり落ちやや斜めに倒立した状況で停まったものと考えたい。

井戸

井戸は、丘陵の南側で検出された。地上での検出形は、円形で地表面に施設は検出できなかった。規模は、地上面での直径１２５㎝、深さ２２５㎝である。底部も円形を呈しており、直径５０㎝である。井戸は、廃棄のため、埋め土したものであり、その後、一度９０㎝位のところまで掘り、井戸として再利用した後その後は、自然に流入土により埋まったものと考えられる。

出土遺物は、２次堆積の土層から石臼が出土しているものの、明確な時代を決定する遺物は、検出することができなかった。

柱穴

柱穴と考えられるものは、総数５２検出された。柱穴からの出遺物はなく、時期的なことが明確ではないが、南側の柱穴は、丘陵中央部に較べ、低いため土を盛っているものと考えられる。そのため、地山と同様な色調をした土を削るとその下から褐色の覆土の柱穴が検出された。柱穴にも時期差があるものと考えられる。

（２）水田面の調査

水田面は、７カ所調査区を設定して、調査した。第１．２．３．４．５調査区は、地質調査の関係で設定した。第６．７調査区は、切り通しの関連調査で調査を実施した。

第２調査区は、長辺７．５ m、短辺１．５mのトレンチである。この部分は、近年の掘削によって造られた地形であることが、調査によって判明した。

第３調査区は、長辺８m、短辺２mのトレンチである。堆積した土がきれいに堆積しており、西側の山からの流れ込みの遺物が検出された。また、後で記述する池の痕跡が見える境となる部分であることが判明した。

第４調査区は、２m×２mの調査区で、８７㎝の部分に池の底部と考えられる細かな粘土層の堆積部分が検出された。

第５調査区は、２m×２mの調査区で、水田の耕作土の下は、黒色粘土層であり、堆積した土層であることは明白であり、土層中から、ある程度の水深を有する池に繁茂する菱の実が検出されてた。しかし、池の底部を現す土層は検出できなかった。

第６調査区は、６．７m×２mの調査区で、第２調査区と第３調査区を繋ぎ、第３調査区で明確となった池の底部がどのように続くかあるいはおわるのか明確にするため、設定した。この調査区により、池の所在した西側の範囲と池の下から検出された陶器によって少なくとも、検出された底部は中世の雲樹寺創建まで遡ることはないことが明確となった。詳細は、山陰地域研究１２に譲る。(注)

第７調査区は、切り通しの確認調査のため、長辺８m、短辺１mの調査区を設定して調査を実施した。明確な痕跡を確認することはできなかった。

第８調査区も同様に、切り通しの確認調査のため、長辺５m、短辺１mの調査区を設定して調査を実施した。しかし、明確な痕跡を確認することはできなかった。

第９調査区からは、切り通しの北側の肩部を確認した。長辺３m、短辺１mの調査区を設定して調査を実施した。ここからは南部分の100㎝の部分で確認できた。昭和４０年代に切り通しの改修があり、その部分の掘り下げがなされたとのことであるが、土層に状況から当初のものと考えられる。

（注）徳岡隆夫等　１９９６年「安来市雲樹寺、『千才池』伝承の検討」

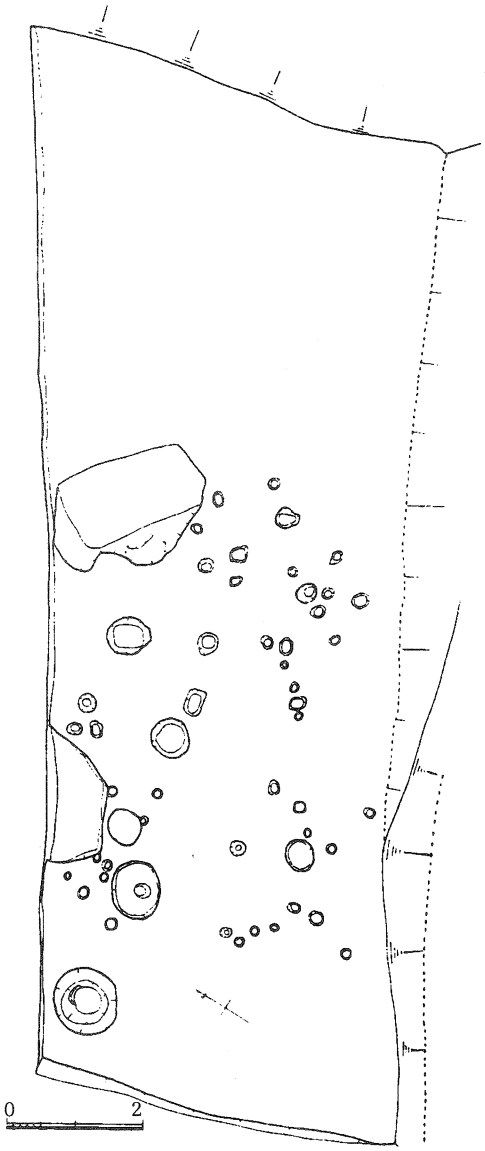
遺物ついて

五輪塔片（第296図１）

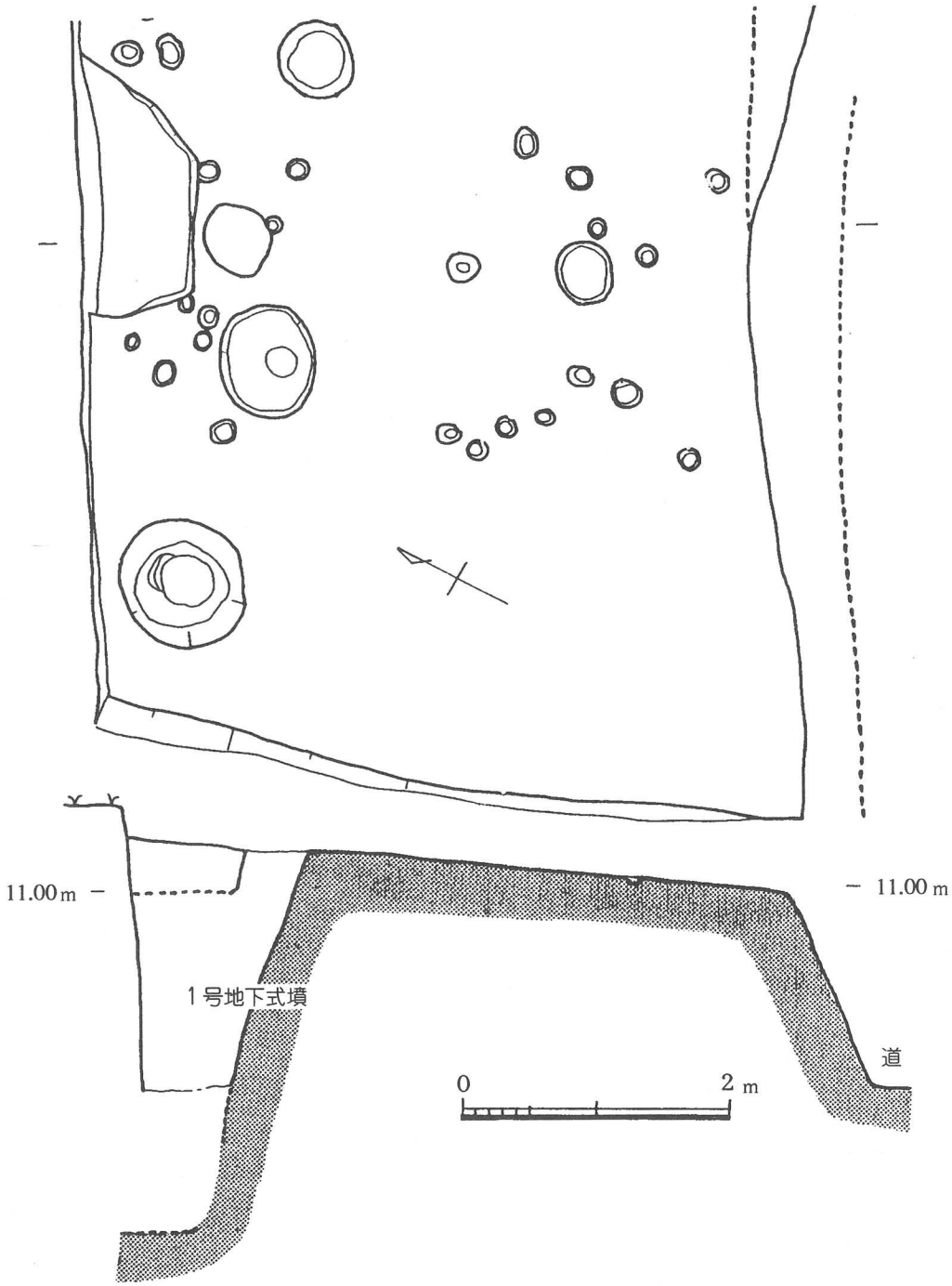
第１竪穴土坑の中央の床面から倒立した状態で出土し淡灰色を呈する凝灰岩製の石彫物である。この五輪塔片には、風輪の上部分に稜線がある、塔空・風輪の断面が楕円形に造られている等の特徴がある。風輪の上部分に稜線で長径１７㎝、短径１３㎝である。総長は、火輪へ差し込む為造られた出っ張りの１．５㎝を含めて２０㎝である。風輪の頂上部分は僅かに尖っている。梵字は施されていなく、塔空と風輪部分も浅いV字の沈線で画している等、粗雑に製作されている感がある。これは、（第２８７図２）と類似する。

石臼（第296図２）

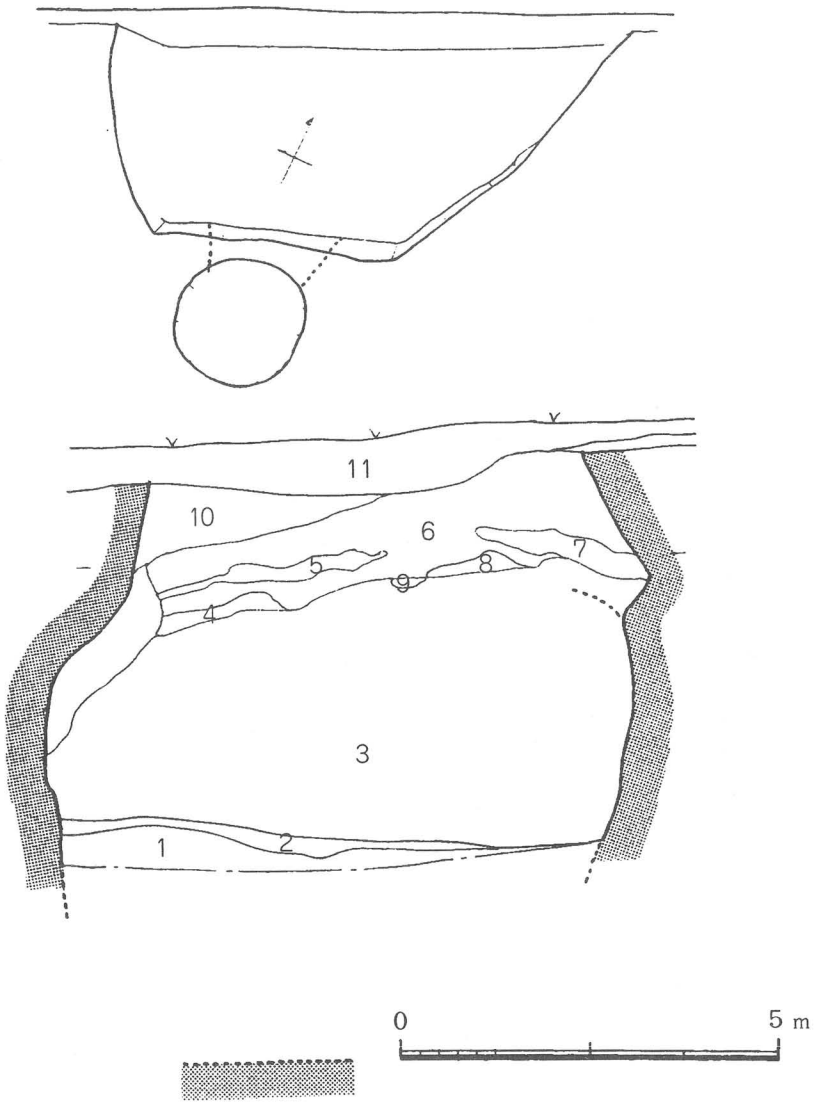
井戸から出土した石臼は、淡褐色を呈する凝灰岩製である。石臼は二つの石を重ね合わせて穀物を粉にしたりするために使用したのもので、出土したものは、石臼の上部分の石である。それは、穀物を下の石と摺り合わせるために、落とす穴や回る為に木の軸を差し込んだと考えられる穴もあることから判断された。その上面は、穀物が回している時に落ちないよう周辺部分が高くなっている。下面は、ほぼ平面であり、使用にされていたための摩滅が確認できる。直径３０㎝位の石臼と考えられ、石臼の外側端部の厚さ９㎝、中央部分の厚さ６．５㎝である。



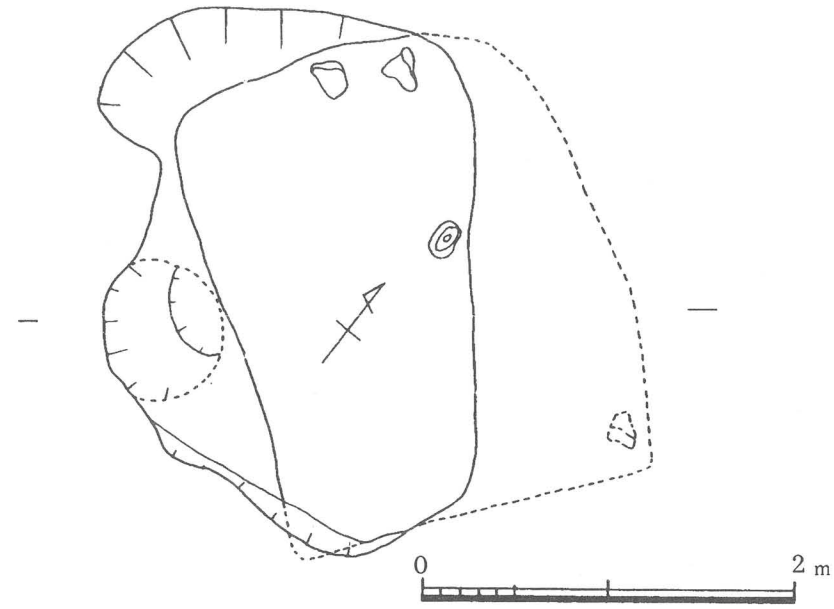
第292図　Ｃ区検出遺構分布図

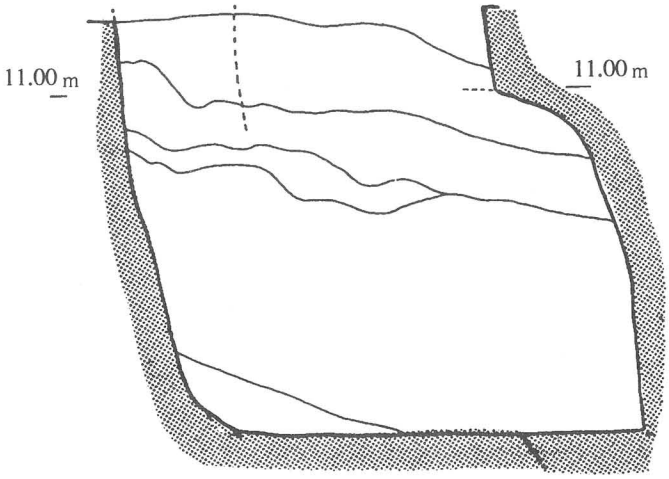


第293図　C区1号地下式土坑周辺図

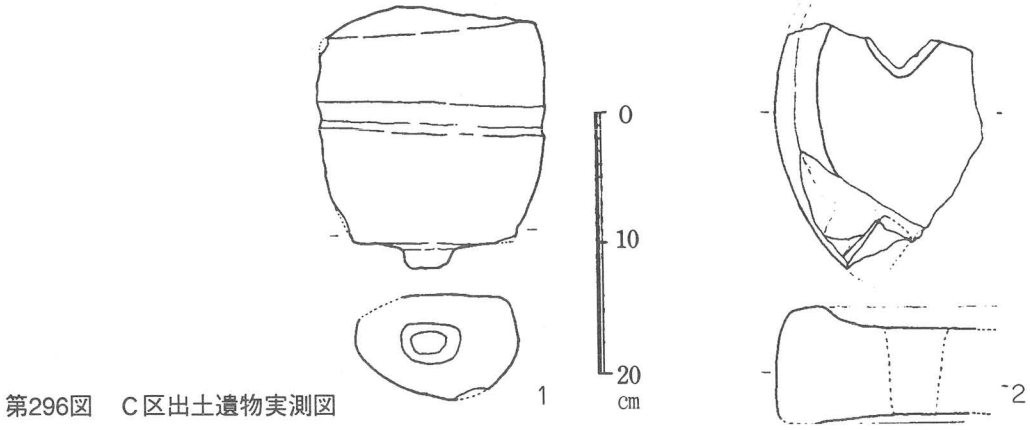


第294図　C区１号地下式土坑実測図





第295図　C区2号地下式土坑実測図



第296図　C区出土遺物実測図

安来市大日堂遺跡近世墓から検出された人骨の概要

鳥取大学医学部解剖学第二講座

井上貴央、影岡優子、土井浩二、亀崎豊美

1.はじめに

本報告は安来市大日堂遺跡近世墓から検出された人骨の概要を報告するものである。総数82体に及ぶ人骨が検出され、学術的価値が高いが、紙面の制約からその概要を述べるにとどめる。

2.近世墓の人骨の概要

東28号墓　骨の保存状態は非常に悪く、骨片と歯牙のみ検出されている。検出された歯牙は21本で、風化によって歯根は破損し、ほとんどが歯冠のみとなっている。これらの咬耗度はMartinの0度であるため、この個体は若年者であったことが推察される。

東42号墓　前頭骨、左右頭頂骨、後頭骨、右側頭骨、左錐体、上顎骨が検出されている。三主縫合は内板では閉鎖しているが、外板では一部閉鎖している。乳様突起と外後頭隆起はよく発達している。熟年後半男性のものと考えられる。

東43号墓　頭蓋骨は右側頭部を欠くのみで、ほぼ完形である。前頭部は膨隆しており、眉弓・眉間は著明でなく乳様突起も小さい。三主縫合は、内板では冠状縫合の一部は癒合閉鎖しているが、残りは未閉鎖で、外板はいずれも未閉鎖である。上顎歯は残りが少ないが、咬耗度はMartinの1～3度である。下顎歯の咬耗度はMartinの0～3度である。壮年女性と考えられる。

東44号墓　後頭骨、左右側頭骨の一部、上顎骨、下顎骨その他細片化した頭骨が検出されている。三主縫合の矢状縫合、人字縫合は内板は癒合閉鎖をきたしており、外板では未閉鎖である。上顎、下顎ともに歯牙は一部釘植しており、咬耗度は Martin の3度である。下顎は頑強である。また外後頭隆起は軽度に発達し、乳様突起は中等度に発達している。熟年男性のものと考えられる。

東45号墓　検出されているのは、左右の寛骨片、大腿骨、脛骨片、頭蓋骨片のみである。寛骨片の耳状面は凹凸が多く、妊娠溝が認められる。大坐骨切痕は破損しているものの広いようである。成人女性骨である可能性が高い。

東46号墓　頭蓋は顔面頭蓋、左右側頭骨、右頭頂骨の一部が残存しているが、ほかは細片化している。三主縫合は内板が閉鎖しており、外板も閉鎖が進んでいる。前頭縫合の残存が認められる。頭蓋骨は全体的に大きい。歯牙の咬耗はMartinの1～2度で、四肢骨は頑丈である。本人骨は壮年後半～熟年の男性骨と考えられる。右下位肋骨が癒合をきたしている。

東48号墓　頭蓋骨は破損が大きいが、右側頭骨、左右頭蓋骨片、前頭骨、後頭骨片が残存している。

前頭部は膨隆しており、眉弓と眉間の突出は認められない。乳様突起も小さい。内板の縫合は部分的に癒合しているが、まだ残存している。外板も癒合が進行しているようである。歯牙はMartinの2度である。壮年後半の女性であると考えられる。

東49号墓　頭部は右側頭部の一部を欠いているがほぼ完形である。前頭部の膨隆は著明で、眉弓眉間も軽度に突出しており、乳様突起はよく発達している。三主縫合は内板・外板ともに未閉鎖である。口蓋縫合では切歯縫合は閉鎖しており、横口蓋縫合は外側部が閉鎖している。頬骨弓は非常に薄く、細い。歯牙の咬耗度はMartinの1～2度で歯式は以下の通りである。壮年女性と考えられる。

東50号墓　前頭骨、左右頭頂骨、後頭骨、左右側頭骨、上顎骨が検出されている。三主縫合は内板では癒合閉鎖をきたしているが、外板では未閉鎖である。上顎歯は左第3大臼歯を除いてすべて釘植しており、歯牙の咬耗度は Martin の1度である。項面のレリーフは粗造であるが乳様突起は小さく、また、寛骨の大坐骨切痕が大きい。青年後半～壮年前半女性のものと考えられる。

東51号墓　頭蓋骨は顔面頭蓋と左右の側頭骨と左右の頭頂骨が検出されている。前頭部は膨隆しており、眉弓は軽度に発達している。乳様突起は小さく、頬骨弓は薄い。

三主縫合は内板では閉鎖しており、外板では未閉鎖であるが癒合は進行している。頭蓋骨内には、矢状縫合の両側に直径5mm～8mmの陥凹が数個認められた。上顎の歯槽はすべて閉鎖し、下顎には3本の歯牙が釘植しているのみである。両側犬歯に楔状欠損が認められる。胸椎～腰椎の一部に癒合が認められる。熟年前半の女性と思われる。

東52号墓　頭蓋骨は完形である。前頭部は膨隆しており、眉弓と眉間はよく突出している。乳様突起も大きく、項面のレリーフは粗造である。三主縫合は内板では閉鎖しており、外板でも人字縫合の外下部を除けば閉鎖している。上顎の歯槽はすべて閉鎖しており、下顎は右犬歯、左右の第1・第2小臼歯が残存しているのみで、ほかはすべて閉鎖している。老年男性であると思われる。

東53号墓　頭蓋は顔面部～前頭部、右側頭部、頭蓋底を欠く。三主縫合の外板は未閉鎖であるが内板は癒合閉鎖が進んでいる。乳様突起は中等度に発達し、項面のレリーフも著明である。上・下顎は検出されていない。上肢骨や脊柱は残っていないが、寛骨以下の主要下肢骨は検出されている。寛骨の大坐骨切痕は大きく、大腿骨、脛骨は華奢である。人骨は表土から比較的浅いところに埋葬されていたようである。埋葬時は頭を南に置き、体幹を北北東方向に向け、両膝関節を折り曲げて大腿部を胸部近くまで曲げた姿勢で埋葬されていたものと考えられる。熟年女性と推察される。

東54号墓　顔面頭蓋と左右側頭骨が検出されている。冠状縫合の内板は癒合閉鎖をきたし、外板も随分癒合閉鎖が進んでいる。骨口蓋の切歯縫合と横口蓋縫合外側部は消失している。眉弓が突出しているが、前頭部の膨隆は著明で骨質も薄い。大坐骨切痕は大きく、熟年女性と考えられる。

中14号墓　前頭骨の一部、右頬骨、右側頭骨の一部が検出されている。冠状縫合、矢状縫合の内板

は、一部が癒合閉鎖しているが外板は閉鎖していない。歯牙の咬耗は Martin の1度である。眉弓、眉間隆起は発達が悪いが、総合的に判断して青年後半～壮年後半の男性骨と考えられる。

中15号墓　左側頭骨と左蝶形骨の一部、左頭頂骨の一部、右錐体が検出されている。

人字縫合は内板・外板ともに癒合閉鎖している。乳様突起は発達している。熟年～老年の男性と推定される。

中16号墓　頭蓋骨は破損しているが、ほぼすべての部分が残存している。前頭部は膨隆が小さく、眉弓と眉間は中等度に発達している。乳様突起は破損しているが、よく発達しているようである。三主縫合は冠状縫合の内板は癒合閉鎖が進んでいるが、ほかの縫合は閉鎖したばかりである。歯の咬耗度はMartinの1～2度である。壮年前半の男性と考えられる。

中17号墓　頭蓋はほぼ完形である。三主縫合の内板では冠状縫合が癒合閉鎖しており、矢状縫合、人字縫合は部分的に閉鎖している。外板は未閉鎖である。上顎歯は数本検出されている。上顎歯の大部分とすべての下顎歯は脱落し、歯槽は閉鎖している。

眉弓、眉間隆起は著明で、乳様突起や外後頭隆起は発達しており、項面のレリーフも粗造である。壮年後半～熟年前半の男性と考えられる。

中18号墓　頭蓋骨は断片化しており、前頭骨、後頭骨、左右側頭骨、頭頂骨の一部、左頬骨が検出されている。骨は重厚で、前頭部はなだらかに頭頂部に続いており、眉弓と眉間は非常によく発達している。乳様突起も大きい。残存している縫合をみると、人字縫合では内板は癒合閉鎖をきたしており、外板も癒合がかなり進行している。

歯牙は下顎歯のみが検出されており、咬耗度はMartinの3度である。熟年男性と考えられる。

中20号墓　後頭骨、右頭頂骨、右側頭骨、前頭骨の一部、右上顎骨、下顎骨が検出されている。上顎骨、下顎骨に一部の歯牙が釘植し、歯牙の咬耗は Martin の2～3度である。三主縫合はいずれも内板は閉鎖しているが外板は未閉鎖である。眉弓、眉間の隆起は軽度に発達している。外後頭隆起はよく発達しており、乳様突起も中等度に発達している。下顎骨も大きい。壮年の男性と推察される。

西2号墓

上：頭蓋骨は後頭骨、左右側頭骨、上顎骨、下顎骨などの一部が検出されている。三主縫合は人字縫合の一部が検出されており、内板は消失、外板は縫合閉鎖をきたしている。歯牙は上顎骨で5本、下顎骨で6本釘植しており、一部ではエナメル質減形成が認められる。咬耗度はMartinの3～4度である。乳様突起は中等度に発達しており、外後頭隆起は突出している。熟年男性と考えられる。

下：骨の保存状態は悪く、残存している骨は少ない。頭蓋骨も破損が大きいが、前頭骨片、頭頂骨片、左右側頭骨片および下顎骨が検出されている。残存している冠状縫合は内板が消失し、外板は癒合閉鎖が進行している。また眉弓と眉間の突出はほとんどなく、下顎骨では切歯と犬歯以外の歯

槽は閉鎖し、退縮している。検出された寛骨は大坐骨切痕が大きく、熟年女性と考えられる。

西4号墓　後頭骨、左右側頭骨、上顎骨などの一部と下顎骨などが検出されている。

三主縫合は内板・外板ともに閉鎖している。歯牙は上顎骨、下顎骨に1本ずつ釘植しており、咬耗度はMartinの3度である。乳様突起は大きく、外後頭隆起は突出しており、項面のレリーフは粗造である。熟年男性と推察される。

西5号墓　頭蓋骨は顔面頭蓋と左右側頭骨、後頭骨などが検出されている。前頭骨の前頭部は膨隆している。また眉弓と眉間の発達は中等度である。乳様突起は大きい。

骨は重厚で、項面のレリーフは粗造である。三主縫合の内板は消失しており、外板では縫合線は残っているものの、癒合はかなり進行しているようである。また外板においては、前頭縫合の遺存が若干認められる。歯牙の咬耗度はMartinの3～4度である。

熟年男性と考えられる。

西6号墓　右頭頂骨、左右錐体、後頭骨、頭骨片が検出されている。全体的な印象から女性骨をうかがわせる。年齢は特定できない。

西8号墓　頭蓋骨は底部が欠損しているが、ほぼ完形である。眉弓と眉間は突出しており、前頭結節が膨隆している。乳様突起はよく発達している。三主縫合では冠状縫合の内板はほぼ消失しており、外板では癒合が進行している。矢状縫合と人字縫合の内板は閉鎖が進行しており、外板は未閉鎖である。また、切歯縫合と横口蓋縫合は消失している。歯牙の咬耗度はMartinの3度である。寛骨の大坐骨切痕は小さく、壮年後半～熟年前半の男性骨と推察される。

西10号墓　顔面頭蓋と前頭骨、右頭頂骨、左右側頭骨とほぼ完形の下顎骨が検出されている。冠状縫合、矢状縫合は内板は癒合閉鎖をきたし、外板も閉鎖が進んでいる。

乳様突起は中等度に発達している。眉間隆起と眉弓も軽度に膨隆している。また、下顎骨も大きい。歯牙にはエナメル質減形成が認められ、咬耗は Martin の1～2度である。上顎には右側切歯、右第2・第3大臼歯、左第3大臼歯を除く歯牙が釘植している。下顎歯は左右第3大臼歯、左第1小臼歯以外はすべて検出されている。壮年後半で、性別は男性をうかがわせるが確言できない。

西13号墓　頭蓋骨は細片化しているが、乳様突起は発達している。冠状縫合の外板は未閉鎖であるが、内板は閉鎖している。歯牙の咬耗度はMartinの3～4度である。大腿骨は太いが骨皮質は薄い。年齢は熟年後半～老年と推察される。性別は女性をうかがわせるが確言できない。

西15号墓　骨の保存状態は極めて悪く、頭蓋骨片、大腿骨片と指骨のみ検出された。

これらの骨は成人骨であることは確かだが、詳細は不明である。

西16号墓　左右錐体と頭蓋骨片、歯牙片が検出されているのみである。歯牙は歯根が未完成である。15歳程度の個体と推定される。

西17号墓　頭蓋骨と長幹骨片のみ検出されており、頭蓋骨片は非常に薄くて小さく、前頭骨片には前頭縫合が認められる。乳児骨と考えられる。

西18号墓　頭蓋は細片化している。上顎の骨口蓋の切歯縫合と横口蓋縫合外側部は一部消失しており、上顎歯、下顎歯ともに咬耗度は Martin の2～3度である。下顎骨は頑強である。壮年後半～熟年前半の男性と思われる。

西19号墓　左側頭骨、右錐体、後頭骨、その他頭蓋骨片が検出されている。三主縫合は内板は癒合閉鎖、外板は一部で癒合閉鎖をきたしている。乳様突起は発達しており、後頭隆起も著明で、熟年男性骨と考えられる。

西21号墓　頭蓋骨は頭頂骨片が検出されているのみである。この骨質は薄く、また検出された大腿骨は華奢であり女性をうかがわせる。歯牙も歯冠部分のみが5点程出土しており、咬耗度はMartinの2度である。年齢は壮年～熟年と考えられる。

西23号墓　骨の保存状態が非常に悪く、骨片が数個検出されただけである。頭蓋骨は側頭骨と後頭骨部分の骨片しか存在していない。この骨が成人骨であることは確かだが、詳細は不明である。

西25号墓　頭蓋骨は左右の側頭骨、上顎骨の一部、頭蓋底部を欠くが、残りはほぼ完形である。前頭部の膨隆は著明で、眉弓と眉間の突出は発達していない。三主縫合の内板と外板は、すべて閉鎖している。歯牙の咬耗度は1～2度である。熟年女性と考えられる。

西27号墓　骨の保存状態が非常に悪く、残存している頭蓋骨は側頭骨片と上顎骨片のみである。また、側頭部の内板には直径1cm程の陥凹が認められる。歯牙の咬耗度はMartinの1～2度である。骨の厚さが薄く女性骨をうかがわせるが確言できない。年齢は壮年～熟年と考えられる。

西29号墓　頭蓋骨は前頭骨の右側の一部を欠くが、ほかは完形である。前頭部は膨隆せず、眉弓は軽度、眉間は著明に突出している。乳様突起は中等度に発達し、後面のレリーフは粗造である。三主縫合の内板はいずれも閉鎖しているが、外板では未閉鎖の部分もある。歯牙は8本検出され、咬耗度はMartinの2～3度である。エナメル質減形成が認められる。熟年後半～老年男性と考えられる。

西31号墓　顔面頭蓋、前頭骨、後頭骨、左右側頭骨、左右頭頂骨片が検出されている。

冠状縫合は内板・外板ともに癒合閉鎖している。人字縫合では内板は完全に閉鎖し、外板も一部を除いて癒合している。切歯縫合、横口蓋縫合外側部、正中口蓋縫合口蓋骨部も一部閉鎖している。

乳様突起は良く発達しており、外後頭隆起も突出し、項面のレリーフは粗造である。眉弓も軽度突出している。大坐骨切痕は狭い。熟年男性と考えられる。

西33号墓　頭蓋骨では下顎骨の一部と歯牙が検出されているのみである。歯牙は9点検出されているが咬耗が進んでおり（Martin 2～3度）、熟年程度の個体と思われる。下肢骨では左大腿骨と脛骨が検出されている。年齢は熟年程度と考えられる。性別は下肢骨の太さから女性をうかがわせるが、

確言できない。

西34号墓　左側頭骨の一部、その他頭蓋骨片、上顎骨片、長幹骨片、左鎖骨片、左肩甲骨片と歯根が未完成の永久歯を含む歯牙が33本検出された。歯牙の咬耗度はMartinの1度で、歯根の形成状況から10～13歳頃の小児であると考えられる。

西37号墓　頭蓋骨は細片化しており、その特徴をうかがい知ることはできない。四肢骨の破損も大きいが、下肢骨は太くて頑丈で筋の付着面が非常に発達している。成人男性骨と考えられる。

西38号墓　骨片と歯牙4本が検出されているのみで、歯牙は乳臼歯2本と永久歯の大臼歯が2本である。第1大臼歯の歯根の石灰化状況から、本人骨は5～7歳の小児骨と推察される。

西39号墓　頭蓋骨は、右側は側頭骨の一部を残し欠落している。上顎及び左右頬骨を欠く。三主縫合は外板、内板ともに閉鎖しており、年齢は老年と思われる。乳様突起は欠損していて認められないが、骨質は薄く、前頭の膨隆は著明であることから判断して、女性の頭蓋であると推定される。下顎は左右後部を欠く。すべての歯牙は脱落し、歯槽は閉鎖をきたしている。

西41号墓

上：頭蓋骨は左頭頂部、頬骨、右頭頂部及び後頭部の一部が欠損しているが、ほかは残存している。骨は重厚で頑強である。前頭部はなだらかで、眉弓と眉間は良く発達している。乳様突起も大きく、項面のレリーフも粗造である。冠状縫合と人字縫合は一部が確認できるのみであるが、内板は閉鎖しており、外板も閉鎖がほぼ完了している。歯牙は2本のみ検出されており、咬耗度はMartinの2度である。寛骨の大坐骨切痕は小さい。熟年後半～老年の男性と考えられる。

下：頭蓋底部は残存しているが、その他は細片化している。乳様突起は小さく、項面のレリーフは比較的粗造である。切歯縫合は消失しており、歯牙の咬耗度はMartinの2～3度である。また、歯にはエナメル質減形成が認められる。四肢骨は保存が悪く破損が大きいが、華奢である。総合的に判断して、熟年女性ではないかと考えられるが、確言できない。

西43号墓　頭蓋骨は破損が大きい。乳様突起は小さく、眉弓も発達していない。骨質は薄く、全体的に頭蓋の大きさが小さい。三主縫合は内板、外板ともに未閉鎖である。歯牙の咬耗度はMartinの1～2度である。寛骨の大坐骨切痕は大きく、壮年前半の女性と考えられる。

西44号墓　頭蓋骨は細片化している。乳様突起は小さい。矢状縫合の内板は消失しており、外板も閉鎖が進行している。上顎歯の咬耗度はMartinの3度で、下顎骨の歯槽は、一部を除いてすべて閉鎖している。熟年の個体で、性別は女性をうかがわせるが確言できない。

西45号墓　頭蓋骨は後頭骨を除き、ほぼ完形である。全体的に大きく、眉弓、眉間の発達もよい。前頭部の膨隆は著明ではない。乳様突起は中等度に発達している。三主縫合は内板はすべて閉鎖している。外板では矢状縫合がほぼ閉鎖している。歯牙は第3大臼歯以外は揃っており、咬耗度は

Martinの3度である。熟年前半の男性と思われる。

西46号墓　前頭骨、左右頭頂骨、右側頭骨、左錐体が検出されている。遊離歯も多数検出されている。三主縫合の内板、外板は閉鎖しかけている。前頭部は膨隆し、骨質は薄い。歯牙には軽度のエナメル質減形成が認められる。歯牙の咬耗度は Martin の1度である。壮年女性と推察される。

西47号墓　顔面頭蓋は形を保って残存しているが、脳頭蓋部分の骨は、左右側頭骨を除いて細片化している。全体的に華奢で、前頭部の膨隆や眉弓と眉間の突出は中等度である。乳様突起は小さい。冠状縫合の内板は閉鎖しかけており、外板は未閉鎖である。歯牙の残存は悪く、歯槽が閉鎖している部分も多い。壮年女性と思われる。

そのほか小児のものと思われる前頭骨と歯牙が検出されており、歯牙は乳臼歯1本と永久歯の歯冠が5個検出されている。

西48号墓　左大腿骨、左脛骨、左腓骨、上腕骨が残存しているのみで、大腿骨の粗線や粗面は比較的発達している。歯牙は4本検出されており、咬耗度はMartinの3～4度で、エナメル質減形成が認められる。骨は熟年～老年の骨であると考えられるが、性別は特定できない。

西49号墓　頭蓋の後頭部と底部を除いてほとんど検出されている。冠状縫合の内板は閉鎖し、外板は閉鎖が進んでいる。矢状縫合の内板は一部閉鎖し、外板は癒合は進んでいるが未閉鎖である。

乳様突起は小さい。歯牙にはエナメル質減形成が認められ、咬耗度はMartinの2～3度である。熟年女性と推定される。

西50号墓　骨の保存状態は悪く、頭蓋骨は細片化している。冠状縫合は内・外板ともに閉鎖している。眉弓の発達は悪く、骨質は薄い。下顎骨は歯牙が脱落し歯槽が吸収閉鎖している。下肢骨は華奢で熟年～老年の女性骨と推察される。

西51号墓　頭蓋は左側頭部を欠くが、ほかはほぼ完存している。三主縫合は、内板は閉鎖をきたしているが、外板は一部が未癒合の状態である。乳様突起と眉弓と眉間の膨隆は中等度で、外後頭隆起は突出し、項面のレリーフはやや粗造である。前頭部は膨隆していない。歯牙の咬耗は Martin の2～3度である。大坐骨切痕は大きく、第1肋骨には骨化が認められた。熟年女性と推定される。

西52号墓　頭蓋骨は破損しているが、前頭骨、側頭骨片、上顎骨が残存している。前頭部は膨隆し、乳様突起は小さく、眉弓は発達しない。縫合は口蓋縫合が確認できるのみである。歯牙はあまり咬耗していない（Martin 1～2度）。第3大臼歯は萌出している。大坐骨切痕は大きく、壮年後半の女性と推察される。

西53号墓　頭骨は細片化しており、右側頭骨、前頭骨、頭頂骨などが検出されている。三主縫合の内板は閉鎖しており、外板は未閉鎖である。前頭部の膨隆は著明で、乳様突起は中等度に発達している。下顎歯は左第1小臼歯、左第1、第2大臼歯が釘植しており、上顎は左第1、第2小臼歯、左第1

大臼歯が上顎片に釘植して検出されているが、そのほかは遊離歯として検出されている。エナメル質減形成が認められる。歯牙の咬耗度はMartinの2～3度である。大腿骨や上肢骨は太いが短い。筋の付着する粗面は粗造である。壮年後半の女性と推察される。

西54号墓　骨の保存状態は悪く、大腿骨と前頭骨片、側頭骨片しか検出されていない。前頭部は比較的膨隆しており、眉弓と眉間も軽度に発達している。冠状縫合の内板は完全に閉鎖している。外板でもかなり癒合が進行している。歯牙は大臼歯4点、小臼歯1点が検出されており、咬耗度はMartinの2～3度である。頭蓋骨内面には直径5mm程の陥凹が認められた。壮年後半～熟年女性と考えられる。

西56号墓　前頭骨、右側頭骨、左錐体、左右頭頂骨などが検出されている。

三主縫合は内板、外板ともに癒合閉鎖をきたしている。また、乳様突起は中等度に発達し、外後頭隆起も発達しており、熟年男性の個体ではないかと思われる。

西57号墓　検出人骨は少なく、頭蓋骨は細片化している。前頭部は膨隆しており、眉弓は平坦である。乳様突起は小さい。冠状縫合の内板は閉鎖が進行しているが、外板は未閉鎖である。歯牙の咬耗度はMartinの1～2度である。下顎歯にはエナメル質減形成が認められる。壮年女性と考えられる。

西58号墓　骨の保存状態は非常に悪く、ほとんど残存していない。頭蓋骨は後頭骨片、側頭骨片などが検出されたのみである。成人骨であるのは確かだが、性別は特定できない。

西59号墓　大腿骨片と寛骨片が検出されているのみで、詳細をうかがい知ることはできない。成人骨であることは確かである。

西61号墓　前頭骨、左右側頭骨、下顎骨と細片化した頭骨が検出されている。冠状縫合の内板は消失しており、外板ではほぼ閉鎖をきたしている。矢状縫合と人字縫合では内板は閉鎖しているが、外板は未閉鎖である。眉弓と眉間の隆起は著明であり、乳様突起も発達している。下顎骨も大きく、頑強である。歯牙の咬耗度はMartinの3～4度である。この個体は熟年男性と思われる。

上記の個体とは別に、さらに一体分の頭蓋骨が検出されている。右側頭骨片、頭頂骨片など細片化した骨のみ数点と下顎骨が検出されている。下顎歯の咬耗度はMartinの3～4度である。残存している縫合を見る限り、内板は外板とともに閉鎖が進んでいる。熟年の個体と考えられるが、性別は特定できない。

西62号墓　前頭骨と右側頭骨片、下顎のみ検出されている。冠状縫合は内板は癒合閉鎖をきたしているが、外板は一部閉鎖している。前頭部の膨隆は著明で、四肢骨も細くて短い。下顎骨は小さく、歯牙にはエナメル質減形成が認められ、咬耗度は2～3度である。熟年後半の女性であると思われる。

西63号墓　骨片と歯牙のみ検出されており、小児と思われる頭蓋骨片が検出されている。乳臼歯が存在し、永久歯の歯冠は完成している。小児骨であると推察される。

西64号墓　左半分を欠く脳頭蓋と左錐体が検出されている。三主縫合はいずれも内板は閉鎖しており、外板は人字縫合ではまだ閉鎖していない。乳様突起はよく発達しており、眉弓と眉間の膨隆も著明で、下顎は大きい。歯の咬耗はMartinの2～3度である。熟年後半～老年男性と思われる。

西66号墓　頭蓋骨は前頭骨、左右頭頂骨、後頭骨の一部と左右側頭骨片が検出されている。
前頭部は膨隆しており、眉弓と眉間は発達していない。三主縫合は内板ではすべて消失している。外板も癒合が進行していて、ほぼ閉鎖しかけている。前頭縫合の残存が認められる。熟年女性と考えられる。

西67号墓　前頭骨、左右頭頂骨、後頭骨と左右側頭骨片が検出されている。前頭部の膨隆はほとんどなく、眉弓は軽度に発達している。三主縫合の内板はすべて消失しており、外板もほぼ消失している。熟年後半～老年男性と考えられる。

西68号墓　歯牙が5本検出されており、咬耗度はMartinの1～3度である。本人骨は成人骨であるが、年齢、性別は特定できない。

西69号墓　左右大腿骨、左右脛骨、上腕骨の一部が検出されている。骨は頑丈で大きく、男性骨をうかがわせる。成人男性と推測される。

西70号墓　上顎骨と下顎骨の一部が検出されている。歯牙も3本検出され、咬耗度は2～3度である。大腿骨は小さく女性骨と思われる。年齢は壮年～熟年としておく。

西71号墓　頭蓋は左側頭骨、前頭骨片、頭頂骨片、上顎骨片が認められるものの、破損が大きい。冠状縫合と矢状縫合の外板は未閉鎖であるが、内板では閉鎖している。
下顎骨は左右の一部が検出されており、若干の歯牙が釘植している。左第2大臼歯以降の歯槽は吸収閉鎖をきたしている。下顎骨は重厚である。歯牙の咬耗はMartin の2～3度である。上顎歯は右側では中切歯、側切歯、犬歯が、左側では中切歯と犬歯が残存している。左右の中切歯の近心側にはV字形の異常咬耗が認められ、また左右の側切歯にも異常咬耗が認められる。壮年後半の男性と推定される。

西72号墓　頭蓋骨は左右錐体、上顎骨、前頭骨、左右頭頂骨の一部、後頭骨片が検出されている。冠状縫合と矢状縫合の一部の内板は閉鎖し、外板も閉鎖が進行している。上顎歯牙が9本、下顎歯が8本釘植しており、咬耗度はMartinの3～4度である。乳様突起は発達していない。熟年後半の女性と推定される。

西73号墓　前頭骨、左頭頂骨、右頭頂骨の一部、左右側頭骨、上顎骨片と下顎が検出されている。三主縫合は内板では癒合閉鎖をきたしており、外板では癒合は進んでいるものの一部閉鎖をきたしていない。骨口蓋の切歯縫合は消失している。乳様突起は発達しているようで下顎骨も大きい。歯牙にはエナメル質減形成が認められ、咬耗度はMartin の3度である。熟年男性と考えられる。

西74号墓　顔面頭蓋は完存し、脳頭蓋は右側頭骨片、後頭骨片、頭頂骨片と下顎骨が残っている。前頭部は膨隆し、眉弓と眉間の突出はあまり著明でない。頭蓋縫合は内板では閉鎖をきたし、外板でも閉鎖が進行している。また、前頭縫合の残存が認められる。歯牙は上顎、下顎ともに左上顎第3大臼歯を除き、すべて釘植している。咬耗度はMartinの1～2度である。壮年女性骨と考えられる。

西75号墓　頭蓋骨は前頭骨の一部、左側頭骨、右側頭骨の一部、後頭骨、上顎骨 、下顎骨片が検出されている。三主縫合では内板は閉鎖しており、外板もほぼ閉鎖している。頭蓋骨の内側には陥凹が認められ、後頭骨の底部にも結節状の骨の隆起が認められる。眉弓と乳様突起は発達している。後頭部の外後頭隆起は突出し、項面のレリーフも粗造である。壮年後半～熟年男性と考えられる。

西76号墓　頭蓋は左側頭骨、後頭骨、左右頭頂骨などの一部を欠くが、ほかはほぼ完存している。冠状縫合と人字縫合の一部では内板・外板ともに閉鎖している。眉弓と眉間は突出しており、乳様突起も発達している。下顎骨は完存しており、ほとんどの歯牙が釘植している。歯牙の咬耗度はMartinの3度である。熟年男性と考えられる。

西77号墓　頭蓋は前頭骨、左右の頭頂骨と側頭骨、上顎骨片が検出されている。三主縫合は内板、外板ともに閉鎖している。前頭部はよく膨隆し、四肢骨は華奢である。
老年女性と推察される。

西78号墓　前頭骨、上顎骨、頬骨、左側頭骨、右錐体、右頭頂骨片、後頭骨片が検出されている。下顎骨も右側の一部を欠くが検出されている。冠状縫合は内板・外板ともに未閉鎖である。前頭部は膨隆しており、下顎骨は華奢である。大坐骨切痕は大きく、関節旁溝が認められる。歯牙の咬耗は進んでおらずMartinの1度である。壮年女性であると考えられる。

西79号墓　頭蓋は前頭骨の右側片、後頭骨、右側頭骨、左錐体、右頭頂骨が検出されている。三主縫合の内板は閉鎖しかけているが、外板は未閉鎖である。乳様突起は発達が悪い。下顎骨は左側の大部分を欠く。歯牙は右第1大臼歯以外は脱落して歯槽も閉鎖している。右第1大臼歯部では歯槽が退縮しており、臼歯の歯根部が露出している。咬耗はMartinの1度とあまり進んでいないが、歯牙の脱落が著明なことから高齢者をうかがわせる。四肢骨は華奢である。頭蓋は年齢算定の根拠となる部位が残存しておらず、年齢査定は困難であるが、熟年女性ではないかと考えられる。

西80号墓　頭蓋は頭蓋底と左頭頂骨の一部を欠くが、ほぼ完存している。眉間と眉弓の隆起は著明で、前頭部はそれほど膨隆しない。乳様突起と外後頭隆起はよく発達している。項面のレリーフは粗造である。三主縫合の内板は閉鎖しており、外板では矢状縫合は癒合閉鎖が進んでいるが、冠状・人字縫合は未閉鎖である。前頭縫合が残存している。上・下顎ともに歯牙は半分ほど釘植しており、エナメル質減形成が認められる。歯の咬耗度はMartino 2～3度である。熟年男性と思われる。

3.埋葬肢位・埋葬方位などについて

埋葬肢位については表1にまとめたので、参照いただきたい。ほとんどすべてが座位による埋葬であった。人骨の検出状況を詳細に検討した結果、埋葬時にどちらを向いて埋葬していたかを大部分の近世墓で明らかにすることができた（図1）。なかでも、注目に値するのはA-1区西の北西に位置する近世墓である。北端の墓穴に埋葬された人骨は南側を向き、その南に位置する2～3列の墓穴に埋葬された人骨は西側を向いて埋葬されていたことが明らかになった。この方向性から墓道の存在が示唆される。詳細は紙面の都合で割愛するが別途機会をみて考察を加えたい。

今回検出された人骨の中には骨病変を示唆するものが多い。近世墓によく見られる疾病の骨も検出されているが、これについても別途機会をみて詳述したい。

4.おわりに

稿を終わるにあたり、本人骨の検討の機会を与えていただいた安来市教育委員会の関係各位、とりわけ人骨の図面作製、取り上げ、検討にあたってご協力いただいた金山尚志氏、安来市和鋼博物館の三宅博士氏に御礼申し上げる。

まとめ

これまで、安来市宇賀荘町所在の清水大日堂裏古墓群の調査の概要を述べてきた。調査は当初の予想を上回る多数の埋葬関係遺構などを検出した。以下若干の所感を記して、報告のまとめとしたい。

遺跡がある丘陵に立つと南には最寄りの清瀬の集落、その背後には中国山地の山並みが遠望される。一方、西に目を転じると、間近に雲樹寺の森が、その向こうに安来の市境や中海、さらに島根半島の東部分が遠望される。この地は俗に「はかやま」とも称されていたが、遺跡名称ともなった「清水」は遺跡の北方2㎞にある清水寺に因んだ通称名であり、「大日堂裏」とは丘陵の北裾の小さな仏堂に因むものである。さらに谷を隔てた北方の丘陵には「新御堂」の名もみえており、それらの名が示すように、今回の調査で明らかになった遺構群も、仏教的色彩の濃いものであった。

それら検出した遺構を、調査地区毎にまとめると以下のごとくなる。

A区丘陵では、斜面部と尾根上で検出したものとに大別される。斜面部のものとしては、北側と南側で、横穴を各１穴検出している。北側のものは後世の撹乱を受け、これに伴う遺物も認められなかった。南側で検出したものは、周辺の地盤が脆弱であったことから、天井部は崩壊し、多量の流入土が堆積していたものの、内部では埋葬当初の状況を確認することができた。この横穴の特筆すべきこととしては、前庭部が東西6.74ｍ、南北9.17ｍと極めて大きいこととともに、北南両横穴の特徴は他例のように群を構成せず、単独で営まれたことであろう。

A区丘陵の尾根上で検出し遺構には、ＡⅠ東区1～32・34～54号墓、ＡⅠ中区1～37号墓、ＡⅠ西区1～80号墓、さらにＡ西81・82号墓、ＡⅡ区1～4などの埋葬遺構の他、礎石建物跡ＳＢ01などがある。

ＡⅠ東区で検出した土壙群のうち、仰臥伸展葬と推定される平面長方形のものは所属時期が弥生時代末から古墳時代に及ぶものであったが、これらの配置には、一定の傾向が認められた。つまり、埋葬位置が、尾根の中央にあって、土壙の主軸方位を尾根筋に直行させるか、あるいは沿わせている点が注意さる。これらの中心的位置を占めるのが、11・10・9・8・7号墓であった。そのうち2・16・14・23号墓を例外として除けば一定のまとまりが認められる。それらの下限は20号墓の南西端で検出された土坑出土の土器が古墳時代前期末と考えられた。それに続くのが29～32・34～42・53号墓で、これらは、平面隅丸方形の掘方の土壙で、形態から坐位埋葬であったと推定される。いずれも、深さ1ｍ未満と比較的浅い。埋葬時期は32号墓で、元豊通寶(北宗銭・1078年初鋳)が、また42号墓では政𠰘通寶(北宗銭・1111年初鋳)があり、12世紀初頭を遡らない頃と考えられた。ただし、各土壙の人骨の残存状態が極めて悪い中にあって、42号墓のみ人骨の残存状態が極めて良好であった。出土人骨による埋葬形態の復元の検討を依頼した井上先生の所見によれば、42号墓の埋葬形態

は近世墓の類例と大きく異なるところはなく、近世人骨であろうとされている。渡来銭の伝世期間も含めて検討すべきことといえよう。近世墓は43～54号墓としたもので、土壙底部に人骨が認められ、残存状態は比較的良好であった。各土壙とも「寛永通寶」や国産陶磁器など、埋葬時期を示す副葬品がみられた。これらの分布をみると、中世墓は尾根の中軸線に沿って、近世墓は中軸線より北側の丘陵傾斜変換点付近にまで及び、その範囲は長径8ｍ、短径6ｍに止まっていた。何故狭い範囲に密集させる必要があったのか注意されるところであった。また、ＡＩ東区47号墓のように、被葬者の頭部を容器で覆う例が認められたことも興味深い事実といえよう。

Ａ中区では、計27基の埋葬施設を検出した。そのうち1～12号墓は仰臥伸展葬で、Ａ区東の仰臥伸展葬用の土壙よりやや細長い掘方となっている。Ａ区東の中央部の土壙と比較すると、前者が二段掘りであるのに対し、素掘土壙であるところが注意される。これらの土壙は副葬品は少なく時期の決定に耐える遺物は認められないが、6号墓上面の須恵器杯をこれに伴うものとすれば、9世紀代頃のものということができよう。

Ａ中13～20号墓は近世墓と考えられるもので、埋葬形態は坐位埋葬と判断された。整然と２列に並んでおり、いずれも配列が意識されていたことを窺わせた。ただ、これらの土壙には浅いもの、深いものとの二者があったことは、前述したＡＩ東区29号墓など比較的浅い土壙の所属時期と合わせ検討すべき内容といえよう。

ＳＢ01は、平面コの字形に廻らされた区画溝の中央で検出した、納骨堂と推定される建物跡である。[3] この建物の北辺及びＡ西区の北方で、火葬骨を伴う土壙が集中して認められた。ＳＢ01がいつまで存続していたかは不明であるが、Ａ区中区の近世土壙が、SB01と重複を避ける形で配列されていることは重要であろう。ＳＢ01は、後述するＡ西区をも含め一連の埋葬遺構のなかにあって、象徴的建物であったことを窺わせた。そのなかの火葬墓で、注意したいのが中22号墓である。これは、ＳＢ０１の東域を画す溝の壁に穿たれたもので、他の火葬墓とは趣を異にしている。ここで注意すべきは、溝の中に堆積した土に火葬骨が埋葬されていることである。これは、中22号墓の埋葬が、納骨堂としての機能を果たさないほど荒廃した時期に止む無くおこなった行為ではなかったかとも想像される。堂そのものが朽ちても、ＳＢ01が存在した区画に対する意識が存続していたことを窺わせた。

Ａ西区では、80基に及ぶ多数の土壙を検出した。この調査区は他に比較すると、極めて密集度が高く、そのうち64基に人骨が残存していた。これらの土壙が掘り込まれている平坦面の下層には、石製五輪塔の部分が認められ、盛土を施して埋葬地が造成されたことが知られる。

ここで検出した土壙群からは、銭貨・煙管・鋏・櫛・鎌・剃刀・包丁・燧金・陶磁器など各種の副葬品が出土し、近世の多彩な葬送儀礼の一端が窺えた。これらの土壙には、鉄釘を全く伴わない

もの、伴っても数が極めて少ないものがかなり認められた。どのような構造の棺であったのか今後、検討を要す問題といえよう。(5)

ＡＩ東、ＡＩ中、ＡＩ西の各調査区をとおしていえることは、東に埋葬するに足りる空間があるにも関わらず、東から西に向かって密集度を増していっていることである。しかもＡＩ西区においては、埋葬のための造成まで行われていることから、西方域がかなり意識されていたことを窺わせている。

ＡⅡ区では、土壙、1～4号を検出した。これらは、平面隅丸方形を呈す比較的浅いもので、Ａ西81号墓やＡＩ東区29～32号墓と類似点が多い。副葬品も認められないことから、所属時期については、近世の土壙群とはかなりの距離をおいて掘り込まれており、群構成も異なることから、人骨が遺存する近世土壙よりも古いと推定された。

ところで、Ａ西区中央やや南よりで検出した土坑で、山陰の須恵器編年のＩ期に相当する須恵器及び土師器高杯を得ている。(6) これと同様なものとしては、Ｂ区１号墳の溝内出土の土器群がある。Ａ中区SB01と重複して認められた平面弧状を呈す溝内からも、同様な時期に属すとみられる土師器高杯が出土している。弧状に廻ったであろう溝は古墳の周溝の一端であったことが想定される。したがって、Ａ西区の山陰の須恵器編年Ｉ期の土器群が出土した土坑は尾根筋にあった墳丘が削平され、溝内のにおかれていた遺物がかろうじて残ったものと推定される。ＡⅡ区の西端にあった小円墳、さらに調査区外に連なる古墳も同様な時期に属すものと判断された。

Ｂ区の調査では、一辺10ｍを測る方墳1基の他、中世と考えられる荼毘跡さらに多数の火葬墓、掘建柱建物跡、柵列跡、井戸跡などを検出した。このＢ区で検出した遺構の大きな特徴は、多数の埋葬遺構のうちＢ１号墳を除き、いずれも火葬に関わるものに限定されることであった。そして、それらが南側斜面に限定された形で存在していたことである。また、Ｂ1号墳裾から出土した石製五輪塔の破片がＡ中区の石製五輪塔の一部と接合ができたことは特筆すべき内容であった。これは、ある時期まで、Ｂ区にあった石製五輪塔がＡ区に移動されたことを思わせた。一連の遺構からみると、Ｂ区には火葬墓、Ａ区では土葬墓（土壙）と火葬墓とが共存しており、遺物による両者の時期的相対関係は、Ｂ区（古）～Ａ区（新）ということになろう。ただし、Ｂ区の埋葬関連遺構が、Ａ区側斜面に限定されていることからすると、Ａ中区のSB01は既に存在し、両者は視覚的に見通せる場所に置く意図があったと考えられ、この点SB01が、遺跡内において扇の要的存在であったったことを窺わせている。ところで、Ｂ区出土の類例の少ない遺物として、陶製五輪塔がある。この遺物は今のところ、全国的な出土は１０件と、きわめて少ないことが注意される。今後の類例をまって、この地方における採用の意味を考えていく必要もあろう。(8)

このように今回は、道路建設という丘陵の一部を対象とした調査であったにもかかわらず、弥生

時代末から古墳時代、さらに中世から近世にかけての極めて広範な時代幅の中で、埋葬遺構群を単位別にその輪郭を捉えることが出来た意義は大きい。A区中で検出した納骨堂と推定したＳＢ01のような例は県内でこそ少ないが、全国各地で中世に形成された納骨霊場の一例といえよう。(9)

今回明らかになった宗教的空間の形成に、清水寺、雲樹寺という山陰を代表する古刹が大きく影響したであろうことは、想像に難くない。古代は別にしても、中世～近世にかけての埋葬地として、占有され続けた理由もそこにあったといえよう。それに加え、近世の埋葬に関わる遺構で、遺存状態が比較的良好な人骨を多数検出した例は、市内はもとより、県内においても他に例を見ないものであった。良好な埋葬関係資料を得、被葬者の性別、年齢、副葬品とのセット関係も含め、近世農村集落内において究明されなければならない課題は多いことを記して、安来市宇賀荘町所在、清水大日堂裏古墓群の事実報告としたい。

参 考 文 献

(1) 平瀬據英「盆の先祖祭とナマボトケの問題」『仏教と民俗』2号　(昭和33年)

「盆前に死にたる者には抱六(焙烙)を冠らせて葬る也。さるは途中にて聖霊に行き違う時に、我々は娑婆へ行くを、何とて冥土に来るぞといいて頭を叩く也。其時抱六無くては、頭を痛む也とぞ」「三河国吉田領風俗答書」を引用し、被葬者の頭に容器をかぶせる意味を説明している。ナマボトケが頭を叩かれたうえ、精霊の荷物役となる伝承は鳥取県八頭郡若桜町吉川の例が報告され、同様な伝承は国内に広範に分布している。遺跡での例として群馬県『下高瀬上之原遺跡』〔関越自動車道(上越線)〕地域埋蔵文化財発掘調査報告書第27集(平成6年3月)があることを津金沢吉茂氏の教示によって知った。

(2) 柳浦俊一「出雲における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』第3号(昭和55年)を参考にすれば8世紀後葉から9世紀後葉とされている。

(3) 納骨堂に関する絵図として、『史跡称名寺境内庭園苑池保存整備報告』横浜市教育委員会（昭和55年)などがある。また奈良県元興寺極楽坊には、木製の小さな五輪塔や竹の筒を利用した納骨容器が保管されてい。A区ＳＢ01で検出した火葬骨片は同様な容器に納められていたものと推定される。

(4) ＡＩ東区35号墓付近、及びＡＩ西区51号墓から出土した鉄製品は、燧金と判断された。炭素量の分析を日立金属（株）安来工場付属冶金研究所と和鋼博物館佐藤豊副館長の協力を得ておこなった。広瀬町所在の富田八幡宮に江戸時代から伝世する燧金も同時に分析し判断の基準とした。富田八幡宮のものはＣ1.5～1.2％、片面はマルテンサイト、片面はパーライトトとなっており、火花の出るところを選んで使用しているとのことである。

ＡＩ東35号墓付近出土の鉄器はＣ0．06％となっており、焼き入れをすることは困難と判断した。ＡＩ西51号墓出土の鉄器はＣ1．14％を測り、マルテンサイトの状態となっている。富田八幡宮のものと比較すると若干Ｃは低いが、燧金として使用することは可能であったと推定される。

(5) 出雲市姫原町所在の姫原西遺跡(Ｃ区・平成8年度の調査)の埋葬例では、底は細木と竹を組み、莚を敷き、厚さ5㎜の側板を組み、釘を使用していないことを足立克巳氏の教示によって知った。この所属時期は16世紀代と考えられている。さらに、棺に釘を使用しない例として、御輿棺呼ばれるものがあり、その好例が『福正寺北遺跡群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第87集(平成2年)にあることを篠原芳秀氏の教示によって知った。

(6) 山本清「山陰の須恵器」『島根大学開学10周年記念論文集』(昭和35年)

(7) Ｂ区1号墳出土の鉄剣について成分分析を行い、Ｃの含有量は0．32～0．38％で、焼入れは困難と判断された。また、バナジューム、チタンが認めらないことから、岩鉄系の鉄原料であろうと推定された。

(8)『陶製五輪塔』(財)元興寺文化財研究所　(平成7年10月)、『大畑・桧山腰窯跡』発掘調査報告書平成3年秋田県南外村教育委員会には13世紀中頃から後半にかけての窯跡の報告例がある。

(9) 藤沢典彦「日本の納骨信仰」『仏教民俗学体系』4 (昭和63年)

納骨五輪塔による寺院への納骨は、中世においてはなり普遍的に行われたとして、福島県合津八葉寺では現代もなお継続していることを紹介されている。

遺跡遠景（北方より）

B区近景（西方より）掘削頂部がB１号墳

A 区 南 横 穴 前 庭 部 （ 南 方 よ り ）

A 区 南 横 穴 前 庭 部 （ A Ⅰ 区 丘 陵 上 よ り ）